昭和54年６月25日発行　隔月25日発行　第３巻３号　通巻９号

EURO ROCK MAGAZINE

Fool'sMatE

✦Occultism✦

Vol. 9

UK Interviw & Others

Ashra

Magma,

Heldon,

David Bowie,

Shingetsu,

Al Stewert,

etc……

特集　オカルティズム幻想

Fool'sMatE フールズメイト ✦Occultism✦ 特集オカルティズム 新月 アシュラ U.K.・フランス・ロック

ロマンと戦慄のロック・シンフォニー!

日本初の本格的
ライブ・バンド
デビュー

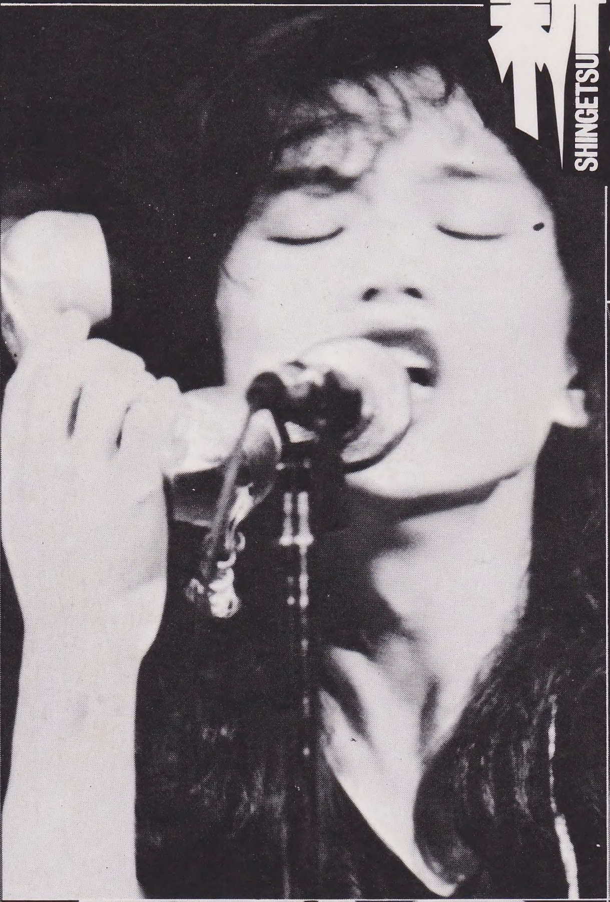
新月
SHINGETSU

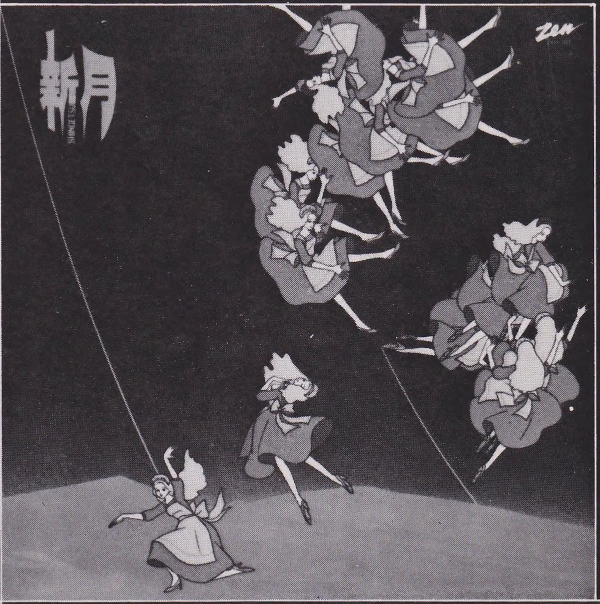
デビュー・アルバム
新　月 ●鬼●朝の向う側●発熱の街角
●雨上りの昼下り●白唇
●魔笛"冷凍"●科学の夜
●せめて今宵は
ZEN-1009
¥2,500 7月25日発売

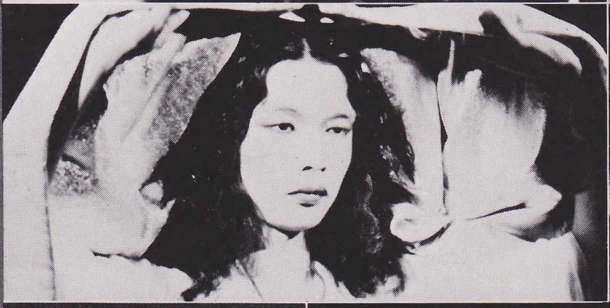
Zen

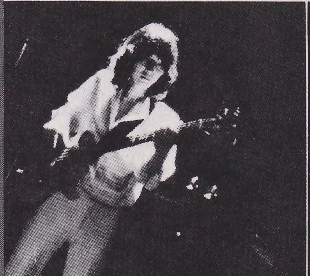
新月の素晴しさを、単に"スーパー・グループ"などという月並な表現で語ることはあまり意味がない。新月の卓越した音楽は、ロックの表面的なパワー、攻撃性といった次元よりも、もっとずっと深い場所から構築されたものである。

謎めいた暗黒の入口、夢の世界を往還するような眩めくファンタジア、超現実空間を誘発する追想のポエジー……
新月は、まさに僕らの時代が生んだ最も新しく、最もプログレッシヴなロック・グループだ。



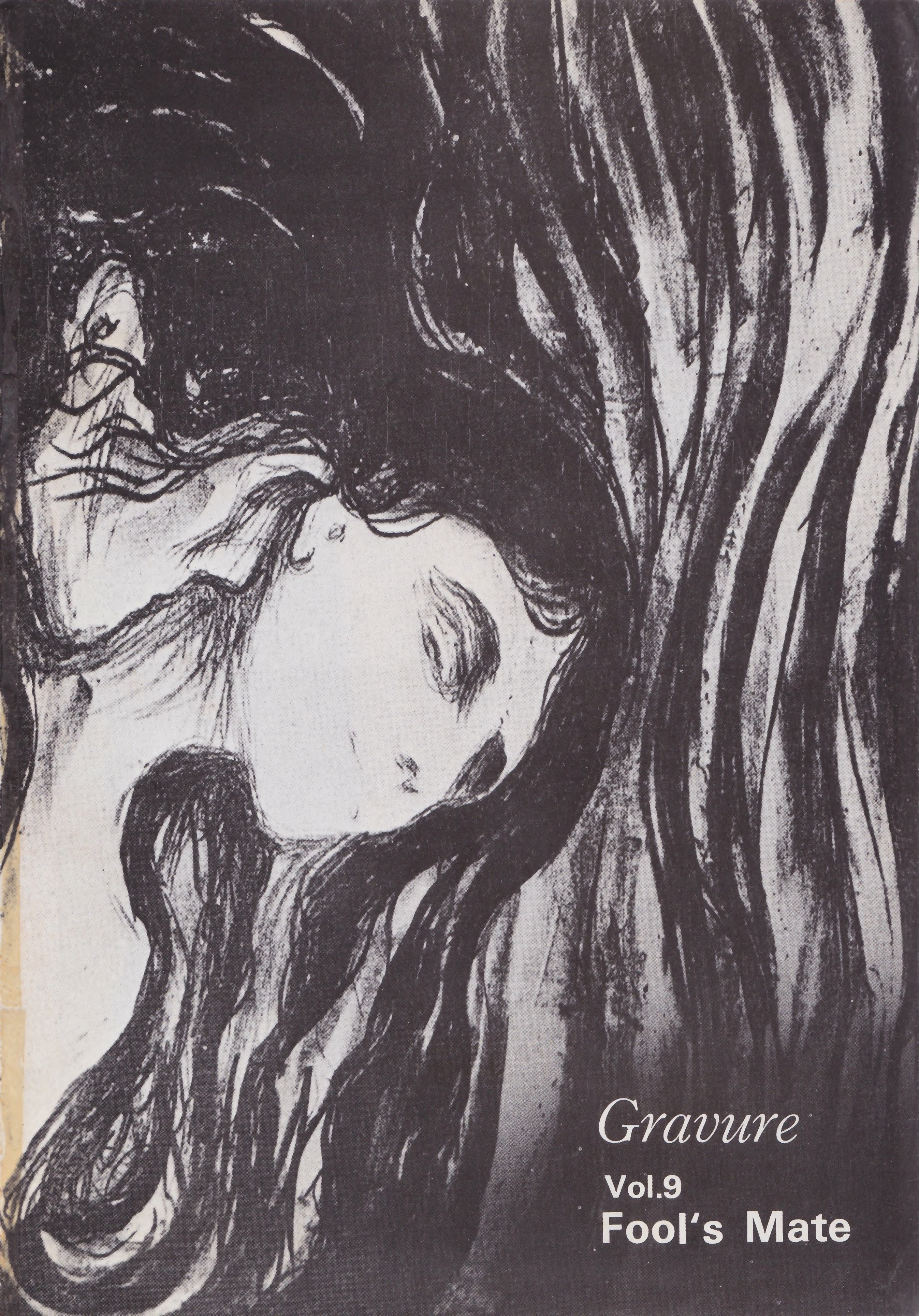






新月ファースト・
コンサート
7/25(水)**26**(木)
芝ABC会館ホール■6:30開演
■¥2,000全席指定
★お問合せ・電話予約/MSコンサートコーナーTEL(03)341-3331
★チケットは
都内プレイガイドにて発売

発売元 ビクター音楽産業株式会社



Gravure

Vol.9

Fool's Mate

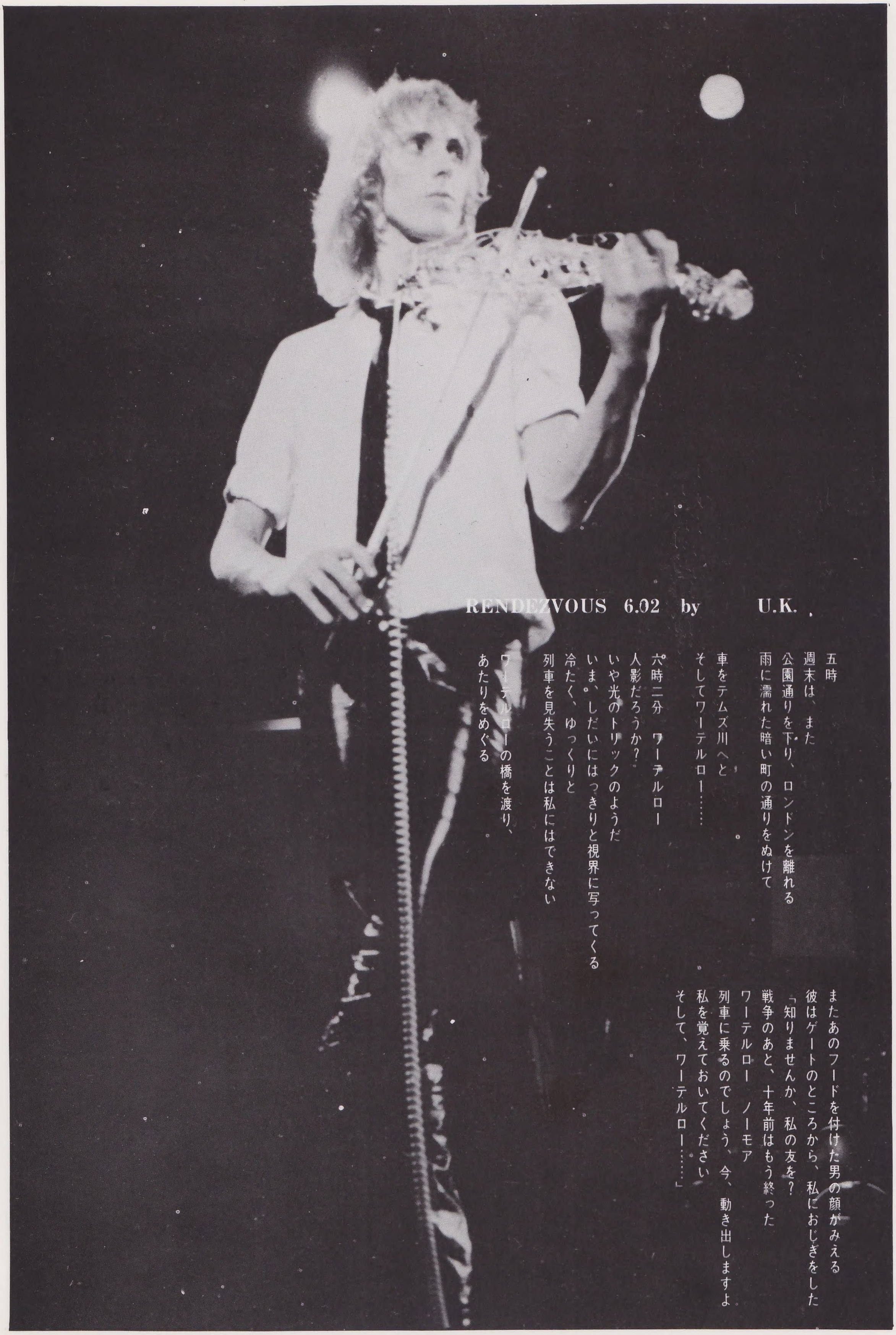
D.J. by David Bowie

自己安住、本質的な仕事せず、不治の病人
きみはこれを安直な現実主義と思っている
女友達は外にいてね、たぶんいま踊ってる
ぼくは寝たきりの貴公子ってところ
女の子は踊ってるよ、知らないけど

ぼくはD・J
ぼくのかけるレコードがぼく自身
ぼくは回らない、ぼくは回れない
ぼくはD・J・なんだから
ここにデンとしてるだけ
ぼくのかけるレコードがぼく自身
回らない、回れない

でもぼくには信奉者が沢山いてね
ぼくを信じきってるんだ

さて、また、楽しい週末
夜のあかりに、くつろいだ顔々
わだしげなハンバーガー・ショップ
屈辱の味か、人生の苦みか
ぼくはD・J
ぼくのかけるものがぼく自身
ぼくは回れない
でも信奉者が沢山いて
ボスはいまではぼくの言うなり
ぼくのあやつり人形さ



RENDEZVOUS 6.02 by U.K.

五時
週末は、また
公園通りを下り、ロンドンを離れる
雨に濡れた暗い町の通りをぬけて

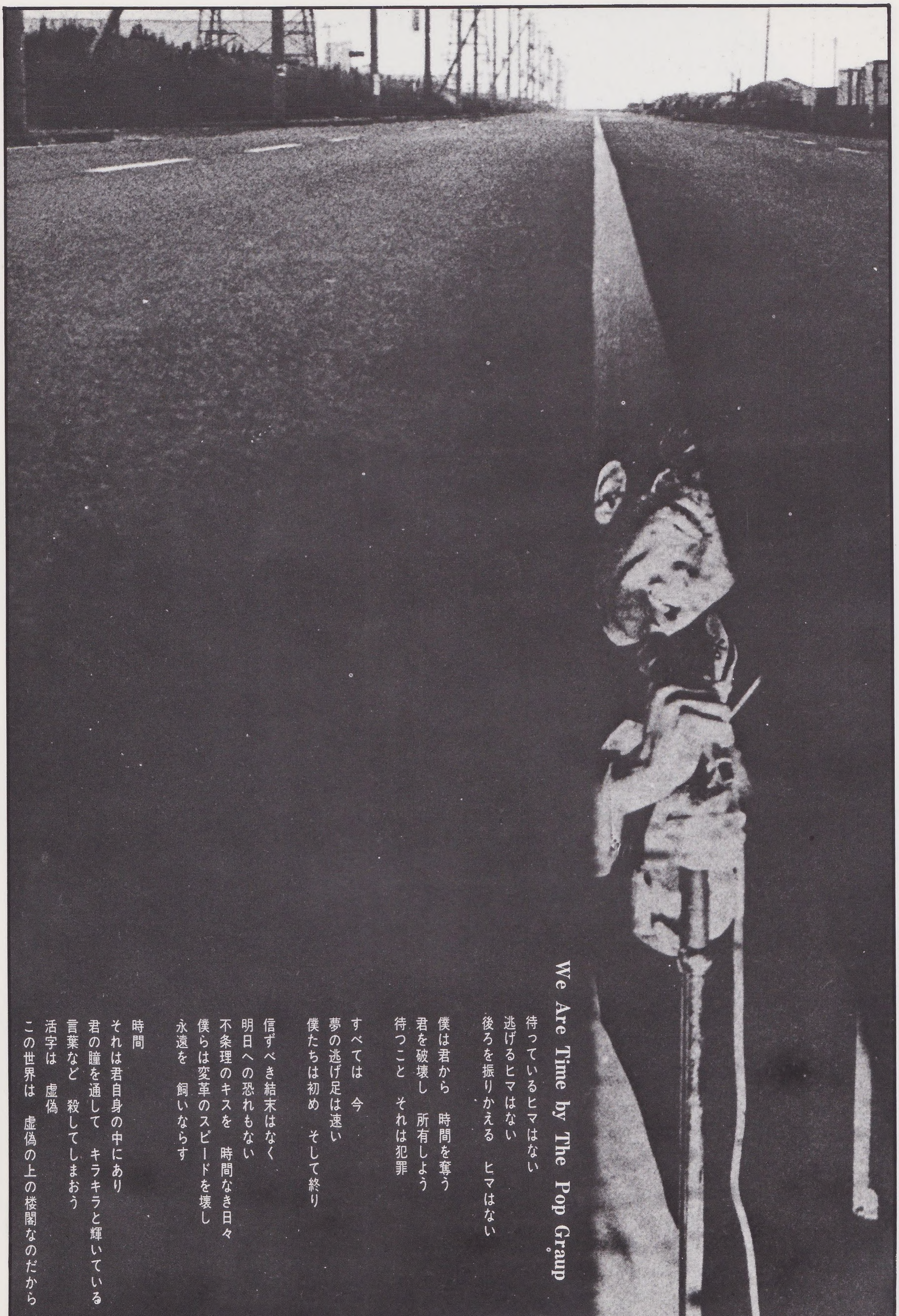
車をテムズ川へと
そしてワーテルロー……

六時二分　ワーテルロー
人影だろうか？
いや光のトリックのようだ
いま、しだいにはっきりと視界に写ってくる
冷たく、ゆっくりと
列車を見失うことは私にはできない

ワーテルローの橋を渡り、
あたりをめぐる

またあのフードを付けた男の顔がみえる
彼はゲートのところから、私におじぎをした
「知りませんか、私の友を？
戦争のあと、十年前はもう終った
ワーテルロー　ノーモア
列車に乗るのでしょう、今、動き出しますよ
私を覚えておいてください
そして、ワーテルロー……」

Magazine



We Are Time by The Pop Graup

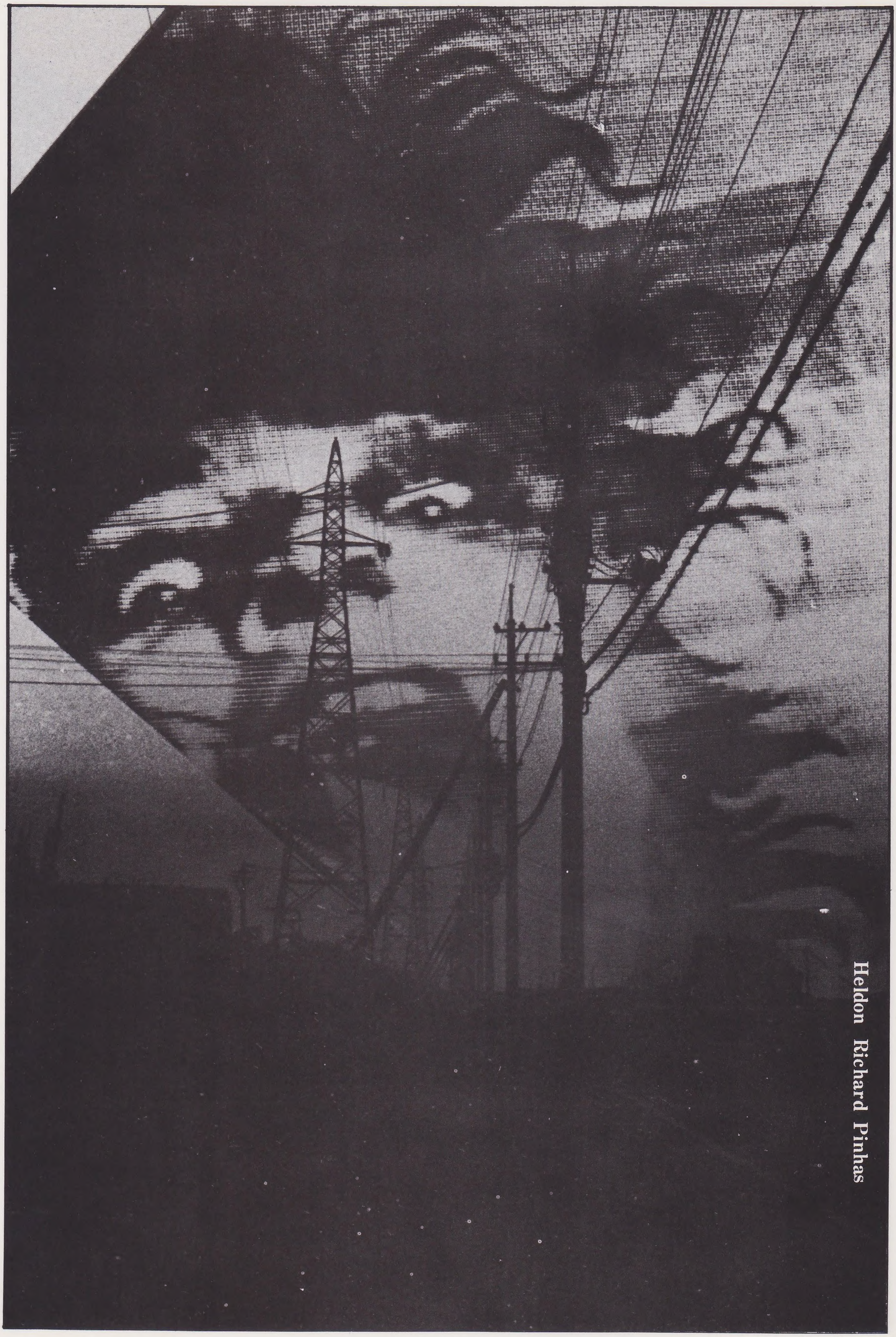
待っているヒマはない
逃げるヒマはない
後ろを振りかえる　ヒマはない

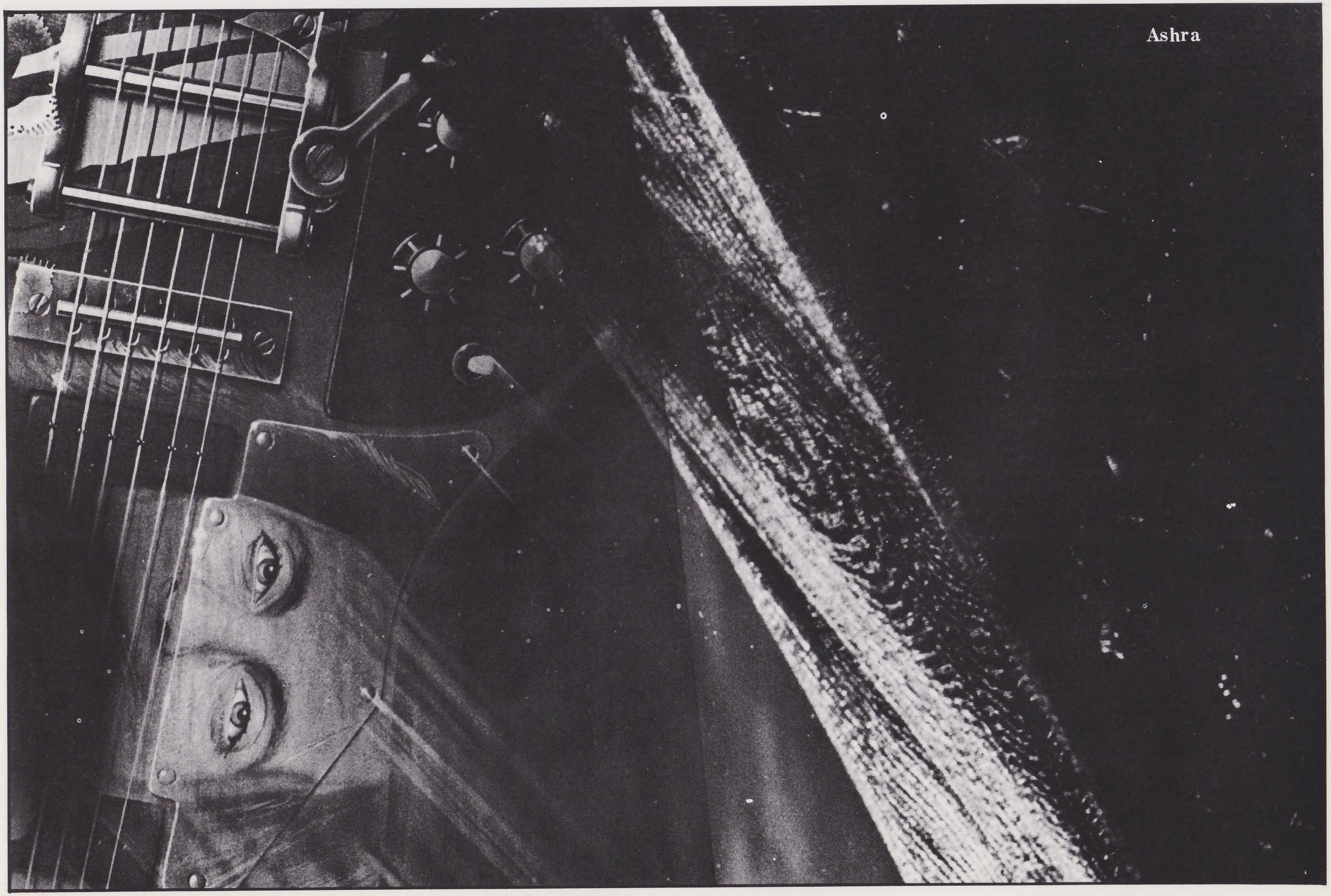
僕は君から　時間を奪う
君を破壊し　所有しよう
待つこと　それは犯罪

すべては　今
夢の逃げ足は速い
僕たちは初め　そして終り

信ずべき結末はなく
明日への恐れもない
不条理のキスを　時間なき日々
僕らは変革のスピードを壊し
永遠を　飼いならす

時間
それは君自身の中にあり
君の瞳を通して　キラキラと輝いている
言葉など　殺してしまおう
活字は　虚偽
この世界は　虚偽の上の楼閣なのだから


Heldon Richard Pinhas



Ashra

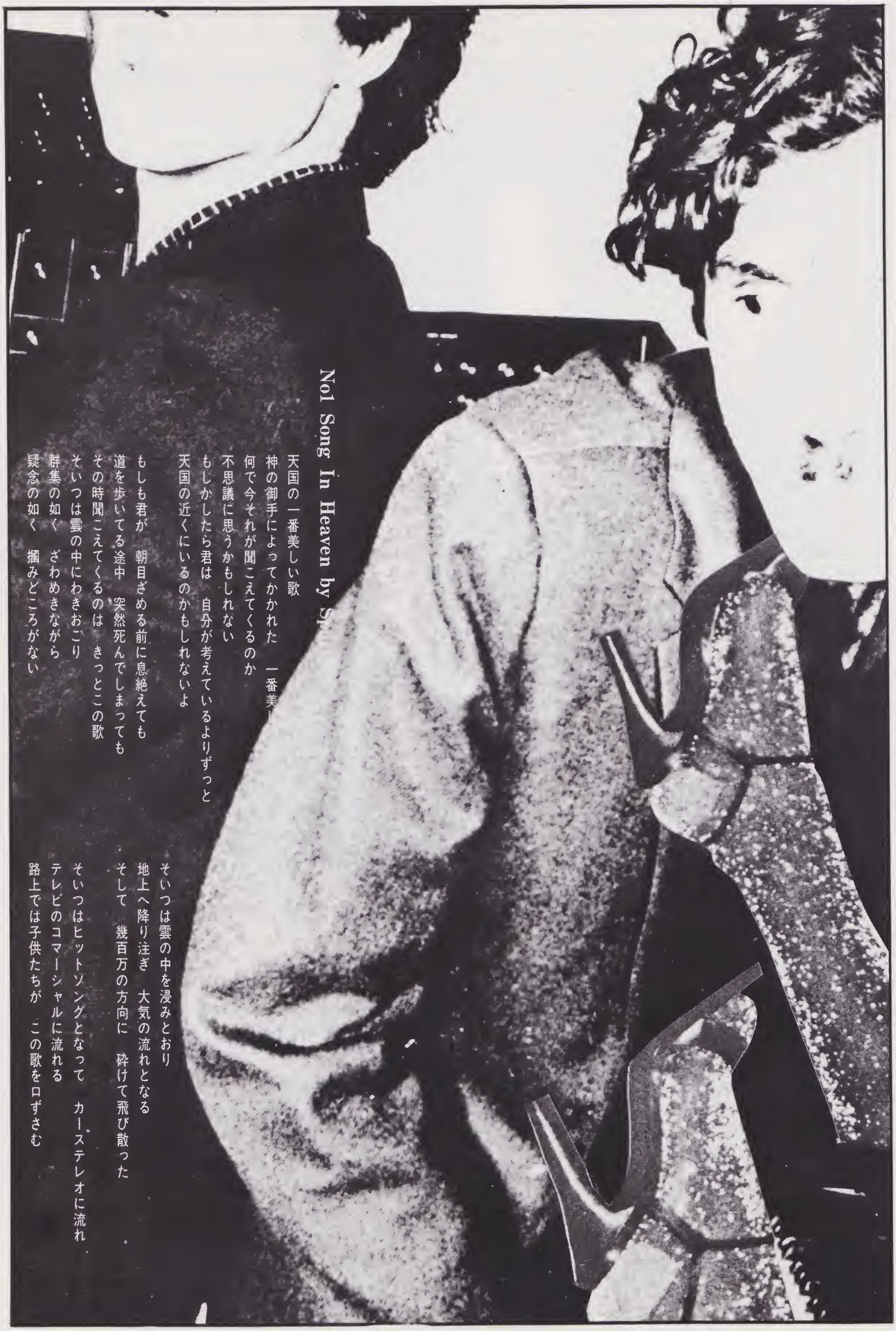
You Burn Me Up I'm A Cigarette

by Robert Fripp

煙草を喫うように
君は僕を　燃し尽くす
君との暮らし　それは　敗者の賭け
そして僕は　正気を失う
なんと刺激的な法悦　そして生きながらの悟り

戦略的な相互作用　もう割ることのできない分数
最終的な無活動　敵意に満ちた分裂
不安はつのり　僕はもう半狂乱
役にたつものは　対称療法のみ

煙草を喫うように
君は僕を　燃し尽くす
うわの空の僕を　君はなじる
賢者は一体　何を言おうとしたのか
賢者は何を　見たのだろうか
音楽的な高揚　それだけか
僕のたったひとつの
慰めだ



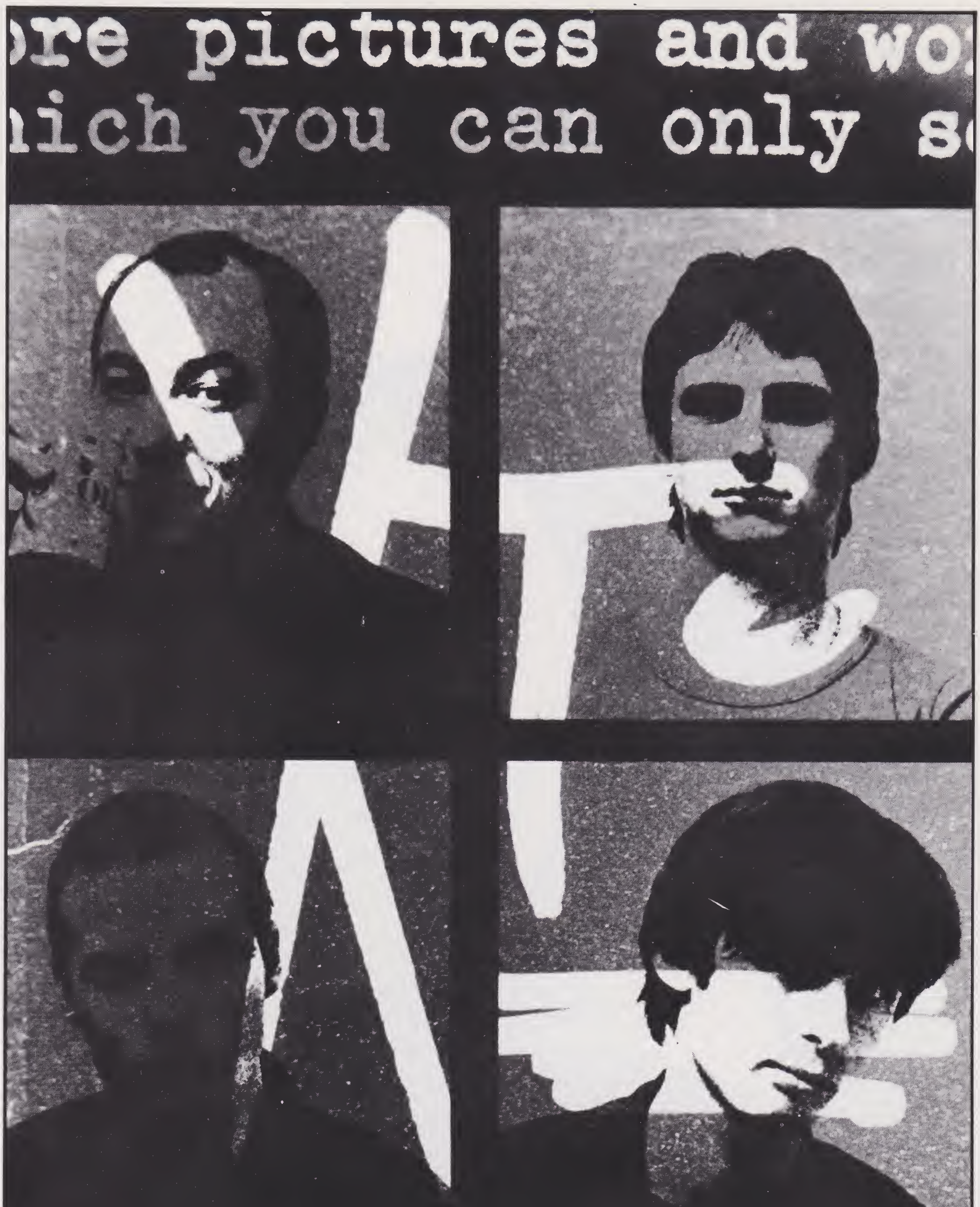
No1 Song In Heaven by S

天国の一番美しい歌
神の御手によってかかれた　一番美し
何で今それが聞こえてくるのか
不思議に思うかもしれない
もしかしたら君は　自分が考えているよりずっと
天国の近くにいるのかもしれないよ

もしも君が　朝目ざめる前に息絶えても
道を歩いてる途中　突然死んでしまっても
その時聞こえてくるのは　きっとこの歌
そいつは雲の中にわきおこり
群集の如く　ざわめきながら
疑念の如く　掴みどころがない

そいつは雲の中を浸みとおり
地上へ降り注ぎ　大気の流れとなる
そして　幾百万の方向に　砕けて飛び散った

そいつはヒットソングとなって　カーステレオに流れ
テレビのコマーシャルに流れる
路上では子供たちが　この歌を口ずさむ


ore pictures and wo
hich you can only s
astly we would like
roduct of Virgin Re

バスティーユ宮殿の防壁から
煙がモクモクとあがって
パリの表通りには
非現実的な雰囲気が漂っている
王達はみな過去に葬られ
召し使い達の姿もすでに消えている
我々はロベスピエールの名のもとに
彼らの屋敷を全て灰にした
そして今でも
新しい月が始まるのを待っている日
我々の時は風の中に無意味に流されてゆく
なぜだろうか
なぜだろうか、なぜそれは淋し気なヴェルサイユ宮殿
の向こうからこだましてくるのだろうか

Palace of Versailles by Al Stewart

今、Bowieを
どう受けとめるかで
80年代サバイブが決まる。

世界を棲家とする英知精鋭なる間借人ボウイーが、強烈な感性で描き出すサウンド・バイブル。聴けば聴く程深い精神宇宙が拡張する。

ロジャー(間借人)
デビッド・ボウイー

●RVP-6390　RCP-1604　各¥2,500

曲目★素晴しき航海
★アフリカン・ナイト・フライト
★ムーヴ・オン
★ヤサシン(長寿)
★レッド・セイル
★D.J.(僕はD.J.)
★怒りをこめてふり返れ
★ボーイズ・キープ・スインギング
★レピティション
★レッド・マネー

[録音場所] マウンテン・スタジオ(モントルー、スイス)

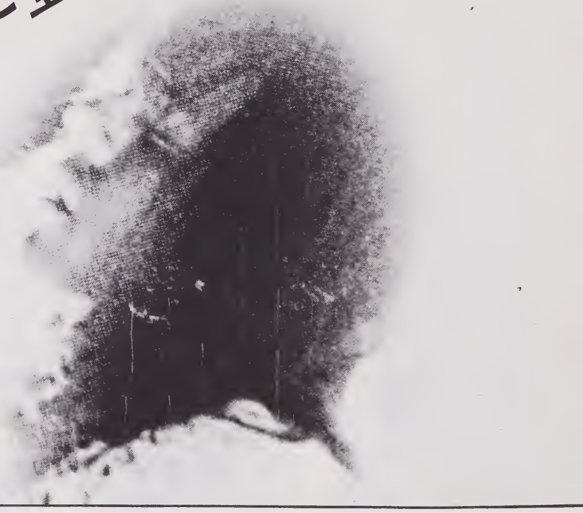
[プロデュース] デビッド・ボウイー&トニー・ヴィスコンティ

[メンバー] ブライアン・イーノ、カルロス・アロマー 他

RCA Records and Tapes

発売元 RVC株式会社

プログレ界に絶えず問題を投げかける夢の弦楽師クラウス・シュルツが世に問う幻の名盤、遂に登場!!



KLAUS SCHULZE

イルリヒト
クラウス・シュルツ

曲目：火の章／地の章／幻想の章

■SUX－157－EB ¥2,500

ピクチャー・ミュージック

■UXP－677 ¥2,300 EB

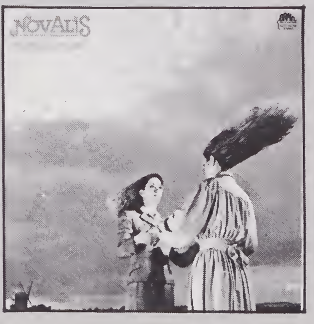
ムーンドーン

■SUX－120 ¥2,300 EB

サイボーグ

■UPS-670～1－EB (2枚組) ¥4,000

愛の抱擁によって、ひとり星人すら生まれてしまう幻想こそ、ノヴァリスの世界だ！愛とロマンの夢先案内人、ノヴァリス待望のニュー・アルバム、ここに登場!!



夢譚
ノヴァリス

曲目：夢の弦楽師／ジンカレスカ／織々の雨／道化師夢譚／北の街／移りゆく世界

■SUX－152－EB ¥2,500

BRAIN metronome

ブレインレコード

発売元・テイチク株式会社

Fool's Mate Vol.9 *Occultism*

目次

特集 オカルティズム幻想

オカルティズム——ミスティシズム 蛭海 鴻志 —— 21

内体験と音楽

吸血鬼——彷徨う血塗られた聖者たち 舘山 百合子 —— 41

薔薇の闇 磯村 知子

音楽の生命線 渡辺 仁 —— 48

ミクロコスモス——マクロコスモス 山本 雅幸 —— 27

人工迷宮 北村 昌士 —— 17

UK——誕生までの軌跡 —— 58

本誌独占 来日インタビュー U・K —— 52

特集 フランス・ロック PartI —— 65

エルドン&マグマ篇 三津間 功

デヴィッド・ボウイ —— 76

新月 インタビュー —— 78

アル・ステュワート —— 80

ポップ・グループ&ディス・ヒート —— 82

アシュラ・テンプル——エレクトロニクス遊星 —— 60

ブリティッシュ・ロック 秘匿の名盤集② —— 74

輸入盤レビュー —— 84

国内盤レビュー —— 88

Photo/瀬尾俊隆 Max Takahashi

訳/磯村知子 岩谷 宏 山本 沙由理 今野 澄男

特集 オカルティズム幻想

かういふ世界の深みまで降りてゆかない精神が、どうして
作品などという確実な物体に化身することができるものか！
——三島由紀夫

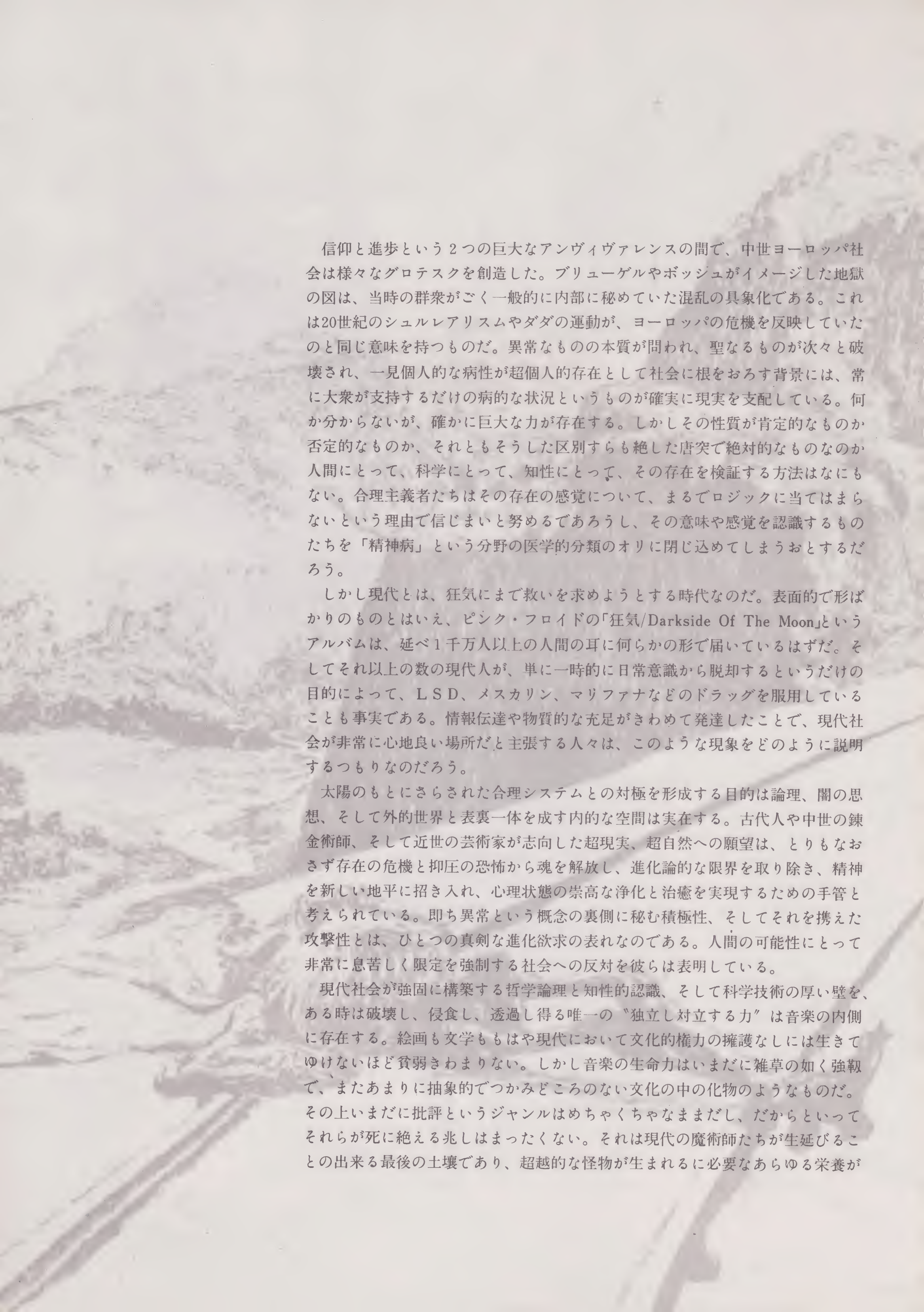
私は特に音楽が好きなわけではありません。音楽は単に魔
法的な状態を作り出すための一手段にすぎないのです。
——ロバート・フリップ

人工迷宮

北村 昌士

すでに御存[illegible]の方も多いと思うけれど[illegible]楽形態[illegible]る種の賞讃を意図する場合、"魔術的""魔法的"とい[illegible]無意識[illegible]る傾向がある。ある側面に於いてすべての音[illegible]は魔法[illegible]ている。今回の特集もこんな僕の独断をより[illegible]ことはいうまでもない。リズム[illegible]メロディ[illegible]要[illegible]の様々な[illegible]わせが空気中の振動を伝って人間の耳[illegible]へ入り[illegible]に生じる反応、この因果関係や特殊な法則が情報に置き換えられ[illegible]送り手と受[illegible]交感の成果が[illegible]な威力を[illegible]音楽メ[illegible]発[illegible]、そして巨大な産業的性[illegible]名の音楽[illegible]俗としての音楽[illegible]音[illegible]はより[illegible]

[illegible]思をたたき込[illegible]カルチャー、実存主義、[illegible]を通過しながら（無論商業性[illegible]メディア[illegible]性格は残念な[illegible]ある種のロックは今[illegible]オ[illegible]ロックの神秘的な性質を際立たせる多くの要因と[illegible]に満ちた[illegible]撃的な志向、そしていうまでもなく彼らの反社[illegible]性格の表出[illegible]される。しかしそれはあまりに未統制であり表面的には[illegible]しているかのようだ。彼らは哲学者でもなければ、宗教家でもなく[illegible]特殊な[illegible]研究者ではない。彼らの無限に湧出する"知"への欲[illegible]"感覚"[illegible]によって形ばかりの主張をようやくあらわにして[illegible]ない。ロック[illegible]あくまで音楽を"演奏"するところに本質がある。[illegible]ラノイアへの憧憬は付加的な側面である。彼らは自[illegible]り確かな形で確認し、エネルギーをより効果的に解[illegible]志向するのである。ロックがオカルティズムに限[illegible]好んで[illegible]込んでしまうという現象の裏側には、とりもなお[illegible]現代の持つ[illegible]的なヴィジョン——即ち危機——が秘[illegible]でいる。その昔、ヨーロッパに[illegible]レアリズムの運動において、「異常なるものの期待は、解放への期待、充[illegible]への[illegible]望」というジュール・モヌロの一節が極めて印象深く記憶されているの[illegible]同じ[illegible]、現代のもつ病的要因をあらゆる角度から照射するための必然的な応用術とし[illegible]また憎むべき世界に敵対するエネルギーの収束術として、反社会的なロックはあらゆる異常を礼讃し、神秘[illegible]、狂気を[illegible]るのである。



信仰と進歩という２つの巨大なアンヴィヴァレンスの間で、中世ヨーロッパ社会は様々なグロテスクを創造した。ブリューゲルやボッシュがイメージした地獄の図は、当時の群衆がごく一般的に内部に秘めていた混乱の具象化である。これは20世紀のシュルレアリスムやダダの運動が、ヨーロッパの危機を反映していたのと同じ意味を持つものだ。異常なものの本質が問われ、聖なるものが次々と破壊され、一見個人的な病性が超個人的存在として社会に根をおろす背景には、常に大衆が支持するだけの病的な状況というものが確実に現実を支配している。何か分からないが、確かに巨大な力が存在する。しかしその性質が肯定的なものか否定的なものか、それともそうした区別すらも絶した唐突で絶対的なものなのか人間にとって、科学にとって、知性にとって、その存在を検証する方法はなにもない。合理主義者たちはその存在の感覚について、まるでロジックに当てはまらないという理由で信じまいと努めるであろうし、その意味や感覚を認識するものたちを「精神病」という分野の医学的分類のオリに閉じ込めてしまうおとするだろう。

しかし現代とは、狂気にまで救いを求めようとする時代なのだ。表面的で形ばかりのものとはいえ、ピンク・フロイドの「狂気/Darkside Of The Moon」というアルバムは、延べ１千万人以上の人間の耳に何らかの形で届いているはずだ。そしてそれ以上の数の現代人が、単に一時的に日常意識から脱却するというだけの目的によって、ＬＳＤ、メスカリン、マリファナなどのドラッグを服用していることも事実である。情報伝達や物質的な充足がきわめて発達したことで、現代社会が非常に心地良い場所だと主張する人々は、このような現象をどのように説明するつもりなのだろう。

太陽のもとにさらされた合理システムとの対極を形成する目的は論理、闇の思想、そして外的世界と表裏一体を成す内的な空間は実在する。古代人や中世の錬金術師、そして近世の芸術家が志向した超現実、超自然への願望は、とりもなおさず存在の危機と抑圧の恐怖から魂を解放し、進化論的な限界を取り除き、精神を新しい地平に招き入れ、心理状態の崇高な浄化と治癒を実現するための手管と考えられている。即ち異常という概念の裏側に秘む積極性、そしてそれを携えた攻撃性とは、ひとつの真剣な進化欲求の表れなのである。人間の可能性にとって非常に息苦しく限定を強制する社会への反対を彼らは表明している。

現代社会が強固に構築する哲学論理と知性的認識、そして科学技術の厚い壁を、ある時は破壊し、侵食し、透過し得る唯一の〝独立し対立する力〟は音楽の内側に存在する。絵画も文学ももはや現代において文化的権力の擁護なしには生きてゆけないほど貧弱きわまりない。しかし音楽の生命力はいまだに雑草の如く強靱で、またあまりに抽象的でつかみどころのない文化の中の化物のようなものだ。その上いまだに批評というジャンルはめちゃくちゃなままだし、だからといってそれらが死に絶える兆しはまったくない。それは現代の魔術師たちが生延びることの出来る最後の土壌であり、超越的な怪物が生まれるに必要なあらゆる栄養が

備わっているオカルティズムの羊水である。音楽の持つ特性は、例えどんな場所であれ空気の振動した際の波が人の感覚を充分に刺激し伝達情報の流入を可能にしてしまう強制的な状態をつくり出してしまうことにあるといえる。最も本能的であり、直観的であり、初源的なレベルの伝達を、最も科学的に、人工的に成し得るという強味をもっているわけだ。

非常に長い前置きになってしまったが、ロック音楽の中に存在する最も動的で重要な要素が、オカルティズムを考える際にも深い同一性を持っていることをどうか分かって欲しい。長い時を経たつたのつるが四方八方に延びてからみ合っているのと同じように、人間の内部に秘む巨大なカオスの〝意味〟と、今日最も有力なメディア・ワークのひとつとしてのロック・ミュージックとは、もはや切って切れない複雑で強固な関連のもとに社会内に存続しているのは、厳然とした事実なのだ。

古代の異教から中世の魔術、占星術、妖術、予言、錬金術、交霊術、秘数学と、あらゆる隠秘主義の反世界的ヴィジョンにインスパイアされたミュージシャンの存在は、現実の世界に立つ我々に不思議な誘惑の光を照射する。「光の世紀」といわれる17世紀を境にして、現実の社会から反世界の信仰系を追放した理性的合理主義の流れは、人間の内的可能性を完全に抑制した状態で、強慢にも科学を所有し、哲学を説き、現代社会の方向性を云々している。

勇敢にも直接的に穏秘主義的方法論を掲げ、反世界のエネルギーを思念的に彷彿させるロック・アーティストは、それらの思想が最も社会的に擁護されていた時代、60年代後半を頂点にして数々のジレンマと共に今ではかなり衰弱してしまっている。アモンデュールやファウスト、サード・イアー・バンド、ゴング、アシュラ・テンプルらのポリシーは、今ではまるで消失しているか、大きく変質しているのは周知の事実であろう。ドラッグによる非日常的意識に支配された内的エネルギーが外世界に攻撃的であった時期はもはや終ってしまっているようだ。（前述のアーティストの中でファウストだけは少し違っている。即ち彼らの精神は覚醒していた）

「20世紀の抒情詩のすべてが『現代』という意味においてあり、またあろうとしているとはかぎらないにせよ、グロテスクなものという概念が広範囲にわたる現代抒情詩の自己解釈に取りいれられていてもよいといえよう。しかも意外なことに、これまでグロテスクなものにたいしてほとんど無関心であることを示していたような領域をめぐる堤防が決壊したのだった。」ドイツの解釈学派に属する文学評論家ヴォルフガング・カイザーは、「グロテスク」という著書の中でこう述べている。そしてこの言葉は今日のロック・エリアのオカルティズム／アブノーマルの概念の中にも正確にあてはまってしまう。

即ちこれはこういうことだ。内的なレヴェルに働きかける技術として反現実的な表現を用いる芸術家が、非合理を体現し、夢や幻覚を自ら原動力として重要視する背景には何があるのか。現代とは月的論理体系、つまり魔術や占いの如きあらゆる非合理を「神の地」として信仰する文明、これはヤマタイ国のヒミコや西洋の〝白い女神〟信仰のような女性原理崇拝にも通じる信仰体系で、アニミズムやシャーマニズム、呪術や人霊術の類いを政治的に社会的に行使したいわゆる「霊的文明」の代表的なものだが、これがアポロに代表される太陽的論理体系——合理性、現実性、生産性、実用性といったものを社会機構の根本に据えたとても男性的な文明——によって滅ぼされる過程があり、いうまでもなく現代の社会が、後者を受け継いだ上に成立しているのだという歴史観がある。よって月的な精神は現実的には非常な抑圧を受け、異常なもの、グロテスクなもの、精神病的なものといった地位しか与えられていないのである。芸術家のうちには月的な記憶を今なお強く持ち続けている者が多くいて、彼らはそうした社会に溶け込んでいる「平凡な精神の芸術」に真っ向から反対し、敵対し、憎悪しながら——俗にいうブルジョアへの敵意をむき出し疑惑と不信で凝固した現代性という気違い病院に対して、ある種のテロ行為を行なっていると見なすこともできる。「理性の高みから見おろすと、生活全体がまるで悪疫にかかっているようであり、また世界が気違い病院のごとく見える」と言ったゲーテの言葉に力づけられて更に続けるならば、日常的現実にしばられた知性や合理主義の手続きを廃棄し、魔的なるもの——オカルティズムやエロティシズム、ミスティシズム、そして狂気によって生命と宇宙の根源を志向する魔術的な音楽家の存在こそ、20世紀の生んだ可能性への試みとしての〝ロック〟の目ざましさを正確に意識するものとなることだろう。例えば現代の悲惨と陳腐、そして狂気とグロテスクとファンタジーを最も表現力豊かに創造するヴォーカリスト、ピーター・ガブリエルや、内面の混沌の中で攻撃的な美感覚とロックン・ロールを融合する芸術家、ピーター・ハミル、そしてエレクトリック・ギターによって最も現代の異常を正確に表現してしまう怪物ロバート・フリップのような人物こそ、イギリスの反世界志向芸術の伝統、即ちウィリアム・ブレイクやエドワード・リア、キャロル、ポーらの貢献を引き継いでいるといえるのだ。(特に保守的な体質の中で彼らがテクニックを発揮したという点において)《信じられないかも知れないが、W・ブレイクの蛇を題材にした作品は、ピーター・ガブリエルの「ラミア」にそっくりだ！》

〈理知的宇宙〉の探求に代表される未来的宇宙観「サイバネティクス」は科学をも包含した壮大な魔術概念として、イーノを始めとしたロック・アーティストの表現活動の基盤として確立しつつあるが、これも別段奇異なことではなく、状況と可能性の必然に身を任せたロックの進化現象のひとつといえるだろう。

魔術的ジャンルとしてのロックは恐ろしく柔軟性に富み、かつ非常に頑固な反社会のエネルギーの中枢を現代において形成していることは確固たる事実だ。少なくとも一般社会が〝芸術〟と認めたどんなものよりも生々しい生命力に溢れた複雑な迷宮が存在する。それは現代の人間によって創造された迷宮であり、今生きている君のための入口が用意されている。

ミスティシズム——オカルティズム

隠秘主義　　神秘主義

まず始めに述べておかなければならない。
音楽とは表現形態の中で、一番信用の置けないものであると。
古代ディオニュソスの饗宴において、音楽とは、欠かすことのできない物であったと同時に、やはり付随的役割をも免れ得なかった。また、オルフェウス派の信者達も、音楽の魅力に陶酔させられはするが、それは、彼らの神々の姿を現す為にのみ使用されたことも否めないのである。とは言うものの、音楽は神秘家達が通常用いたもので、酒が不死の人達の飲物であるように、音楽は、彼らの言葉なのであった。それは人々を陶酔させ、神にまで高めていく。恍惚をもたらせる一つの薬なのである。そう、ただひたすら、阿片や、アシシュや、モルヒネや、笑気（一酸化窒素）や、メスカリンのように、魂を高みにまで登らせる効果を生じせしめることを、第一の目的とするものであったのだ。そこにはまた、性の無意識的関与が存在する。優れた神秘家である聖ヨハネは「精神の鍛錬、悔悛と聖体の秘蹟などにおいて、あるいは精神が祈禱に深く集中されている時には、敏感な部分は意志から独立した無秩序な動きを感じることがしばしばある。」と言っているのだが、神の前での法悦というエロティシズムのテーマを論じる前に、この文章中の「祈禱」を「演奏」に置換してみると、デレク・ベイリーの行為が浮び上がって来はしないだろうか、それにしても、偉大な神秘家達にとって「純潔」とはまさしく純潔なものであり、決して空虚なものではなく、神への愛を実践するためにおのれに課す、最大の義務なのであったということも、注目に価しよう。知性、理性による認識、直観と概念による認識を超越する認識として、神秘的直観は横たわっているのだ。しかし、この直観は、直接に神との合一をはたすものであるがゆえに思弁的直観とは明らかに異なるものでもある。
このようにミスティシズムの探究は、エロティシズムに関わりつつも恐しくまじめなものであり、あまりにもストイックなものでもある。それは神に対する姿勢であり、思想でもあるからなのだ。一方、聖女と呼ばれている人物の個人的体験はどうであったか。
ジェノヴァの聖女カテリーナは外界の気温とは無関係に、極端な暑さや寒さを体感することがあった。また、触感の異常敏感症にかかりやすい状態になることがあった。「ある日、彼女は右腕に鋭い痛みを伴なったひどい冷たさを感じた。」またある時には、「新たな発作が起き、喉と口とに痙攣が生じて、彼女はものを見ることも目を開くこともできなかったし、呼吸にも非常な困難が伴うほどであった。」というように、次々とヒステリー症の現象をひき起こしているのだ。このことは聖なる霊的交渉とは別な一種の錯乱に近いものであり、このような病的傾向をもつものは誰にでも可能であろう。とリューバ（スイス生まれのアメリカ人・心理学者）は指摘している。また聖女テレシアの体験についてもさまざまな病理学的相が見うけられる。その他、幻覚や幻視幻聴など個的傾向がさらに強まるとシュボリックなものの占有量が増すのである。オカルティズムへの移行である。
先程も触れたが、あえて関連させて言うならば、デレク・ベイリーをレリーフさせた「祈禱」の本質的なものは言葉や幻像を現出せしめる夢でもあった。オートマティズムに近い状態を作り出すものであると言ってもよいであろう。かかるが故に精神錯乱は神秘家達にとって錯乱ではなく、ひたすら神を前にして自己を無にする行為の中で現れるいわば必然的現象でもあったのではないか。

Lextase de sainte Therese
「聖テレザの恍惚」と名付けられたこの彫像は、聖性にまで昇華された宗教的恍惚の表情によりみごとに表現されている。

虐殺された子供の血液に浸たる月と太陽

クラウス、シュルツやエドガー・フローゼをひきあいに出すまでもなくユーロ・ロックの一傾向もそうした幻覚や幻視などを伴う夢への飛翔と考えられる。しかしこのような書き方を進めて行くと、現実感を欠いた非直接的な逃避音楽について述べるような恰好になる気がしないでもないが、一面ではまさしくそうなのである。しかし音楽、音楽性において逃避的であるというのは一体どういう訳によるものであろうか。現代音楽においては社会的関わりということが最近顕著に表面化しているが、それは音楽表現が以前から内包していた問題であって、社会運動としての音楽の形もいわば必然的であった現われの一つであると言えよう。しかしここに小杉武久という男がいる。彼の表現は「音楽」ではなく「音楽に関わる何ものか」を表現しつつある特異な作曲家であるが、彼のインプロヴィゼイションはこの小論に重大な関わりを持っていることを、また、彼こそが「哲学の卵」を有し、「第一質料（プリマ・マテリア）をも有している数少ない「音楽における錬金術師」であるということを断言して憚らないものである。そのことを頭にとめ、先を続けることにしよう。

しかし、まず始めに音楽は一番信用のおけないものであると言った。恍惚をもたらす薬であるとも言った。現代は古代とは比較にならないぐらい社会構造は複雑多岐を極めている。もはや音楽は恍惚をもたらせるのみならず、毒をももたらしている。その顕著な例が、音楽を表現芸術としてではなくビジネスとして成立させしめている巨大な音楽産業であり、一方でその蜃気楼をそのまま現実のものとして受け入れている大衆である。わがもの顔をしたゴーレム達を私は絶対に認めることはできないのだ。しかし前章で述べたような「音楽性」を実践している音楽家達には、産業システムをプレパラートした所において興味をそそられるものが多大であることもまた事実なのである。（ディスコ・ミュージック———手っとりばやい安易な熱狂、そこにはミスティシズムの落とし穴がブラック・ホール然として、あんぐり口を開けているのだ）

さて、少し整理させて載くことにしよう。ミスティシズム（神秘主義）とオカルティズム（隠秘主義）の違いとは何であろう。要約してみれば、ミスティシズムとは「神を証明するのでなく、神を体感するのであり、実存を証拠立てるのではなく、神の中に実存を感得するものである」と、アンリ・セルーヤは言う。また「思考よりはむしろ感覚上の体験を持つのである」と、さらに「それを体験し得るためには神秘家であらねばならない。交響曲を評価するためには音楽家であり、恋を理解するためには恋をする人であらねばならない」とも言う。すなわち、伝達され得ないもの、表現され得ないものの体得であり、表現を超えたものだと言うことができよう。一方オカルティズムは表現に直接関わりを持つものであることに注目されたい。『大きな肉切り包丁を持った一人の「王」が、眼の前で大量の幼児を兵士らの手で殺害させていた。幼児の母親たちは、この側近の無情な兵士らの足もとで泣き崩れ、子供たちの血は、すぐさま別の兵士らの手で集められて、大きな容器に入れられ、その中へ「太陽」と「月」が浸りに来るのだった。』『踵に翼のついた青年が、手にメリクリウスの杖を持ち、その杖で、自分の頭にかぶった兜をたたいていた。その青年をめがけて、一人の長身の老人が翼をひろげて飛びながら近寄っていたが、こちらの方は頭に時計がとりつけられていた。』これらの文章はアンドレ・ブルトンのシュルレアリスム宣言集から引用したのだが、ブルトンも言ってい

るように、まさにシュルレアリスム絵画そのものである。表現——そこなのだ、ミスティシズムとオカルティズムの相違は。ミスティシズムの本質は表現を超えた所にあり、オカルティズムは表現に関わる所にその本質が存在している。先程の引用文からもわかるように、シュルレアリスムはオカルティズムから発生したものであることは一目瞭然であろう。結論づければ、ミスティシズムが太陽ならば、オカルティズムは月と呼んでも差しつかえないであろう、両者は両者が存在して始めて精神的宇宙を形成するものであり、両者は同じ顔の裏表でもあるのだ。

オカルティズムを語るのに、錬金術、占星術、魔術に言及しない訳にはいかないが、とても全域にわたって小文で述べられるものではないので、現代のロックシーンをとりあげて、それらと音楽との関わりを考えてみたい。ともすると、「ユーロ・ロック・シーンなんてオポチュニストだらけで、歯の浮いたような音楽しかないじゃないか。」など言われがちなことを百も承知の上で。しかしである、そう言われる諸氏に少しだけ思いとどまってほしい。いや実は私にしてからがそう思いつつこの文章を進めているのであるが。フォン・アルニムが著した「エジプトのイザベラ」の中に現れるマンドラゴラ、その魔力を有し人をも絶命させる根。その根はジャンヌ・ダルクをも所有のカドで死にまで至らしめた。護符（TALISMAN）転じて災厄となすものである。ロック・シーンはこの巨大な音楽産業の中で、現在の所アンダーグラウンドな部分も含めて存在権をいちおうは獲得しているかのように見え、さらにビジネスとして成功させるための人工陶汰は飽くことなくくり返されている。そのような構造に支えられた護符なぞ、後生大事にへばりつけている方がおかしいと言わなければならない。パンクでも、テクノ・ポップでも、フリー・インプロヴィゼイションでもよい、その護符をみずから進んで災厄となすだけのものにしなくてはならないのではないか。幻想はたくさんだ。その意味で、歯の浮いた音楽だらけだと言う前に、それではあなたは一体何者であるのか？Ｅ・Ｍ・シオランのように周囲に呪詛の言葉を吐きつけながらも自ら血を流す程苦しんでいる、あの老ルーマニア人を凌ぐ程に耐えているのか？ブルースや演歌は別だ。今論じているのはアヴァンギャルドを巡ってのオカルティズムなのであるから。ダダイズムやシュルレアリスムなどの運動も、何をどこまで結論づけられたと言うのだ。今はまだ饒舌が花咲きみだれ、とうてい沈黙に迄は達してはいないではないか。インプロヴィゼイションの極北を歩むスティーヴ・レイシーやエヴァン・パーカーらの風貌は、なぜか中世の錬金術師を彷彿させるように見えるのだが、私の目は節穴なのであろうか。ユーロ・ロックの動きもそのような偉大な錬金術師達の精神を摂取し始めているし、それはまたより強力に摂取する必要性があると何度強調してもしすぎることはないであろう。ミスティシズムを「静」とするならば,「動」としての表現に向けて、「賢者の石」を抽出するためにも、「第一質料（プリマ・マテリア）」や「哲学の卵」としての容器も、作業過程の本質を誤らないように用いなければならない。音楽の「不死」へと向けて。

今一度非科学的科学と呼びえるものに戻ってみよう。積極的にだ。するときっと見えてくるはずである。今日のオカルティズムの流行とは別な次元で、陰秘学の持つ意味が。人間学の意味が。

陰秘なものに関わる表現は、とりわけ文学、絵画に多く見られる。現実と非現実の曖昧さを端的にあらわしている

レイラ・ウァッデル

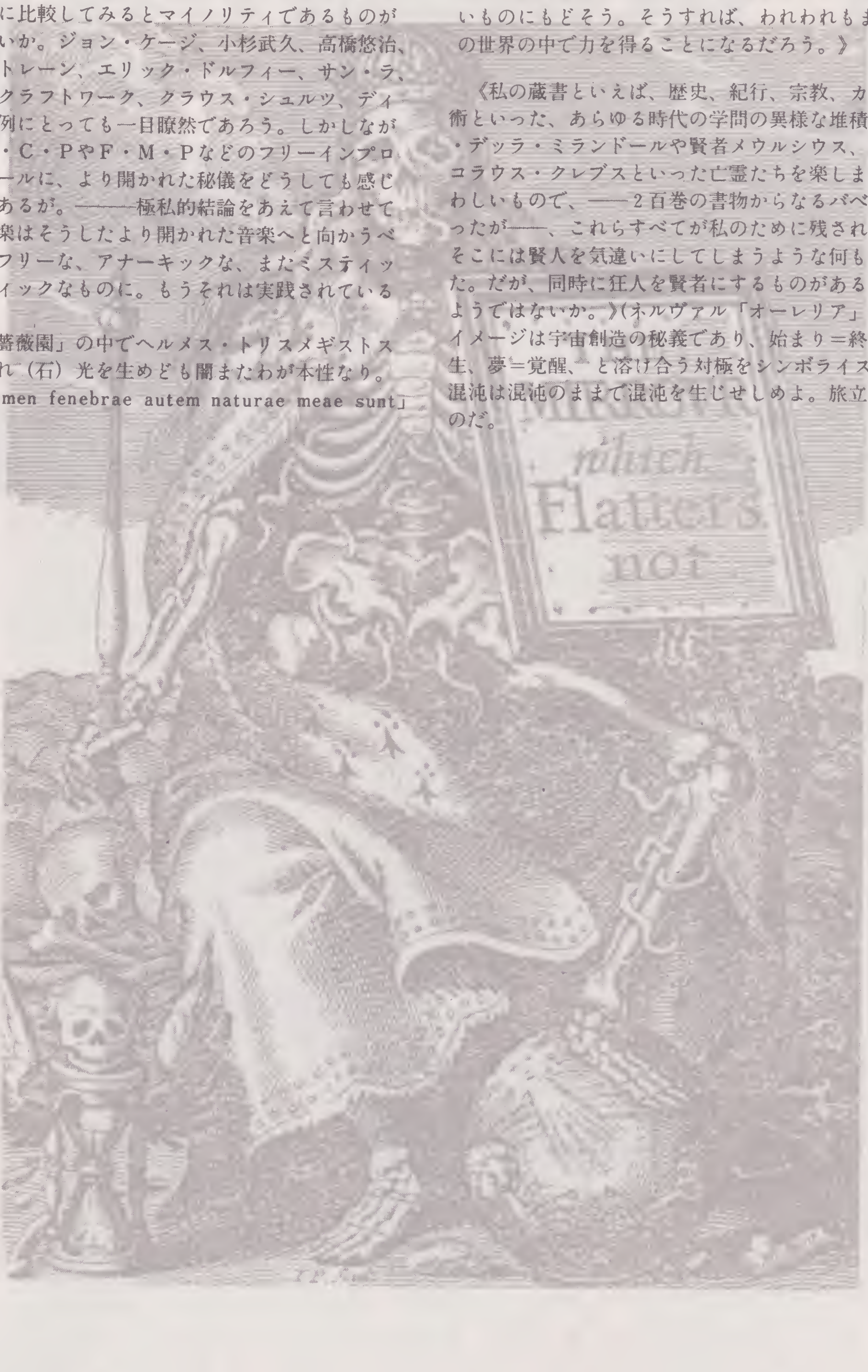
Evan Parker

ものとして、泉鏡花「天守物語」、ホフマン「砂男」、橘外男「蒲団」、フレイザー「金枝篇」、ネルヴァル「オーレリア」、アルトー「演劇とその形而上学」、マックス・エルンスト、レオノール・フィニィ、マックス・ワルター・スリンベルク、ゾンネンシュターン、伊藤若沖…ｅｔｃざっと思いついただけでも枚挙にいとまがない程である。しかし、不思議なことに音楽もまた歴史は長いはずであるにも拘らず、正面切って陰秘をとりあげた作品は数少ない。私の浅い音楽体験をもとに名を挙げてみると、ベートーヴェン、ワグナー、エリック・サティ、などの作品はたしかに秘義的要素（いや神秘的なものの度合が強いかも知れない）を含んではいるが、現代においてはどうであろう。クラシック音楽に比較してみるとマイノリティであるものがすべてではないか。ジョン・ケージ、小杉武久、高橋悠治、ジョン・コルトレーン、エリック・ドルフィー、サン・ラ、カン、ノイ、クラフトワーク、クラウス・シュルツ、ディーヴォなどを例にとっても一目瞭然であろう。しかしながら私などはＩ・Ｃ・ＰやＦ・Ｍ・Ｐなどのフリーインプロヴァイズド・プールに、より開かれた秘儀をどうしても感じてしまうのであるが。―――極私的結論をあえて言わせてもらえば、音楽はそうしたより開かれた音楽へと向かうべきであろう。フリーな、アナーキックな、またミスティック、オカルティックなものに。もうそれは実践されているのだ。

「哲学者の薔薇園」の中でヘルメス・トリスメギストスは言う。『われ（石）光を生めども闇またわが本性なり。Ego gigno lumen fenebrae autem naturae meae sunt」と。錬金術師の作業において「第一質料」である黒から白、白から赤へとメタモルフォーゼする過程は、実は錬金術師が鉱物に託した死＝復活のイニシエイション的機能をも有しているということ。「太陽」と「月」、「光」と「闇」といったアンドロギュヌス的相貌を有しているということ。それは本質であろう。音楽の死滅を通過して再び音楽を、サラマンドラのように燃え立たせなくてはならない。

《魔術的アルファベットや、神秘的な象形文字が、時間とか、われわれの無知に便乗する人たちによってゆがめられてしまい、不完全な形でしか、われわれのところにたどりつかないのである。だから、失なわれた文字あるいは消え去った表象を見つけ出そう、調和を乱している音階を正しいものにもどそう。そうすれば、われわれもまた精霊たちの世界の中で力を得ることになるだろう。》

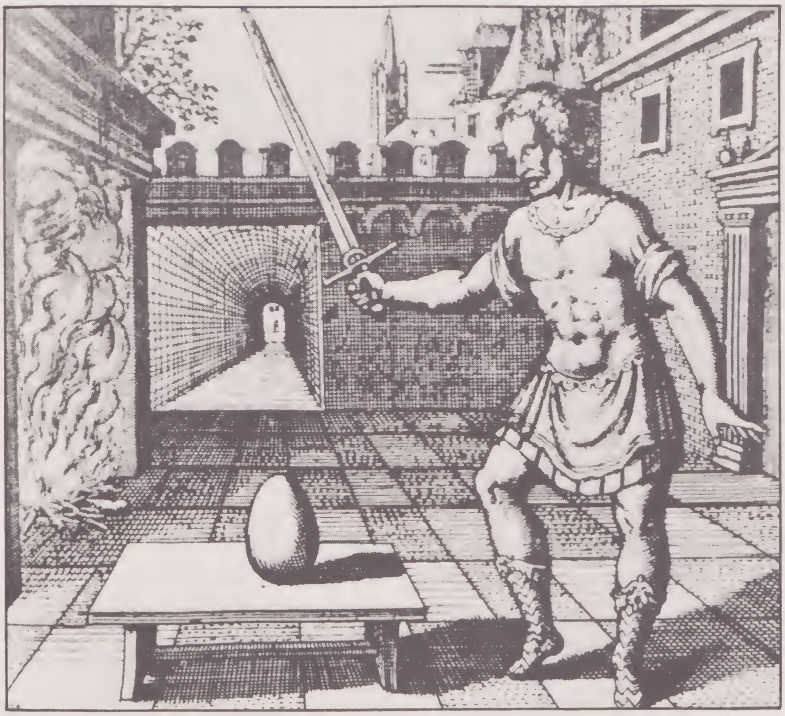
《私の蔵書といえば、歴史、紀行、宗教、カバラ、占星術といった、あらゆる時代の学問の異様な堆積物で、ピコ・デッラ・ミランドールや賢者メウルシウス、あるいはニコラウス・クレブスといった亡霊たちを楽しませるにふさわしいもので、――２百巻の書物からなるバベルの塔であったが――、これらすべてが私のために残されていたのだ。そこには賢人を気違いにしてしまうような何ものかがあった。だが、同時に狂人を賢者にするものがあるように努めようではないか。》（ネルヴァル「オーレリア」）この中のイメージは宇宙創造の秘義であり、始まり＝終り、死＝再生、夢＝覚醒、と溶け合う対極をシンボライズしている。混沌は混沌のままで混沌を生じせしめよ。旅立つのは今なのだ。



ミクロコスモス――マクロコスモス

錬金術的世界の音楽像

山本　雅幸



錬金術の実験室における「大いなる作業」を一枚の音盤に託した「THIRD EAR BAND／ALCHEMY」。賢者の卵を割ることによって、太陽と月の結婚が行われ（化学の結婚）錬金術師はすべての非卑金属を黄金に変える術（精神浄化）を得るのである。

《太初（はじめ）に業（わざ）ありき》

ある種のオカルト科学、あるいは“オカルティズム”の知識が、現代の極めて多くの文学作品、芸術作品を理解する上で必須のものとなった。詩人や小説家、芸術家たちの想像力の中で、呪術や魔術が大きな位置を占めるようになった。不可視的な存在が彼らを捕え、未知なるものの観念が彼らに付きそい、時代は、古代、中世へと回帰する。そして、これは私たちが日頃聴いているロック・ミュージシャンたちにも、その志向性が見られると思う。精神によって理解されないもの、あるいは理解不能なもの、悟性や通常の知識の範囲を超えたものを、彼らは「大いなる作業」の秘密を音に託して、私たちに伝えてきたのではないだろうか。彼らはまさに、錬金術師であり、私たちはその秘伝を、超人的な観念をもって受託し、永遠に守っていかなければならないのである。

《錬金術——その理念と歴史》

一般に錬金術とは、中世における金属変成の術で、その目的は黄金を造り出すことにあったと考えられている。しかし、真の錬金術は、技術や科学よりもはるかにすぐれていた。というのは、金属の変成は技能だけでは造り出せず、知識そのものだけでは熟達の域に達することができなかったからである。魂、および精神と神聖なものとの統一を求めて努力し、魂が高貴になって道徳的な美徳とともに、崇高な完全の状態に達したときこそ、錬金術の達人となることができるのである。錬金術師たちは、この世で最も完全な物質は不滅の金である、と考えた。常に完全に向かう傾向のある自然は、金をつくり出すことだけを望んでいる。鉛、銅、鉄その他の金属は、自然の失敗作である。神は人間の魂に、完全へのあこがれを吹き込んだ。人間も自然と同じように、自分で神聖なものを得るために努力すべきであると考えたのである。このように、錬金術師たちは、卑金属を金に変成するときに、人間も変成する、と考えたのである。

「錬金術」という用語には、様々な歴史的な事情が隠されており、またその歴史はきわめて、謎めいている。中世全般を通じて、数々の秘伝や象徴に包まれて発展しながら、隠秘学として、悪魔の術と呼ばれ迫害され、レトルトと悪魔を呼び出す呪文とを巧みに組み合わせたところに成り立つという、一般民衆にとっては、まことにインチキくさい学問なのであった。

エジプトのファラオの時代に錬金術が栄えたという説があり、ヨーロッパの錬金術師たちは、この地を聖なる術の発祥地と見なした。これは、アレクサンドリアの錬金術師たちの間には、古代エジプトの宗教教義の特徴的性格がいくつか見い出されることからもわかる。エジプトでは、重要な事がらにはすべて呪文が付随したのであるが、化学的操作（錬金術）もそうであった。ヌビアでの金の採掘から、その精練、規格化などエジプト人が金鉱石やその他の金属で細工し、この操作を秘密にした（王位継承者とか、最高の徳と知恵をもった人々のために神官によってかたく守られた）ということと、彼らの化学が呪術的であったということが、エジプトを聖なる術の発祥の地と見なした理由なのである。

ギリシアの錬金術は、あらゆる教養が救霊と天啓による認識（グノーシス）に求めていた混沌とした時代、西暦3世紀頃に形成されたようである。つまり、異教的グノーシスの特殊形態である、「ヘルメス思想」が占星術や哲学、隠秘学などに天啓として語られていた時代に錬金術が、それらと同じ基本的傾向として形成されたのである。

「ヘルメス」とは、ハデスの支配する暗黒の王国へ魂を導くギリシアの神であり、ギリシア人は、エジプトのギリシア植民たちの神「トート」のうちに自分たちの神性を認めた。そして、彼らは呪術と筆写と話し言葉の神聖な発明者トートと、ヘルメスを同一視した。こうして、ヘルメス・トリスメギストスは錬金術の哲学の師匠と名づけられたのである。

アレクサンドリアで広まったキリスト教的グノーシス説はきわめて重要な役割を果たした。錬金術はグノーシス思想家の複雑な形式にならい、こみ入った寓意画を通じて弟子たちを宇宙の秘密や世界の本質、「善」「悪」両原理の永遠の闘争に通暁させようと試みたのである。象徴と寓意のヴェールのもとに隠された哲学的、宗教的理論の本当の意味を教えるグノーシス説と、物質の隠れた性質をどこまでも認識し、それを象徴によってあらわす錬金術との間には深い類似関係がある。

ところで、イギリスのプログレッシヴ・グループ、サード・イアー・バンドの１ｓｔアルバムである「錬金術」のジャケットを見てもらいたい。これは、マイケル・メージャー（1568～1622年）という錬金術師による錬金術の作業を象徴寓意画によって表わしたものなのである。

《錬金術の寓意『賢者の卵』》

「卵のことをよく知り、ぎらぎら光る剣でそれを切れ。わが世界には、他の何ものにもまして崇高な鳥がいる。その鳥の卵を捜し求めることに専心せよ。そのやわらかな黄味は、下劣な蛋白質にとり囲まれている。慣例にしたがって卵を熱してから、おんみの剣でそれを注意ぶかく捜し求めよ。ヴルカヌスのあとで、マルスがこの仕事を促進するであろう。その後、ひなが現われると、ひなは火と剣に打ち勝つであろう。」

Sepientia veterum philosophorum sive doctrina eorundem de summa et universali medicina. 18世紀
火と水、この両者の転換が示すものは、結合と分離、すなわち反復される昇華である。

古代エジプトの錬金術的宗教性、17世紀初頭の薔薇十字団による。世界統一教義、そしてキリスト教的神秘主義。「ASH RA TEMPEL」はこれらのマクロ・コスモス的宇宙観をロックによって表現した唯一のグループである。

Sylva philosophorum 17世紀
これはあらゆる不完全な金属を、不滅の完全性へと変容せしめる宇宙霊液もしくは賢者の石に関するダイアグラムである。

“ヴルカヌスとマルス”とは、金属の変成に絶対必要な“火と鉱石”のこと。

このように近代化学では、記号や数字で化学式を表わすところを、錬金術師たちは、寓意画によってその奇妙な化学式の秘密を守ったのである。

また、グノーシス派の諸象徴、特にあの有名な「ウロボロス」(われとわが尾を嚙む蛇）を、彼らは宇宙の全一性と変成作業との象徴、存在するものすべてを包み被造世界を閉じこめる「世界の魂」の象徴として崇拝した。

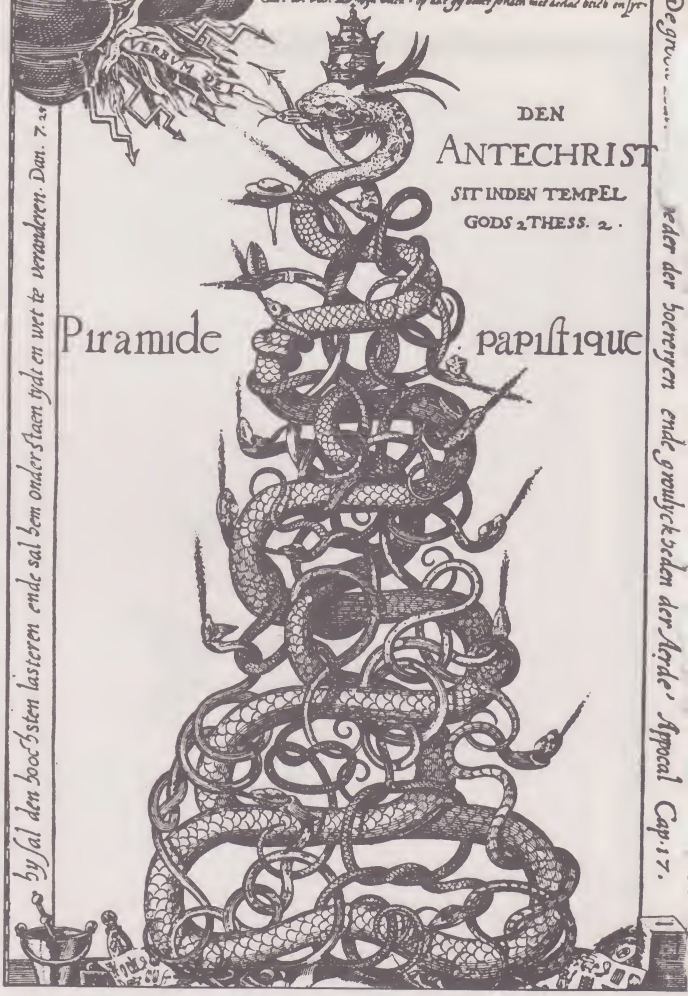
この典型的な錬金術の概念である、自己自身を産む宇宙蛇（コズミック蛇）は、なんと、あのドイツ・ロックの三位一体をなす、アシュ・ラ・テンプルのアルバムにも登場しているのである。彼らの4枚目、「SEVEN・UP」の内ジャケットのちょうど中央の部分に描かれている—彼らのサウンドとともに、その神秘性と宗教性は、全宇宙の観念としての、人間の分析としての、神からの発光現象と創造現象としてのあらゆる領域の対応におけるすべての分析知の総括である錬金術なのである。そして、これらのことは、彼らのデビューアルバムで明らかにされていることだと思うのであるが……。

ギリシアの錬金術は、発現形態の異なった様々の影響とが協力して作り出したものであり、エジプトの実用的技術とギリシアの哲学、東洋の諸教理とアレクサンドリアの神秘主義とを総合した混成品として、ギリシアとユダヤ教とキリスト教の各要素の驚くべき混合物の観を呈している。そして、錬金術は、アレクサンドリアからビザンチンに渡り、その後、多少迫害されたものの、11世紀には、プラトン学派の手であらゆる秘教から解放された、実証的かつ、合理的な術として試みられるようになったのである。

12世紀以来、西欧ではヘルメスによって書かれたという一連の著作があらわれたが、その中でも最も有名な『エメラルド板』なるものは中世以来、あらゆる錬金術師が、これに注釈を加えて倦まなかったものである。錬金術師たちは、ヘルメスみずからの手でエメラルドに刻まれたという、このテキストの起源を伝説化した。後の秘密結社、薔薇十字団の始祖とされる15世紀ドイツの伝説的人物、クリスチアン・ローゼンクロイツと、その声明書である、『薔薇十字団の伝説』も同じように秘教文学独特の志向でもって伝説化されたものである。ところで、この『エメラルド板』であるが、内容はと言えば冗談な言葉の遊戯としかとれないものなのであるが、これも錬金術の寓意画と同じように、ヘルメス学と錬金術に通じた者にとっては、奇妙なふざけた内容も実に意味深長なものとなるのである。この『エメラルド板』には、宇宙の全一性の教理や天地創造と錬金作業との間の類比と交感の教理が、いわゆる賢者の石の作り方に関してのヘルメス・トリスメギストスの言説が述べられているという。

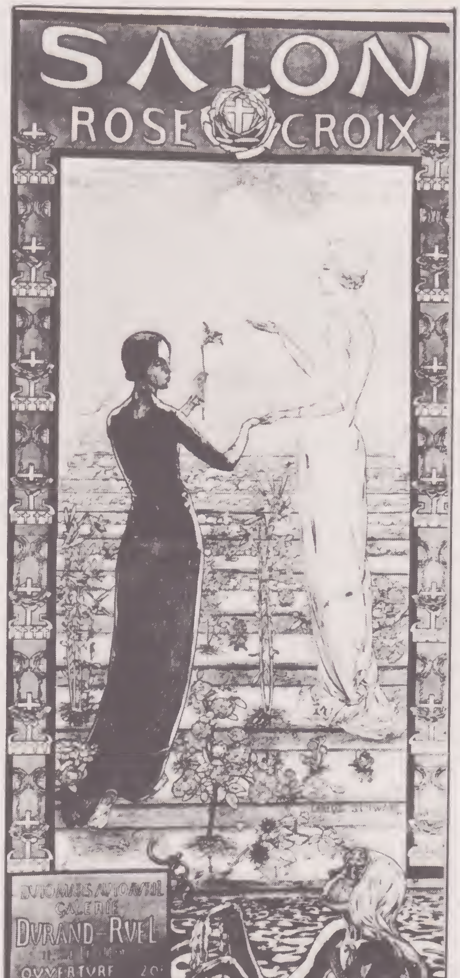
錬金術はその後、15世紀になって神智学と魔術の理論が全ヨーロッパにひろがった動乱期に、一種の秘教となり、天啓思想の一大教義となるに至った。そして、ルネサンスとともに、錬金術は最盛期に達し、新プラトン主義、新ピタゴラス主義、キリスト教的カバラ学などと結びつきながら、多くの思想家を生み出した。また、印刷術の発明で、ますます盛んになり、数々の秘密結社ができて、科学者や哲学者がこれに加わったが、それに乗じて、魔術師や詐欺師、毒薬使いや贋金作りといった、自らを錬金術師と名のる連中が出てきたのもこの時期である。

16世紀にパラケルススは、世界はやがて改革されるはずだ、と予言した。そして、『世界の改革』という題のドイツ語のパンフレットが現われたのを機にして、多くの秘術師や知識人たちは、団結して将来のために熱心に協力するようになり、17世紀初頭に錬金術は、薔薇十字団の秘教運動によって特にドイツで発展した。



ここに描かれるウロボロス（宇宙蛇）は宇宙の永遠性と循環性の象徴であり、色彩において緑は発端、赤は作業の目的を示す。

《『薔薇十字』極意の寓話》



薔薇十字展のポスター　1892年
サール・ペラダンとその弟子たちによるこの美術展は、カトリシズムと魔術の奇妙な混合体のための主要な宣伝媒体であった。

薔薇十字団の始祖とされている伝説的人物、クリスチアン・ローゼンクロイツと同一人物ではないかと言われている、ヨハン＝ヴァレンティン・アンドレーエの著に『化学の結婚』というのがある。これは、すべて寓話形式をとっており、金属の再生に託して人間の復活（ローゼンクロイツの墓には、「余は120年後にあらわれるであろう」と刻んであり、この予言通り、彼の弟子たちが墓所を発見し、発掘したという）と救済が説かれている。『化学の結婚』は、伝説的著者の名に隠れて最初から幻の書の性格を帯びていた。薔薇（東洋の叡智）と十字（キリスト教の信仰）を結びつけたこの結社の教義にふさわしく、「創世記」の７日にわたる天地創造を模した小説構造と、７つの作業過程を要する錬金術の神秘思想が織り込まれ、一種の秘儀伝授的作品となっている。

どんな人間の心にも、遊びをしたがる子供っぽさがあり、その中でも神秘的なこと、隠密的なことが、最も魅力のある遊びである。『化学の結婚』は、そんな幼年時代の夢のつづきや、陳腐な日常生活から逃避したい人間のあこがれを満たした。そして、薔薇十字団の遊戯こそ、人間は思想と行動によって、万人が兄弟となる王国へ昇ることができるという信念のもとに、物質世界を支配する人間の力を象徴した呪術なのであった。

Philosophia Reformata　1622年
王と王妃、月と太陽の樹、
三界を象徴する三匹の蛇と、
錬金術の重要なモチーフが
見受けられる。

無味乾燥なドイツの奇怪な文献のなかに咲いたただ一輪の花『化学の結婚』は、パラケルスス派の呪術を19世紀のロマン主義に結びつけた。ノヴァリスは、ローゼンクロイツの諸国を遍歴する神秘な旅を想起させるかのように、「現世は夢になり、夢は現世になる」と言い、失われた理想社会を古代ギリシアに求めたヘルダーリンは、大宇宙と自分との同一性を思い起こさせている。おお太陽よ、おお空気よ、私の心に、兄弟のように生きているのはあなたたちだけだ。

このように、薔薇十字の魔術的思想は、社会革命の欲求と混じりあって、あの著名な靴屋ヤーコプ・ベーメにも影響を与え、近代西欧社会の底流として、文学・芸術面に多くの影響を与えた。ゲーテの『ファウスト』にもその影響が多く見られ、19世紀末のフランスでは大きな流行にさえなり、いわゆる隠密学（オカルティズム）の運動を生んだのである。

ドイツ人がしばしば使う言葉に、「ファウスト的人間」というのがある。偉大な途方もない激しい性格を持った人間を指していう言葉になっている。そして、これは最大級の讃辞なのであるが、いわゆる徳の広大な、完全無欠の性格を持った人間を指しているのではなく、むしろ、ある意味で人間的不幸を持った人間と言った方がいいかもしれない。自己の力量以上の仕事に、ひたすら挑んで、自己の情熱にすべてを打ちこんで、その結果、痛ましい悲劇的没落をとげる不幸な人間なのである。「ファウスト的人間」は悪魔に憑かれた人間なのである。恵まれた調和と幸福のなかに、楽しく悠々と生きる人間にとって「破滅の美学」とはどういうことなのであろうか……。

ゲーテの「ファウスト」の主人公であるファウストという人物は、16世紀の大魔法師ヨハン・ファウスト博士をモデルにして生まれた。ファウスト博士（ヨハン・ファウスト）という人物については、詳しい事はわからず、（謎に包まれているがゆえに、偉大な存在！）なんでも1480年頃ドイツのクニットリンゲンというところで生まれ、各地を放浪した後、1540年頃に死んだと伝えられる錬金術師または魔術師または星占術師ということで、一般の人々の想像によると、悪魔を呼び出すことができ、空を飛ぶこともできた人物だったということである。

ファウスト博士の『地獄の威圧』という魔法書の翻訳は、教皇アレクサンデル六世（1492―1503年）時代にローマで印刷されたというものなど、数種あると言われている。その中でも特に有名なものは、ファウストの魔法の円と杖にヘブライ文字を書き込んだ魔法の絵や、クニットリンゲン出身のマキシムス師という妖術師の肖像画などである。また、ファウスト博士の『偉大にして強力な海の幽霊』という標題の黒書には、ベールゼブブが、その従僕の悪霊メフィストフェレスを自分に送ってよこした取引の要約が述べられているという。

とまあ、こんな具合に、ファウスト伝説みたいなことを少し書いたのであるが、それにしてもあのドイツの異端集団“ファウスト”も、ヨハン・ファウスト伝説をヒントにして生まれたのではなかろうかという気がするのだが。（いや、そうに違いない！彼らの作り出す音は、魔術であり、呪術であり、悪魔の儀式なのであるから。!!）

「このようなことは、偏見を捨てない人びとや、こんな契約は結ばれるはずがないと否定する人びとからは、ただ疑われるだけだろう」ーヨハン・ファウスト『偉大にして強力な海の幽霊』

ヨーロッパに悪魔の宴会や魔女が存在したのは、迫害されながらも、過去の異神に帰依している非国教徒たちがいたからである。農民たちが昔から住みついていた土地には、古い伝説や呪術的な伝説、古代の信仰などがふかく根を下ろしていたから、新しい宗教は彼らにとっては異教だったのである。悪魔の力が確立するためには古代の風習や、農奴の娯楽や、おとぎ話が必要であった。貧しい農民たちは、夜になるとこっそり集って、原始的で無邪気な遊戯に酔いしれた。彼らにとってサタンとは、新しい神の代理人である苛酷な領主に圧迫されながらも、彼らに威厳と自由の感覚を与えてくれた政治的人物像なのであった。農民たちは、悪魔の宴会で、人間の感情までも規制しようとする教会の干渉を受けることなく、思う存分興奮することができた。サタンは、一定の道徳的行為をおしつける天の戒律を、否定する。彼は、人間に未知なものを熱望する気持を起こさ

せ、夢と希望を与えてくれる。また、苦しさと不満とをもたらすが、最後には、よりよき善へ導いてくれる。彼は主として、善に奉仕しているのだ。

メフィストフェレス「常に悪を欲して、常に善を造る、あの力の一部ですよ」ーゲーテ『ファウスト』第一部　書斎。

ヨーロッパの諸宗教によれば、サタンの反逆は宇宙を分裂させ、常に誘惑されやすい信者たちは、死んでからはじめて永遠の幸福が得られると考えた。人々は、自分の悩みや不安については常に呪術師を頼っていた。そして、自らも呪術を行なうことによって、物質世界を動かし、超自然的なものと交わりを結んで、彼らにとって敵意あるものの圧迫をはねのけた。また、呪術的な知恵のなかには世界の調和の秘密がひそんでいると信じた。そして、古代の哲学者や呪術師たちの自然の探究は、西洋の最高の精神の持主たちに受け継がれたのである。ピコ・デラ・ミランドラ(1463ー94年)は、古代の呪術的思想を復興し、カバラを利用してアリストテレス哲学とプラトン哲学を調和させようとした。アグリッパ・フォン・ネッテスハイム（1486ー1535年）は、隠密的な思想のあらゆる流れに心をむけて、様々な呪術の教義を調停し、哲学とカバラとを統一しようと努力した。そして、光学器械の発明で有名な、写真術の父、ジャムバッティスタ・デラ・ポルタ（1538ー1615年）は、ルネッサンスの知的探究への趣味を受けついで、呪術を基盤にして、世界を錬金術的に解釈した。この様に、呪術は、人間が思考するためには、なくてはならないものであって、人間の想像力を鋭敏にし、より高い業績への刺激なのであった。

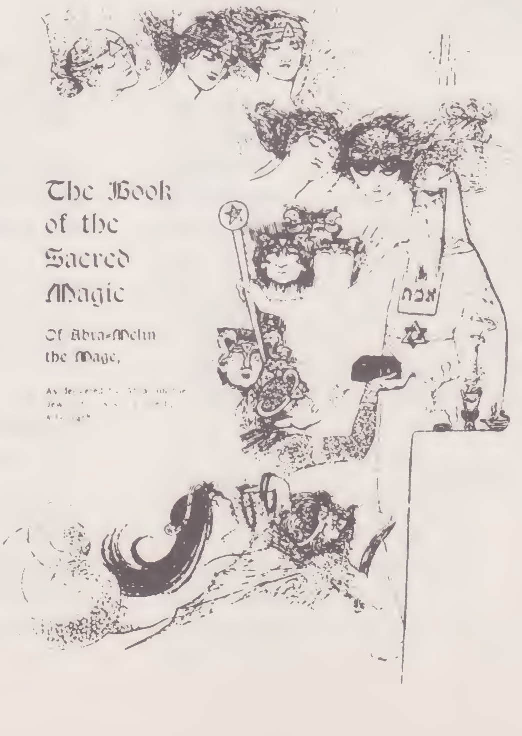
実証主義的な科学の時代になっても、幻想的な妖怪は、依然として出没している。多くの学者たちは、隠秘的な力とは、まだ発見されない電気のような、ある未知の力のことではないかと疑い、呪術的な現象や妖怪の類などを写真にとろうと試みた。また、世界中至るところで、霊媒師が心霊体との交信をやっている。これらのことは、反証されない限り、否定することはできないことなのである。

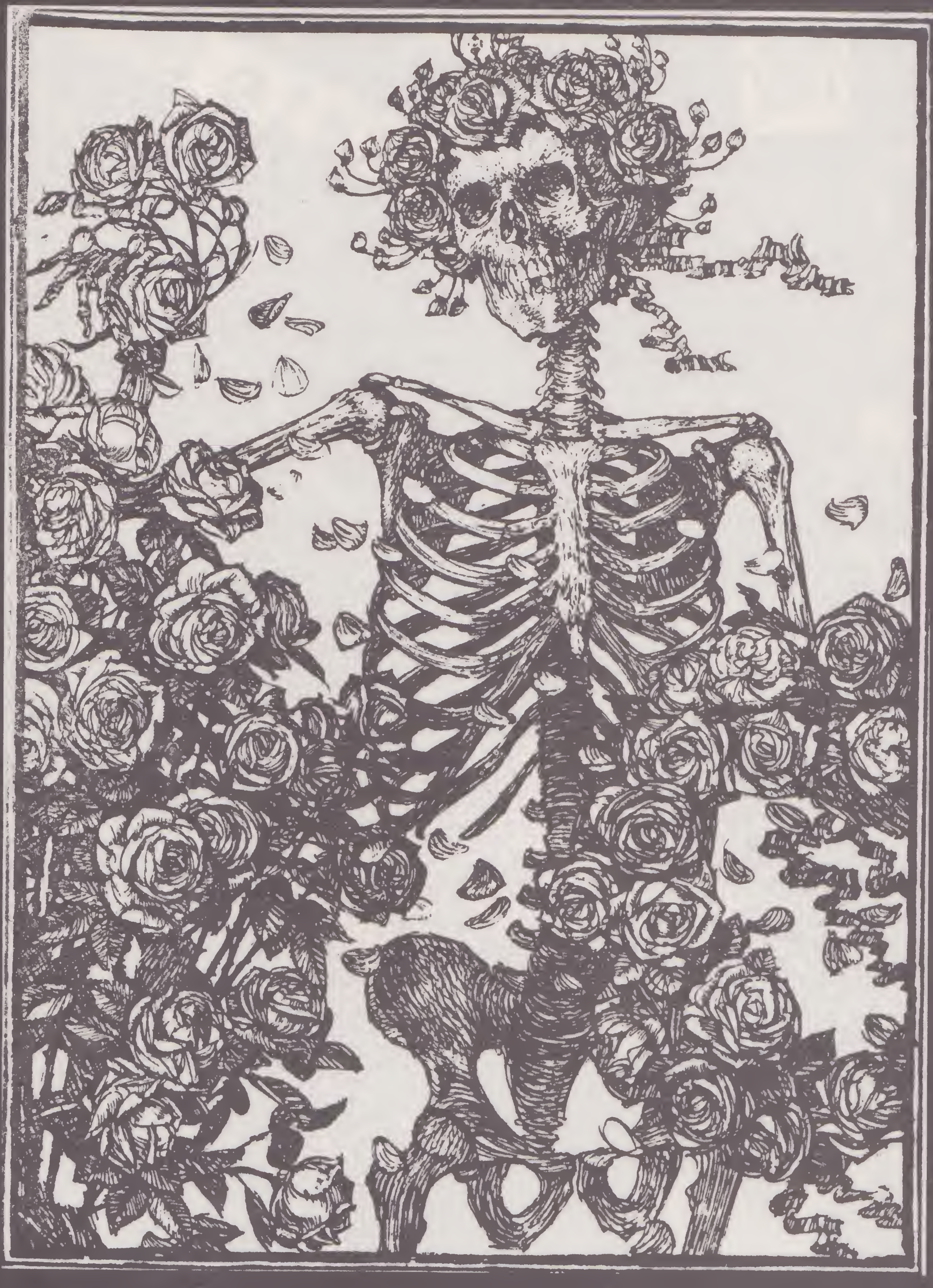
錬金術についても、今日の科学からみれば、単に黄金を造出するという点で、きわめて滑稽なものになるであろうが、新しい宇宙の造出という点からみると、今日の科学を超えた多くの問題を含んでいる。しかし、限られた人々、限られた教義によって伝授されてきたオカルティズムが一つの科学として、象徴理論に発展していくということも考えられるような気がするのだが……。

《エピローグ》

内容が多少片寄ってしまって、恐縮なのであるが、錬金術思想とは論理性によって組み立てられるべき、「言語技術」などという表現手段によっては決して伝達され得ない性質のものであり、であればこそ、錬金術における古典的文書『沈黙の書』やラムスプリンクの『賢者の石について』のような版画や象徴詩などによる、人間の象徴的思考に訴えた表現方法が用いられざるをえなかったのだ。

魂の体験を得るための間接手段としての音楽、つまり音楽体験とは、魂の体験の一つの形に他ならぬ、ということができると思う。全身全霊で、かつ命がけで」
いているというのであれば、それはまさしく、魂の体験にまで高められるべきであろう。そして、その段階をへて次に、魂の内部の事実となった事物を出発点とすることにより、そこからさらに、今度は新たな創造を生み出す事が可能になるというわけである。その魂の体験とは、全て、象徴的かつ、暗示的な形で受け入れられるものであり、それは宗教における「啓示」と同じ性質のものに他ならない。そして、それの音楽における手段として、密教の「声明、（しょうみょう）」やユダヤ教会音楽などが現在でもまだ残っているのである。





Oh, come with old Khayyám, and leave the Wise
To talk; one thing is certain, that Life flies;
One thing is certain, and the Rest is Lies;
The Flower that once has blown for ever dies.

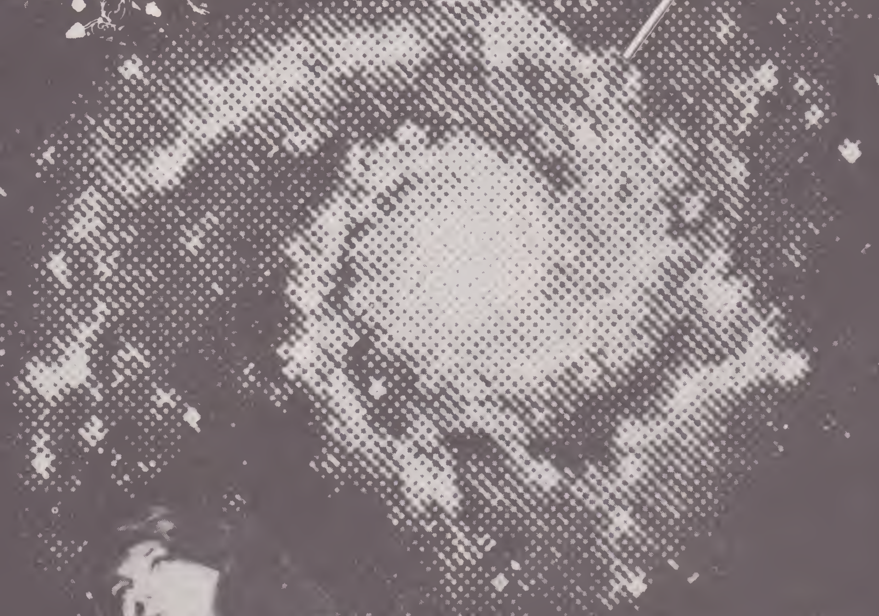
209. Macabre illustration by Edmund J. Sullivan for Quatrain XXVI of *The Rubáiyát of Omar Khayyám*, by Edward Fitzgerald, London, 1859.

薔薇の闇

Kate Bush

黄昏の中を家へと走って行くとき、
世界は夢のようだった。

公園内の樹木は、
湖に浮かぶ船のように
ふくらみ、波打って、
家までの道坂道が
生きていた……。



D・H・ロレンスは、性的な法悦を体験したあとのチャタレイ夫人の感覚をこのようにかいている。キンポウゲやコケモモの咲き乱れる大地が、ヒースのしげみが、彼女の足もとで、波のようにうねるのだ。まるで、ヴァン・ゴッホや、パウル・クレーの絵のように。そしてこれは、虚構ではない。法悦によって触発された彼女の、潜在的なエナジーが噴出し、まわりの自然をも歪めてしまうのだ。この、現代文明の方向を全くかえてしまうかもしれない、原初的な、ひと一人自爆させてしまう程のエナジーを持った力。こういうものをオカルティック、というのなら、ケイト・ブッシュは、まさしくオカルティックなものへのベクトル方向を持ったアーティストなのだ。そして、一番素敵なことは、それがアンダー・グラウンドではなくて、町にながれる音楽だということ。

磯村　知子

I．少女の情念とポップ・ミュージック

イングランドの初夏。黎明の光は、透明で淡い。木々の梢を透かして、無数の精霊が芝生へ降りてくる。大きな灰色の目をした少女は、光の中で踊っている精霊たちを捉えて、ロンドンの街角へ送り出してやるのだ。

1978年の春、ケイト・ブッシュの「嵐が丘」は、全英チャートの１位にランクされた。

パンク・ロックやニュー・ウェイブに混じって、この曲がロンドンの街中至るところに流れているのは、なんと不思議な光景だろう。だって、特に何度もくり返して歌われるリフレイン〝〞内の部分は、ヨークシャーの原野を失われた恋を求めてさまよう亡霊の声なのだ。まるで、吹きすさぶ風にかき消されそうな高周波の、アイム・ソォ・コォルド、という声。しかし、キャシーの亡霊の声は、いつのまにか、ケイトの声に変わっている。

私のものにさせて
あなたの魂を　この手に
掴みたい

Weithering Heights －from Kick Inside

荒れ果てた　風の吹きすさぶ原野
私達は　ヒースのしげみにくずれ落ちた
互いに貪り　飽くことを知らない
２人の激しい気性
私はあなたを　所有したいの
そんなとき　何であなたに
　私が捨てられて？
あなたが憎い　あなたを愛してるのと
　同じくらいに

ひどい夢魔にさいなまれて
　夜中　突然に目ざめたの
私はこの恋を失うという予感
窓の外　嵐が丘には
ただ風の吹きすさぶ音が
　聞こえるだけ

私にはあなたがわからない
あなたの心の　底知れぬ深淵
私の肉体はこの恋にぼろぼろになり
あなたなしで地獄に落ちてゆく運命を　見い出した
なんて残酷なヒースクリフ
私の　ただひとつの夢　そして神

長い長い冬の夜　私は慟哭する
あなたのもとに　もう一度帰りたい
何もかも　もとにもどったらと
私は　ここ嵐が丘を
永遠に　去ることはない

〝ヒースクリフ、わたし、キャシーよ。
　とても寒いの、お願い
　あなたの扉をあけて、中にいれて
　あなたの扉をあけて……〞

19世紀、産業革命の流れにとり残された原野に住むヨークシャー人の生活は、現代人のそれよりも、遙かにくっきりとした輪かくを持っていたに違いない。闇は真に闇であっただろうし、それをぬってさしこむ銀色の陽光は、神の様に荘厳だった。ここでケイトが形象化してみせたのは、キャシーという一人の少女の、自らの永遠に失われた肉体を求めてさまよう情念である。現代の人間たちは、自分の肉体を、真に感覚できるものとして、所有しているのか。そしてケイトの声からは、生をもっともっと鮮烈に生きたいという彼女の飽くことのない希求が伝わってくるような気がするのだ。

時の流れに浸蝕されず、それでいて女性の感性を持った少女は、いつの世にも魔性の象徴だ。彼女は恐いもの知らずで、自分勝手で、そしてひどく残酷だ。その情念は、心に堀られた斜坑のようなのだから、本来なら、清純な外見に惑されて、甘美な憧憬の対象にすべきものでない。斜坑からは、どんなものがとび出してくるかわからないのだから。しかし、このことがわかっていても例えば唐十郎は、少女にこ惑されてやまない一人だ。いみじくも彼は、その戯曲「少女仮面」の中で、「嵐が丘」のキャシーのことを、主人公に語らせる。キャシーが求めていたのは、一体何だったのかと。そして、彼自身はこう語る。

「僕は前から女きょうだいがないせいか、少女の権化というものに対して、すごい興味を持っているんです。よく、大学時代に、デートした女の子が喫茶店のトイレに入って、１時間も出てこない時なんかね、なんか、ビクビク、ゾクゾクするんですよ。何をやっているんだろうとね。そのうち、バーンとドア開けて、よく喫茶店のトイレにある汚物カンてやつ、あれを振り回して暴れ出すんじゃないかとね。だから、僕はルイス・キャロルの「アリス」なんか大好きです。つまり、少女の母親にならないで、母親になる前の独得な少女の季節の中に、何が彼女たちの脳裏を横切るかということが、すごく……。」

II．幼児体験

子供の時って、退屈することがなかったんじゃないかと思う。瞳に入るすべての光、耳にきこえる音、はだに感ずるもの－子供たちはすべての表徴を食べて生きる。目に見えぬ隠された意味を感ずる力－宇宙感覚は、子供のころの方がずっと強烈なのだ。それがだんだんに淡くなっていくのは、日常性の砂塵と、蓄積されてゆく固定観念のせいである。固定観念－それは私たちの意識の巾を恐しくせばめ、感性を貧しくし、クリエイティブなものから遠ざける。しかし流石に固定観念というだけあって、ちょっとやそっとのことじゃ消えやしない。夢を喪失した大人は、失った感覚を求めて、童話や絵本をなつかしみ、子供というものを描写する。しかしそれは、たいがい魚眼レンズで見たような、大人の観念にゆがめられた子供だ。すべての人が子供時代を経過するにもかかわらず、そしてその人の意識の深淵が形作られるのにもかかわらず、子供の心に写るものは、大人たちにとって解き難いなぞなのだ。そして、ここにあるのは、ケイトの語りかけるひとつの童話。

In Search of Peter Pan －from Lionheart
長い長いあいだ
僕はメソメソ泣いてばかりいた
大きくなんてなりたくなかった
大人になればわかるよって
みんな言うけれど
わかりたいなんて　思わなかった

いつも優しくしてくれるおばあちゃん
学校の門を出ると
いつも　僕をまってくれる
僕はまっすぐに
その腕の中に　とびこむ
おばあちゃんは僕を膝の上にのせ　こういった
「かわいそうに
　坊やはあんまり　感じやすすぎるの」
僕は急に悲しくなっちゃった
まるで僕が　おじいさんになった
みたいに　感じさせた

あなたは感じやすすぎるのよ、なんて言われて喜ぶ子供が、どこにいるだろうか。たとえそれが、いつもおとぎ話をしてくれるやさしいおばあさんのことばだろうと。いやそれが、自分の大好きなひとのことばだから、よけい悲しくなってしまうのだ。大人が何げなくいったひとこと、何でもないことなのに、急に悲しくなって、走り出してしまったことが、あなたにもあったのではないだろうか。走りつかれて迷いこんでしまった見知らぬ路地裏か公園、ふっと空を見上げてみたら、そんな時はたいてい夕暮だ。夕暮－世界中の光線が、この世のものとは思われぬ変容をみせ、時間の彼方に沈んでいくような一瞬。

もしも　もしも僕が大人になったなら
宇宙飛行士になって
ピーター・パンを　みつけるんだ
ピーター・パンはあの二番星に
朝がくるまでずっと沈まないで
夜の空を　かけまわる

僕の友だち　デニスは
鏡をみるのが大好き
ハンサムだろうって　自慢する
ところが　僕が鏡をのぞいたら
なんと　目ばかりが一ぱいで
顔はからっぽ
デニスは　ヒーローのブロマイドを持っていて
枕の下に　かくしてる
でも僕は　ピーター・パンの切りぬきを　持ってる！
ロケットにして
いつもポケットの中に　しまってる

“もしもあなたが
　星を越えたいと望むなら
　あなたが　誰であろうと
　そんなこと　問題じゃない
　もしも　あなたが
　光を越えたいと　望むなら
　あなたの　夢は
　きっといつかかなうでしょう”

ずっと昔のある夜、ひとりで暗闇の中に寝ていた。そしたら突然、ものすごい恐怖が私をおそってきた。黒々と渦をまく、闇の気配にのみこまれる！死がぱっくりと大きな口をあけて、私をのみこもうとした。突然の火がついたような、ものすごい泣き声に、家の者たちがおどろいてとんできた。私が何故かわからないがここにいて、何故かわからないがいつかは闇の中へ吸いこまれるのだという認識がとてつもなく恐かった。あれは、死の不条理の認識だったのかと思ったが、そんなのはあとで考えたことで、あの時はただただ恐かったのだ。その感覚は、20年近くたった今でも、記憶の底に残っている。

III．ダイアモンドの凧

ケイトは昔、精神科医になりたかったと語る。なるほど彼女の詩には、人間の深層心理への深い興味と驚異が感じられるし、人々に、もっと自分の奥底の声に、耳を傾けなさい。といっている様だ。ファースト・アルバムのナンバー「Kite」もそんな傾向が感じられるが、ロジックは抜きにして、この曲は彼女の作品の中でも、素晴らしく美しいものだ。ここには人間の内部世界、そして童話の交錯がある。

Kite —from Kick Inside
悪魔が　私の体内で渦いているの
足は鉛のよう
まるで地面から　根がはえたみたい
あの鏡の窓をつきぬけて
私の部屋を　飛び出すの
目の高さ位　丁度いいわ！
私の足は　ふわりと浮く
なんて素敵な　ながめかしら
夜空に大きな穴があいてる
大きな眼球のかたちして
じっと私を　よんでるわ！
ダイアモンドの凧になり
ダイアモンドの夜を翔ぶ
ダイアモンドの凧になり
ダイアモンドの夜を駈ける
光を越えて
月のした
光を越えて
月のした
光を越えて
月のうえ

ここのくだりは、感性の水が一気に溢れ出す様に美しい。ゆらりゆらりと大きな満月、雲の切れ目からさす銀色の光。さざ波のような町の光や、黒々とした森を、どこまでも越えて飛翔する凧。体内の悪魔、とか、鏡の窓とは何を意味するかとか、眼球の形のブラック・ホールとか、飛行とはリビドーの高揚だとか、分析しようと思えばできるのだが、そんなことはどうでもいい。ただ彼女のつくり出す音の気流に、流されていきたい。しかし、

止まらないわ！
まるで弾丸になったみたい
すごい気流に　体がもみくちゃ
帰りたい
うちの屋根はどこなの
手足なんか風にとばされて　暴風雨に舞う
羽根のよう
私本当に
飛びたかったのかしら
でも、どうやっておりたらいいの？

凧はだんだんに速度を増し、糸は切れて足にからまり、彼女の長い髪は手や体にからみつく。彼女はこわれたあやつり人形のような姿で、ついには光をおいこして、箒星みたいに赤い炎を出して燃えつきてしまうのかしら。これは古い童話や、たとえ話にあるようだ。

音楽は勿論、歌詩を分析して聞くものではない。しかし、彼女の歌には、内省的なものが多いのも事実。ためしに、「Lionheart」から「Full house」をストーリー・テリングにしてみると、こうなる。

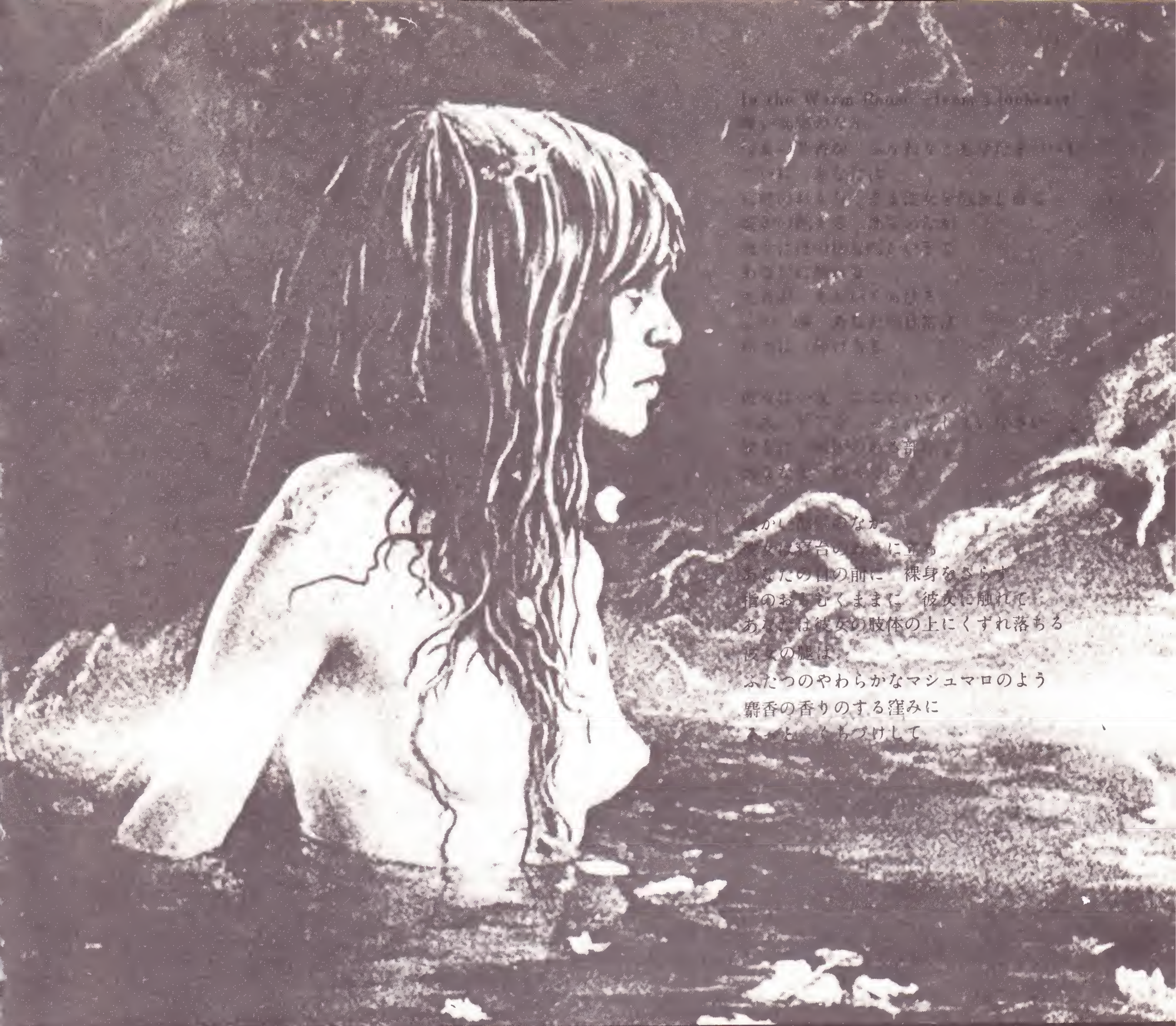
雨の夜、私は彼女の運転する車に乗せられ、見知らぬ所をドライブしている。するとワイパーが、フロントグラスにはりついた病葉を散らしていき、視界が明らかになっていく。ヘッドライトに突然の人影。なんとそれは、雨の中からもがき出ようとしている、私自身の姿なのです★私の敵、それは自分自身。もう一人の自分が、私の上にのしかかり、英知の光を遠くへもっていってしまうの。まるでそれは、過去へと逃避しようとしている、昔の私のようです★ひとたびイマジネーションに火がつくと、誰のものともわからない、幾千のざわめきが、心の中にわきおこってきます。その声は、ありもしないことをしゃべりちらし、耳をふさいでもがいても、だまってはくれません★今夜の私は、満員の劇場のざわめきの中、一人とり残されているようです。それは、私をぴーんと糸がはりつめた様に緊張させてしまう情動なのです★最初に車を運転していた彼女とは、私の愚かなプライドのこと。私は彼女に駆り立てられ、どこまでもいってしまう。でも、彼女は私をつれ出して、

スキをみて私の背にナイフをつき立て、殺してしまおうとしているの。だから私は、自分が今、何をやろうとしているのかをよく認識し、心の高揚と下降をコントロールする。原理に立ち帰って考えれば、これはむづかしいことではないのです。もし、彼女が騒ぎ出すようならば、ブーツの中にでもおしこめてしまうことにするわ。

彼女の歌は、自分の内方向へのベクトルを持っている。そして彼女は機知もあり、自分のことをたいへんよくわかっている女性の様だ。某メジャーな音楽雑誌のインタビューに、こんなコメントがあり、印象的だった。ケイトがデビッド・ボウイーに傾倒しているのは有名な話だが、それを知ったインタビュアーが、いいかげんなお世辞をいうのである。曰く、「D・ボウイとあなたは、よく比較されるんじゃない？」すると、ケイトは言う。「えーっ。うそでしょう。私にとって、これ以上のお世辞はないわよ。でも、」彼女は目をふせ、そしてもう一度インタビュアーを見ていう。「彼の音楽と私の音楽は全くといっていい程、違ったものよ。」

Ⅳ．薔薇の闇

ケイトの歌をきいていると、彼女はこの年の女の子にありがちの、エロティックな幻想を抱いているのかな、と思うことがある。彼女が私達を誘いこんでくれる暗がりは、漆黒の気配が渦をまくぬばたまの夜ではなく、さりとて澄明な冷気に満ちた夏の宵でもない。それは、しっとりと潤いを含んだ、薔薇の香りのする闇。その強い芳香のこ惑に、とりこにならないで……。



今までに、こんなストレートな歌を歌った女の子がいただろうか。(こういうのは日本語にしにくくて、訳してる方としては、ちょっと恥ずかしい。）彼女のアルバムは２枚とも、Ｂ面の２曲目はセクシャルな内容を歌ったもので、同じようにピアノのひき語りである。このなかには、ロック・ミュージックにつきものの、異常性も退廃も感じられない。おどろく程素直で、ポジティブなとらえかたなのだ。しかし、これが全然生々しいかんじをもたず、まるで羽根ぶとんの中でみる夢のようにやわらかなのは何故だろう。あいまいな言い方であるが、まだ彼女が少女だからだろうか。

突然の朝の光に幻惑されて、フロアを去っていくあなたの姿が、乳白色の影絵のようにゆっくりとうかんだ。私、今までどうしていたのかしら。これは私が今まで、一番ではっきりとみた、夢だったのだわ。私は時計の振り子の働きをとめて、その中にとびこんでしまった。もう、もどることはできない……。

性的なものとは、彼女にいわせるとこうだ。「それは、赤のイメージ。生命力の根源。体中の血が全力疾走し、テンションを放つ。そして、私達のリインカーネーション（霊的なるものが再び肉体を得て、地上へと降誕すること。これはキリスト教的な概念であり、日本には見られない）のいしずえとなるもの。」彼女の知性は、情熱を裏切っていない。こういう意味でも、私は彼女を、冒頭にあげたコンスタンス・チャタレイ夫人と比較してしまう。(あの小説は話題性の方が先行し、色々と誤解の向きも多いのですが、近来まれにみる感動的なものなのです。）こういうタイプの女性は、機械文明の現代では、ある意味で古典的で、そして新しい。これは知性と情熱の、たいへん幸福な出会いかただ。

ケイトの歌に出てくる少女は、多分仮面をつけた、写身の彼女であろう。彼女は、逡巡し受容する女性ではない。彼女の白い肌の下には、感性の琴線が、それこそ無数に、ピアノ線のようにはりめぐらされる。それらは、すべての刺激を受容し鋭く反応し、外界のすべてに対してアグレッシヴだ。それは気配をとき放ち、状況を創造してゆく。だからあなたは、彼女の華奢な肩とか、すんなりした手足に見とれてばかりではいけない。だって、彼女は透きとおった肌の下、こういっているに違いない。「私はあなたが好き。でも、あなたなど、恐れていないの。」

V．そしてさいごに

Hammer Horror。突然鉄槌でガーンとなぐられ、虚脱状態に落ちいってしまうような、ものすごい恐怖。生涯ではじめて経験するような、ひどい汚辱の気持。煉獄。

あの時鐘楼の上に立っていたあなたは
今はもう　いない
あなたをおいて　ほかに誰が
このノートル・ダムの眺めを
語れよう

ひどい恐怖に　震えがとまらない
わたしを　ひとりにしないで
私は生涯ではじめて
心に光をともし　魂を慰める
この恐怖はいつまでも　さりはしない
私のしてることは
間違ってはいないのだろうか？

あなたの残した偉大な足跡の
あとを追っている自分をみつけては
ひどい嫌悪に　かられるばかり
私は　知らず知らずに
あなたの面影を　追っていってしまう

あなたは私を導いたひと
でも　あなたを行かせたのは
私じゃない
私が望むのは　記憶の裂け目から
あなたを消すことだけ

通りの向こう側から
私を呼んでいるのは　誰？
私の肩をたたくのは　誰？
でも　振り向いたら
あなたは　いない

私には予感がしていたの
あなたが私に背を向けて
彼方へ　去っていくと
だから　私の望むのは
あなたを　忘れることだけ

鐘のひびきの余韻とともに、彼女の声はここで消える。でもストーリーはこれで終わらない。

彼女は煉獄をとおり抜け、今鐘桜の淵にたつ。彼女の心には、ある確信が育っていた。彼女は大きく息をすいこんで、ノートルダムの塔の上から、ひらりと身を踊らせる。ほのおの滑走路を一気にすべり、めくるめくような、急降下に彼女は一瞬、意識を失う。その時突然、彼女の体は、ふわりと浮く。

吸血鬼——
彷徨う血塗られた聖者たち

舘山　百合子

吸　血　鬼

およそ吸血鬼伝説ほど、広汎な分布を示しているものはあるまい。インド、中国からスカンジナヴィア半島に至る国々が、悪鬼の跳梁する暗黒の夜に脅かされてきたのである。古代の血塗られた神話に登場する邪神たち、ギリシアの女怪ラミア、インドの鬼母神カーリなどその歴史は古い。中世という暗黒期にはポーランドにウピル、ギリシアにブルコラカス、ドイツのドルド、アラビアのグール、ポルトガルのブルーカなど様々に異なる名称の妖怪がヨーロッパを恐怖に陥し入れたが、これらはみなヴァンパイアの異称であった。

ヴァンパイアの出没が最も頻繁であったのは周知の如くバルカン半島であるが、地理的にも東西交通の要所にあって、あらゆる迷信・伝説が流入してきたことからも、この妖怪がバルカンに腰を据えたのは当然であったかもしれない。キリスト教会の全面支配下にあった中世ヨーロッパではその反動ともいうべき悪魔崇拝が盛んであったが、教会はこれら瀆神的存在すべてを徹底的に弾圧しようとした。吸血鬼も教会の手によって次々と退治されていった。埋葬した時と屍体の位置が変わっている、埋葬後も屍体が腐敗していないこと等が吸血鬼を見分ける方法であったため、死後吸血鬼の疑いをかけられた者やその家族の墓までが暴かれ、無数の屍体が首をはねられた上火で焼かれたのであるが、その中には仮死状態のまま埋葬されて棺の中で息をふき返した者もあったろうし、棺が密閉され屍体の保存状態のよかったものもあったろう、教会は自ら死体凌辱を行ったのだ。

ここで参考までに吸血鬼発生の原因に触れておこう。なぜなら吸血鬼の登場するいかなる物語も、なぜ彼らが吸血鬼となったかについて殆んど説明していないからである。ディーター・シュトルムによると、死後吸血鬼になる可能性の強い者として下記の条件を挙げている。

1．犯罪者
2．私生児
3．生前魔法・妖術に従事していた者
4．イスラム教に改宗したキリスト教徒
5．永遠の死の贖罪に値する罪を犯した神父
6．破門された者
7．臨終の秘蹟を受けなかった者（自殺者）

あまりにキリスト教的戒律の色濃い定義であるが、この他にも厄日に生まれた者、恨みを抱いたまま死んだもの、そして畸型児までが有力な吸血鬼候補であった。もちろん生前吸血鬼と何らかの接触があった者、特に血を吸われて死んだ人間は必ず吸血鬼になるといわれるが、吸血鬼蔓延の発生源ともいうべきものはこうして生まれるのである。

ともあれ吸血鬼は存在した。ドラキュラ伯爵の名はあまりに有名だが、実在していたそのモデルについてはそう知られていない。15世紀ワラキアの大貴族、ヴォイェヴォーデ・ヴラド伯爵はその政治的・軍事的名声に関わらず、その名は恐怖の内に囁かれていた。敵・味方を問わず彼の気を損じる者をすべて杭刺しの刑に処すその残酷さ、自ら拷問器械を考案し楽しむ猟奇癖など、ジル・ド・レエ公や後のバートリ・エルジェベット伯爵夫人と相通じている。この悪行のため彼の名は死後、古来の吸血鬼伝説と結びつけられ、同一視されるに至った。権力の陰に残虐の限りを尽くした大貴族を黙認した中世という時代には戦慄を禁じ得ないが、やがて近世の理性の光が一条、この暗闇にも差し込んでくるのである。

彼方の丘にお前の光輝が消える——
ひとつの影が冷気をよぶ花環を運んでくる
おお、吸っておくれ、影よ、恋人よ、
わたしの血の力のかぎり、
わたしが死のまどろみに落ちて
愛することができるまで——

映画「聖ジョージと七つの呪い」より

映画「**ドラキュラ**」よりベラ・ルゴシとヘレン・チャンドラー

18世紀に入って近代合理主義が暴き出したものは、野蛮な中世の忌しい迷信を温床とし、手のつけられない程増殖した吸血鬼の群れであった。もちろんこの科学の時代にあってこれら前世紀の遺物は存在してはならないものであったから、ヴォルテールを始めとする啓蒙思想家たちは教会の打ち込む杭より効果的に、科学と理性の力で吸血鬼どもを退治していった。すでに魔女裁判は下火になり、教会の勢力も徐々に衰え、科学の勝利はもはや決定的であった。迷信はすべて根絶され、ヨーロッパに吸血鬼はいなくなったのである。

しかし18世紀も終りに近づいた頃に、突如としてこれら中世の怪異は復活した。あまりに明るすぎる近世の光に目のくらんだ人々は、失われた中世の闇と暗鬱を渇望するようになり、ディレッタントの悪夢にすぎぬ最初のゴシック・ロマン『オトラント城奇譚』は熱狂的に歓迎された。そして19世紀に入り、吸血鬼は朽ちた棺からその身を起こすかのように、再び鮮生したのである。

前掲の詩は神秘主義的なロマン派の作家、シャルル・ノディエの詩の抜粋であるが、吸血鬼のイメージの側面をかくも美事に表現している。吸血鬼はロマン派の芸術家たちの、陰鬱な、そして甘美な夢想のなかで、自由奔放な主役を演ずるのである。

吸血鬼文学といえばやはりブラム・ストーカーの『吸血鬼ドラキュラ』が浮かぶことと思うが、吸血鬼をテーマとした文学や詩は古今を通じて枚挙の暇がないほど数多い。もちろんそのすべてを挙げることは不可能であるが、主に19世紀以降のものを中心に、出来得る限りの分類に基づいて紹介してみたい。

1)、土着の迷信に基づく吸血鬼

吸血鬼文学というよりは、むしろ伝承説話の形を借りた本来的な吸血鬼の現われる小説、という意味で分類してみたが、ストーカーの『ドラキュラ』はむしろこれに属すると思われる。恐怖の渦中に巻き込まれるのが平凡なアメリカ人の主婦であるという設定や、手紙の形式をとった倒叙法の構成など新しい手法を取り入れているが、恐怖の核であるドラキュラ伯はトランシルヴァニアの古城に甦えり、生命の渇きを癒すために美しい処女の生血を漁る――追いつめられ遂に止めの杭を穿たれたドラキュラの顔に「よもやそんなものがあろうとは想像もされなかったような平和の色が浮かんでいた」という結末に至るまで、あまたの古文書に残っている民間伝承の吸血鬼伝説に忠実である。ドラキュラ伯は吸血鬼本来の欲求に忠節を尽くした正統派であるといってよい。

ロシアの文豪アレクセイ・トルストイの知られざる名作に『魅入られた家族』という短編があるが、これはセルビアの民間伝承に取材した吸血鬼譚である。物語の骨子は山で死んだ老人が吸血鬼となって帰ってきて、そうとは知らぬ家族を次々と襲う、といった定石通りのものだが、面白いことにセルビアの吸血鬼についてかなり詳細に触れている。ヴァウダラクと呼ばれるこの妖怪は、エストニア、モルダヴィア、ボスニアなどに多く、すべての村人がヴァウダラクで成り立っている程である。近親者や友人の血を特に好み、とねりこ材で作った杭を受たれると悲鳴を上げて崩れ去るといわれる。尚、吸血鬼と思しき人の名を直接口にしてはならない。それは死者を墓から呼び起こすことになるからだ――モルダヴィア地方の伝説を素材に、さすがトルストイは幾つかのエピソードと荘重な筆致で、畏怖すべき小品に仕上げている。

他に民話から直接取材した吸血鬼文学としてはドイツの文豪ゲーテによる詩『コリントの花嫁』、メリメの『ラ・グヅラ』(イリリア地方の伝説として発表されたこの作品は、後になってメリメの完全な創作であることが露見したのだが)、ゴーゴリの『ヴィイ』、マリオン・クロフォードの『血こそ命なれば』などを挙げておこう。これらの作品に登場する吸血鬼たちは後に述べるロマン派の吸血鬼たちとはどこか異っている。恐しいには違いないが、エキセントリックに魅惑的な後者に比べ、いささか泥臭い体質を持っていることは否定できない。彼らは単に忌むべき怪物として、何の感傷を呼び起こすことなしに次々と退治されていったのである。

2)、誘惑者としての吸血鬼

ロマン派の吸血鬼たちは、墓場の屍臭のなかに甘いエロスの香を忍び込ませた。誘惑者たちは、巧妙な手練手管を用いて自ら選んだ生贄をがんじがらめにしてしまうのだ。このくだりは多くの作品の随所に窺うことができる。有名なものではジョン・ポリドリの『吸血鬼』、シェリダン・レ・ファニュの『吸血鬼カーミラ』があるが、面白いことに両者ともに誘惑者と生贄の間に同性愛的関係が結ばれている。美青年オーヴリーに近づくルスヴァン卿の挙動にはどこか凝似ホモセクシュアルの匂いが感じられるし、一方のカーミラはレスビアンで、自分と同年輩の貴族の子女ばかりを狙うのである。カーミラの場合、単に餌食としてでなくその暗い邪恋の対象をも欲しているので、相手はどうしても貴族の美少女でなくてはならない。そして一度狙いを定めたら、甘い言葉とわななく吐息でじわじわと相手の内に忍び込んでいくのである。
———月光を浴びたカーミラが、なんとその時美しく見えたことでしょう。恥ずかしいような妙な顔つきをして、いきなりカーミラはわたしの首すじと髪のなかに顔を伏せますと、すすり泣くような切ない息づかいをしながら、わななく震える手をわたしの手におしつけるのでした。柔かなカーミラの頰がわたしの頰に火のようにほてって、「かわいい人、かわいい人」とつぶやきながら、「わたしはあなたのなかに生きているのよ。あなたはわたしのために死ぬのよ。それほどわたし、あなたを愛しているの。」わたしはハッとして彼女から身を離しました。火のように燃える、すべての意味をこめた目つきでわたしにじっと見入っているカーミラの顔が、まっ青に色を失っていたのです。———墓をあばかれ棺の中で灰燼と帰した後、なおカーミラは自分のものに出来ずに終った美少女ローラに、様々に変化する戦慄のうちにも甘い想い出を残すのである。

この墓場の恋情ともいうべきものは、テオフィル・ゴーチェの『死女の恋』においてよい真摯に貫かれている。幼時から僧侶になることだけを夢みていた青年が、宿願就って遂に聖職を授かることになった。その晴れの式の当日、式場で出会った一人の女に激しく心を動かされ、彼は僧籍を投げうって彼女のもとへ走る。女は彼を若い貴公子に仕立て上げ、2人は日々遊楽に耽ける。しかしその女こそ、非道の浮き名を重ねて死んだ高等内侍クラリモンドであった。彼女は、青年に取り憑いた悪霊を呪う老師セラピオンの手によりあえない最後を遂げる。確かに彼女は怖るべき吸血鬼ではあったろうが、同時に自分の運命を嘆く哀しい女でもあった。愛するロミュアールの腕に細いピンを刺し、滲み出たほんの一、二滴の血しか彼女は吸おうとしない。「一滴だけちょうだい。私がこうやってあなたと一緒にいられるためにはどうしても命をわけてもらわなくてはいけないの。」小さな傷に丹念に包帯を巻きながら、彼女は愛する男の腕を涙で濡らすのである。まことと、クラリモンドこそ聖女だったかもしれない。それが故にロミュアールは、杭を打たんとするセラピオン師の行動を「身の毛もよだつような神聖冒瀆」と感じたのである。

もちろんこのような殉教者的な吸血鬼はむしろ稀であり、もっと邪悪な、または淫らな欲望を抱いているのが普通である。カール・ジャコビの『黒の告白』では廃屋に身を潜めた姉弟が、月夜に訪れた者を次々に誘い込み、その血を吸う。ジョン・メトカーフの『死者の饗宴』では下男として雇った得体の知れない男が、その家の少年に取り憑きその生命と若さを吸い尽くす。結末はショッキングである。

アントワーヌ・ウィルツ「うるわしのロジーヌ」

レオノル・フィニィ　「若者の眠りを窺う黒い牝のスフィンクス」

すべての生命を吸い取られた少年は老人の如く白髪になり、醜悪な皺だらけの骸となって息絶えるのである。ウェイクフィールドの『闇なる支配』は、美しい家庭教師の性的な誘惑に翻弄され死に至る青年の告白であり、このような誘惑者として現れる吸血鬼のイメージの、最も端的な形であろう。しかし、闇から囁きかける吸血鬼たちの甘美な誘惑を拒みきれる者が果しているだろうか？

３）、潜在する女性的イメージとしての吸血鬼

フリッツ・ライバーのＳＦに『妻という名の魔女たち』という長編がある。外の世界、すなわち社会における夫の身の安全や成功は、そのすべてが内の世界である家庭の中で妻が行っている魔術や護符のおかげなのだ、というストーリーで、なかなか興味深かった。女はみな魔女であるという極論に走らずとも、中世の異端諮問において、男性の妖術師とは比べものにならないほど多くの魔女が摘発されたのは事実である。ヒステリックな感情の昂ぶりの中に、狂的な放心状態の中に、男性には決して見られない何か魔性のものが潜んでいる。セックスにおいても、女性は「生命の源泉」である精液を「吸い取」っているのだ。レオノル・フィニィの『スフィンクス』の絵を見たまえ、疲れ一切って死んだように眠る若者を、情欲に燃える目でなめずるように窺っている黒い牝のスフィンクスを。愛する者の全生命を吸い尽くし、女はより美しく激しくなるのだ。

ウェルマンの『月のさやけき夜』では死せる妻が吸血鬼となり、家に閉じ込められて半病人となった夫の血を夜な夜な吸いに来る。コリン・ウィルソンの『宇宙ヴァンパイア』、これはＳＦで怪物の正体は宇宙生物であるという設定だが、魅惑的な肢体の女性を宿主として寄棲し、男性から精神的エネジィを吸い取っていくのである。一つ面白い例がある。ケラーの『月を描く人』は、溺愛的な母性に潜む魔性の力ともいうべきものを扱っており、それを受けた息子の奇怪なコンプレックスが恐しい結末を生み出すのである。簡単にあらすじを紹介しておこう。

画家になるべく幼少時から母に厳しく仕込まれた青年は、画壇での地位を獲得した後も、あまりに厳しい母親の干渉の末、恋人との仲も引き裂かれ、遂に発狂して精神病院に入る。母親はホイッスラーの『母の像』を病室の壁に掛け、絵の道具を持ち込んで息子の回復を待つが、まもなく母親は死んでしまう。その知らせを聞いた息子は、突然病室の壁に奇怪な絵を描き始める。『母の像』のまわりに月と血を滴らせた女たちの群と、一人の傷だらけで横たわる男——そしてその夜、壁に描いた月が光を発し、女たちは壁から抜けだし狂った画家を襲う。次の朝、彼の姿はなく、壁の絵も消え、ただ『母の像』のみが残っていたが、その唇には何やら赤い汚点が付いていた———何とも凄惨な話であるが、結局息子は母親に連れていかれたのである。インドの鬼子母神の例をひくまでもなく、母性の持つ残酷な一面を見せつけられるような気がする名作である。

４）、その他

これから述べる吸血鬼たちはいくらか特異な性格を持っているが、吸血鬼の様々な特筆の一面をそれぞれ代表していると言っていいだろう。恐怖と陶酔、邪悪と献身、汚穢と聖性など相対する要素の昇華された部分こそ、吸血鬼幻想の本質なのである。

吸　血　鬼

クラーク・アシュトン・スミスが『白い巫女』で描いているのは「死すべきもの」と「不死のもの」との恋である。南米セルナゴスへ帰郷した男が、雑踏で見かけた美しい巫女を追って冷気漂う山へ登っていく。山頂で彼女と再会した彼は、我を忘れて巫女をかき抱く。すると———えもいわれぬほど恐しいことに、彼が彼女を抱きしめたとき、彼女は彼の腕の中で変化した——氷造りの墓に何年間も埋葬されてきたような氷結死体へと——その霜降る目の中には恐しいまでの究極的な空虚しか見出すことのできない白いミイラへと……次の瞬間には、それは形も名も持たぬものに変った——彼の腕から流れ出し、渦を巻く暗黒の腐敗物へと——さらに思わず退いた指の間を立ちのぼる無色のちり、きらめく原子の雲と化したのだ。あたり一面、何もなかった———そして彼の頬には、消えることのない白い唇のしるしが残されたのである。ここで強調したいのは、「死すべきもの」と「不死のもの」の越えることのできない深い溝である。「死すべきもの」は死なねばならぬ運命を背負っているが故に完全な生命を享受しているのであり、「不死のもの」は、永遠ではあるが半ば朦朧とした霧のように希薄な生しか持っていない。従って、「死すべきもの」である人間が「不死のもの」を抱いたとき、その溢れる生命の力が、流れる靄のような永遠の霊を瞬時に凝結させてしまったのかもしれない。

エーヴェルスの『ヴァンパイア』は、そのタイトルに比して吸血鬼自体が現われるのは最後のページにすぎない。神秘占星術やお護りのナイフなどオカルトじみた小道具は使っているものの、この膨大な文章を支配しているのは壮厳な民族意識である。主人公フランクの故郷はヨーロッパだった、祖国はドイツだった、彼はあまねくヨーロッパの文化国民（ナツイォーン）だった。第一次大戦下、彼はニューヨークで、祖国ドイツのためにスパイ活動に情熱を注ぐ。彼にとって憎むべきは世界を煽動する狡猾なイギリス人、富と偏狭な市民精神を振りかざす俗悪なアメリカ人だった。富豪の令嬢アイヴィは金で肥え太ったアメリカの象徴であり、ロッテ・ヴァン・ネス夫人は憂愁のヨーロッパの象徴であった。夫人は、自分が吸血鬼であるとはつゆ知らぬフランクに、沈黙のうちに自らの血を与え続けるのである。この長大な物語のすべてをここに要約するのは無理であるが、ヨーロッパを愛する人たちに、この物語の雰囲気を少しでも感じ取ってもらいたい。

———あわれなフリードリヒ皇帝は年老いて病気で、シェーンブルン宮にひとりぼっちで座って泣いている——毎日毎日泣いている———彼の妻と息子は殺された、皇帝は城にひとりぼっちで泣いている———

大戦下にあって、これはまさに滅びんとするドイツ民族の嘆きの弔詞なのである。（作者エーヴェルスは後年、熱烈なナチ党員となった）

吸血鬼をパロディとした小説は最近非常に多くなったが、中でもリチャード・マシスンの『血の末裔』はHow to be vampireともいうべきなかなか面白い短編である。吸血鬼になろうと決意したジュールス少年は、『ドラキュラ』をむさぼるように読み、近所の女の子を襲い、遂に我が身を「伯爵」と名付けた動物園の吸血こうもりの前に投げ出す。血を吸われ意識が混濁した少年の目に、黒マントを着た背の高い人影が映った。それこそドラキュラ伯であり、彼は少年に「わが息子よ」と呼びかけるのである。吸血鬼小説の定石を逆手にとったこの手法は、大悪魔ドラキュラをも

マリー・ウィグマン 「聖化と聖職者勤行としての舞踏」

どこかユーモラスな存在にしてしまった。

三島由紀夫は御存知のとおり、デカダン趣味に色どられた雑誌「血と薔薇」の創刊者の一人だが、彼のそうした一面が退廃的な異国趣味の吸血鬼小説を生み出した。好事家の父と、平気で煙草をふかすその幼い息子は、気に入った家を探してロンドンを歩き回るうち、蒼白く陰欝な紳士と出会い、その家に招かれる。家と男をすっかり気に入った父と子は頻繁に彼を訪ずれるが、ある時男は長い旅行に出かける。帰りを待ちかねてその家へやって来た父と子は、深夜の街路に響く靴音を聞く。そして父は息子の耳もとに囁く、「今夜から私たちは3人になるんだよ、坊や」——実に暗示的な結末を持つ、『仲間』と題されたこの小編はわずか5ページながら過去に起きたこと、これから起こることを不気味に仄めかしているのである。

三島の文才は吸血鬼側の光惚ともいうべき心理を、『孔雀』という別の短編の中で見事に表現している。これは少年期の自己の分身が登場するドッペルゲンガー現象の見られる特異な物語である。以下抜粋する文章において、凌辱され虐殺されるのはインド産の美しい孔雀であるのだが、どうかそれを生贄である人間に置き換えて読んで頂きたい。———散乱する緑の羽毛、ああ、その時をどんなに待ちこがれ、その解放の時をどんなに夢みて、あれらの青緑色を放つ羽根毛はおとなしく孔雀の身に貼りついていたことか。今度はその小さな羽毛の一枚一枚が、微少な無数の孔雀のように、その緑の煌きを思うさま飛び翔たせたのだ。ああ、それから貴い血が、孔雀の羽根に欠けていた鮮かな朱のいろが、どんなに華麗にほとばしって、その身悶えする鳥身に美しい斑をえがくかが見られたことだろう。荒れたすさまじい朝空のひろがりの下に、横たわるその獲物。しずかに土にしみる血。ああ、それを見なかったのは俺の一生の痛恨時だ。もし俺が殺していたのであったら——犯人が嫉ましい。せめてその世界で最も豪奢な罪を犯した奴の顔を見てやりたい——その犯罪を犯したのは誰あろう、他ならぬ彼自身のドッペルゲンガーだったのである。

長きにわたって吸血鬼伝説及び吸血鬼文学について述べてきたが、吸血鬼は単に伝説や悪夢の産物である邪悪な妖怪ではないと思えてならない。吸血の衝動自体は、人間の深層部に沈むむしろ自然の欲求なのである。心理学者マリー・ボナパルトによると、接吻が愛情の表現であることや、恋する者や両親の多くが、その愛人や子供にむかって「お前を食べてしまいたい」と言うことにはそれなりの意味があるそうだ。通常の場合は愛する対象を我がものにするために、それをのみこんでしまいたいという欲求はプラトニックなものにとどまるが、時として世間を驚かすサディスティックな倒錯者たちは、その犠牲者の肉を食い血を吸うことによって、その切なる欲求を満たすのである。我々にしても、愛する存在を完全に所有したいがために殺してしまいたい、その肉体の一部を摂取して、自己の中に同化させてしまいたいという衝動にかられることは、よくあることなのではあるまいか。とすれば、吸血本能とは、人間の生存の根底を成す愛やエロスに根ざしたものなのだといえる。すべての人間の心の底に、闇から窺う吸血鬼が潜在していないと一体誰がいえよう？死せるものに独自の生命を与え、生者との交りを可能にするこの不思議議な力が、瞬の閃きにすぎぬわれわれの生命を、たゆたう永遠の存在へと昇華させるのだ。

〝私はより個人的・自己中心的になるにつけて、より深淵なものに手が届き、すべての人間を包括する普遍的なものを把むことができるようになりました。普遍的なものに到達する最大の源泉は、もはや自我ではないことに気がついたんです。愛がそこで出会い、より全体的な視野がそこから浮かびあがってくるような、何かもっと別な具体的なもの、つまりすべてのものを放射する中心があると思います。〟

——スタン・ブラッケージ

音楽の生命線

渡辺 仁

スタン・ブラッケージはアメリカの実験映画作家であり、彼の代表作「犬・星・人」は目を開けている時、閉じている時を問わず視覚に訴えかけてくる閃き・記憶・想像・夢・幻覚までも含む〈目に見えるもの〉全てをフィルムに定着しようとした彼の、極限にまで高められた映画である。

それはさておき、興味を強く魅かれるのが、この言葉がコリン・ウィルスンが彼の著作「敗北の時代」の中で〝ヒーローの問題は、内部へと向かってからもう一度外界へと戻ってゆくことだ〟と述べたことと酷似していることだ。

この言葉は、日々を生きる上でも創造行為においても最も重要な核心であり、生命の根源的、本質的、絶対的な大河に沿って流れ、自己の閉鎖的単一性から脱却して宇宙化しようとする態度の現れである。単に自己愛が強力な主張をするあまり、他者に自己の存在の承認を強要しようという権力志向にすぎない〈自我の拡大〉とは根本から相違している。

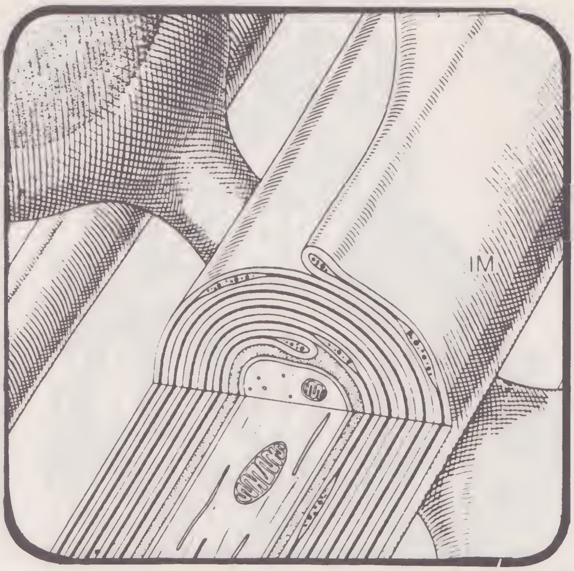
この稿は、音楽がより個人的より内面的になっていくことを否定した所から現在のニュー・ウェイブが生まれた、という考え方に全く逆の立場から、ロックの誕生から成長、変質さらにニュー・ウェイブの誕生という流れを一線で結ぶ為の、〈唯我主義〉あるいは〈特殊化〉という媒介を導き出す為のものである。（パンクが不良青年の反抗音楽だなどと言っている馬鹿は相手にしない）またこの稿は、物語がまさしく〈物を語る〉だけのものでよかった良き時代でなく、作品が自己完結することなく多岐に渡って作用をなしてしまう時代に、送り手と受け手が同時に生活者としてあるのだから、ひとつの作品を大事に取り上げそのものについてのみ語ることの愚かさ、無意味さに陥ることのないよう注意をはらって組み立てられている。

私は運良くニュー・ロックの出産に立ち会い音楽の感動を体験し、ロックの成長と共に私自身の成長もあったようなものだが、いつの間にやら互いのスピードが異なってしまったのか道が分岐してしまったのか、こんな文章を書く破目になってしまっている。というのは余談であるが、創世期のロックの確かな目的意識と無限に続くのではないかとも思えるエネルギーが、聴衆の感動の引き金を引いたのであった。

それは目前の社会不安やベトナム問題のせいだと言われれば、その通り、ベトナム戦争終結後のシーンの変容ぶりを見れば反論の余地はないが、少くとも他人志向型かつ男性型社会からの離反、主体性の奪回という点で、新たな宇宙観の獲得への第一歩であると認めて差し支えなかろう。そして、この新しい世界像はドラッグ文化の落し子サイケデリック・ムーブメントを抜きにしては語ることはできない。

サイケデリック・ムーブメントは、当時ドラッグによって初めて知った感覚——つまり強裂な色彩、外界との合一体験による恍惚——を正直に再現しようとしたナイーブな感性を感じ取ることができる一方、現実を忘却してしまえばハッピーな気分になれるという俗物的な一面があったことも忘れてはいけない。しかし、その新鮮な驚きを音楽によって他者と分かちあおうとした、音楽を選んだ者達は一方では歌詩の可能性を見出し、一方では既成の音楽にはあり得なかった音響の発見、新たな他ジャンルの手法の導入・発明を行なった。ジェファースン・エアプレーン〝ホワイト・ラビット〟、バーズ〝霧の８マイル〟など思い出そうとすると数限りない。ビートルズの〝ルーシー〟でもよい。

ところが現実がドラッグ文化をまだまだ目新しい汚物のように扱っている間は問題はなかった。その内浮かれた馬鹿共が働かなくても一応は食っていける社会をいいことにエセヒッピーとして風俗に入り込む。戦いを放棄した保守自由主義者の文化人共が新しい文化の擁護を始める。そうする内に次第に新鮮さは薄れ手垢にまみれたドラッグは、



酒の代わりに容認され巷に蔓延する。オーライ。

しかし、彼らは先駆者であった。可哀そうな早く来すぎた者達であったのだ。自分に正直に生きようとしてみただけの、みずからを商品化することなど考えたこともなかったミュージシャンが、業者によって操られ、個人的な意識と外部の現象とのギャップを埋めることができずに、麻薬中毒患者になってしまうか気狂いになるかして死んでしまったジミヘン、ギャニス、ジム、モリスン……。彼らの想い出を語ることでは何も生み出し得ない。私達は彼らの轍を踏まないように賢くなるだけでいい。それでなくとも、普通の一般市民として高級生活者へと収まってしまうミュージシャンが多い中、そんなロックがいくらドラッグだ革命だとか騒いだ所で見せ物でしかないことを見抜けない聴衆が多すぎたのだから。

ニュー・ロックの貢献は、新しい価値観、道徳、ライフ・スタイルを現実に持ち込んだという程度である。大ざっぱに言ってだが。

〝人間に必要なものは、人間を個的な限定された世界から〈宇宙〉へと拡大溶融せしめる神秘体験であり、音楽はその為の最も適した手段である〟と以前に何かのミニコミに書いたことがあるが、これに加えて〝権力への本能の発現である自己愛の罠に陥ることなく、しかも他人との無意識ないしは意識的な相互補償関係——なれあい——に甘えずに、自我ならぬ自己そのものを深化し拡大するにはどうすべきか〟という意味のことを中村保男氏が書いておられるのを読んだ時に、ロックが得ようとしていた、従来の音楽ではその片鱗にさえ触れることのできなかったものが、これではなかったのだろうかと確信した。

生命の高揚感や一切の曖昧さを排した内視を一般の感動から区別すると、この種の体験は数えるほどしか味わうことはできない。ロックが芸術であるメディアであると、私達を期待熱狂させた者達が今ではショー・ビジネスという古い社会での駒でしかなかったことを自ら暴露している。

こうして、ニュー・ロックとしてうぶ声をあげた音楽の本質的な機能も、古い体制の中でその先の道を見出せぬまま、ブームは次の標的を捜し当てようとしていたのだが、

果たして、ハード・ロックは音楽としてのアート・ロックの正統な後継者だったのだろうか。点検しておかねばならない。

とは言ってみたものの、今さらハード・ロックについて何か書くという気に全くならない。なる訳がないのだ。現在でも次から次へと新人ハード・ロックのアルバムが登場するが、これはロックがまだビジネス——金儲けでしかない証拠。いわゆるあの当時のハード・ロックは、文字通り役目を終えて消滅してしまっているのが自然なのだが。

気を取り直して簡単に言ってみれば、ハード・ロックは、現実世界の破壊を意図した時にエネルギーが生じ、〈反世界〉の創造を目指した時に核が生まれ、多くのシンパシーを得てブームになった。とこの程度。煽られた者こそいい迷惑だったと言わない。かく言う私だってハード・ロックで生きながらえることのできた一人である。ところが、この世界が気に喰わなかったのはいいとして、それが気分でしかなかった為に現実棄却の態度でしか発露されず、衝動が客観視されないまま言いたいことを直情的に言ってしまうことによって、結果として受け手との間のコミュニケーシ

ョンは破綻をきたし、緊張感は怠惰な快楽へとすり変わり、コンサートはバカ騒ぎのパーティー会場と化し、はたして〈創造〉は〈現状維持〉へと落着した。

ハード・ロックの否定面を見ればこういうことだ。

ただしハード・ロッカー達の世界への認識も自分達人間についての認識も正しかった。多くのレコードを真剣に聴いてみればより一層明確にわかるだろう。特に、今なおパワーを保ち現実の裂け目を照射するに足るアルバムをあげれば、ブラック・サバスの〝マスターズ・オブ・リアリティ（71）〟と〝ブラッディ・サバス（73）〟ＢＯＣの〝ティラニー・アンド・ミューテーション（73）〟である。それ以前ではドアーズの〝ブレーク・オン・スルー〟を筆頭にＭＣ５の３枚のアルバム、ブルー・チアーの初期などが傑出している。

つけ加えておくならば、社会から拒絶されていた者が社会へ絶縁状を叩きつける行為で社会へ帰化していくことが起こり得る訳で、これはパンクが出現した時に感じたことなのであるが、詳しいことはまた別の機会に触れるとして、パンクが不良青年の音楽態度ではなく観念の簡素化・現実化の態度であると分かった瞬間から、ある程度の安心をした。それにしても、聴き手に自分を信頼に足る存在だと確信させるような〈勇気づけ〉が、この世には常に必要だ（まだ！）ということを、これから何かをなそうとする人は念頭においていて欲しい。

この稿で語られていることは多分、音楽のほんの一面を拡大したものにすぎないかもしれないし、多くの音楽ファンの聴き方とまるで違ったものかもしれない……などと言っても全然本気ではないので気にせずに、プログレッシブ・ミュージックと宇宙論へと話を進めるが、あくまでプログレッシブとは音楽形式について指す形容詞でなく、精神の拡張の時代的先端部のブツ切り部分を指すのだと断わっておく。

人間の錯覚を利用して宇宙気分にいくら浸ったところで、人間が真の宇宙的存在になれるわけではない。しかも、本当に自らを地球の呪縛から切り離し高みへ舞い上がろうとする者は、しっかりと大地への開かれた意識＝愛を生きぬく覚悟がなければ何処へも行ける資格すらない。現今のＳＦブームが実はただの宇宙ゲームという玩具のブームでしかなく、真にＳＦが定着したのではないことは誰にでも容易に推察のつくことであるが、例えば、あるアーティストが〈宇宙〉に関してのメッセージを発する時、自分もメッセージの受け手も、同時に同様に〈宇宙人〉であるという一体化への主体的参加の認識がないとすれば、それは最も重大かつ致命的な誤謬だと言わねばならない。

同様に音楽でもしかり。メッセージが丸々プログレッシブであった初期の〈プログレ〉は重たく、暗く、美しくさえあった。それはサイケデリック・ミュージックの、信じがたいほど世界が美しいと見ることのできる無垢な子供ならではの歓喜と不安から生まれた弾力性や色彩感と異なり、その相違は、一段階成長した宇宙観を識ることのできる時代が訪れたせいであろう。でなければ、過去に対して積極的な見切りをつけなければ明日に向かって跳ぶことが不可能な厳しい状況が顕らかになったせいであろうか。故に、このような時代では、音楽が現実をだしぬくきっかけとして、受け手へ〈合一〉への参加の意志とその勇気があるかと訴え挑戦しているか否かで、その音楽の質を読み取ることができる。それ以前にきっぱりとした姿勢とさっぱりとした靱かさの感じられないものは、いつ聴いてもまだるっこい。

以上のことは〝スペース・リチュアル（73）〟までのホークウィンドを聴きながら考えをまとめた。この頃のホークウィンドの音楽が整然とした永遠の一部を切り取った様な印象の上、一種の全感覚を刺激する総合芸術であったことは、一瞬一瞬淀みがちな頭脳に動性をよみがえらせ溢れさせるに充分であった。

定めの星について行きなさい
その光の流れに流されなさい
きみが、探していたものは
そこに、たしかにあるでしょ？
確認したら
帰ってきて救世主になりなさい

〈スペース・シャンティ　訳・岩谷宏〉

さて、こうした最終的結論の表明者としてのミュージシャンはあと何人か思いつくのだが、ボウィとかフリップとか、だが大半の〈プログレ〉は、ペシミスティックであっ

たということに対して苛立ちを覚えるのは正解である。正しい現実認識をいかに体現するかによって、木乃伊取りが木乃伊になってしまうことは多々ある。また、外の世界の混乱、迷妄について口を開く時、彼は自分のシニシズムを褒めてもらいたいか自身のニヒリズムに酔っていたいかのどちらかなのである。さらに、苦痛に敏感すぎる者は、ただ泣き叫ぶだけでよいものを、苦痛を柔らげる歪んだ方法を考えついたり狂った判断をしてしまいがちなのだ。

〈無私〉の音の創造が早い時期になされなかったのも、誰もが自分なりの苦痛となれあう方法を持って逃げ場に隠れっぱなしだったということなのだろう。相も変わらず私達一人一人の間隙を満たす潤滑剤は品切れを続け、サングラスとマスクが売れ続けるとしたら、これほどの不幸はない!!

〝ペシミズムとは自身の純粋性を保つ為に、狭隘な自らの領土に境界線を引くことで、広大かつ深淵な外界への接触点を閉ざすこと〟という意味のことを前述のコリン・ウィルスンが言っているが、個に閉ざされることと個の内奥へ沈潜してゆくこととの相違をはっきりと知ることで、進化の意志を拒むペシミズムが現実を生きる態度としては否定されるべきものであることは明白なこととなる。

文学においては、ペシミズムの生み出す知的怠惰に戦いを挑んだ作家達を知ることができるが、文学的ペシミズムは文学という土壌の上に成り立っているものでしかないので、その完結性、自閉性はた易く見分け崩すことができるのである。しかし音楽においては、音楽の属性によって、ペシミスティックな音楽とはどういうものかを言葉で説明することは困難だ。とは言え、聴き手の感受性が嗅ぎ取り自己の中のペシミズムを破壊することが可能な所に、音楽故の救いがある。

〈無私の音楽〉、イーノ方法によって導れる体験は、日本の映像作画・松本俊夫の言葉を引用すれば

〝作家が自分の個人的世界をひたすら純粋につきつめてゆき、そのエネルギーが一定のヴォルテージに高まるなかで、ついには眩暈をひき起こす次元でやってくるのだ。そこでは自我は混沌とした一種のパニックを経て、かぎりなく無化され一瞬我を忘れたトランス状態を経験することにもなるだろう。ともあれそのような位相で、すべてのものを放射する中心、すなわち集合的下意識は自我にのりうつるようにして外化されるのである。エクスタシーとは、言うなればそのような状態を指している〟

のであり、冒頭に掲げたスタン・ブラッケージの言葉へとこの文章全体がフィード・バックする。

音楽の彼岸などと考えたくもないが、イーノ周辺の他、音楽の様々な束縛から解放されたフリー・ミュージックや、既成の表現手段を借りつつも自らは世界の規範から自由な音楽によって高みへ登りつめようとするアーティスト達。私はソフト・マシーンとヘンリー・カウ、言うまでもなくプラネット・ゴングが今でも大好きだ。

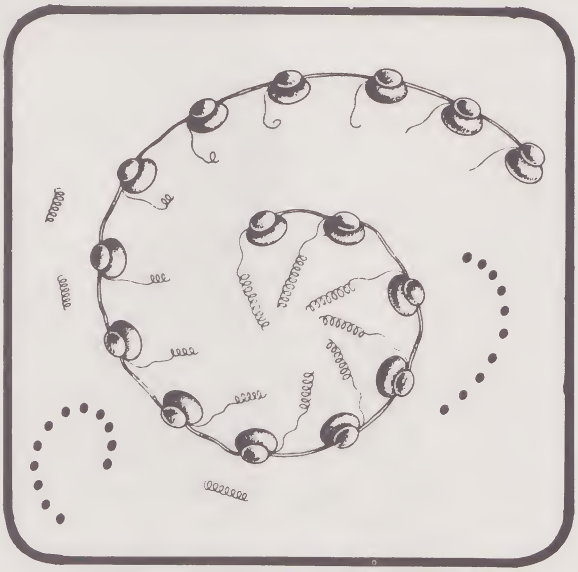
一般化する事は白痴となることに等しい。特殊化する事が顕著な価値である。

——ウィリアム・ブレイク

結論めいたものを先に言ってしまえば、特殊化の果てに辿り着いたのが、現在のニュー・ウェーブと称されているものの筈だ。次の機会があれば、ここから私の話は始まる筈である。

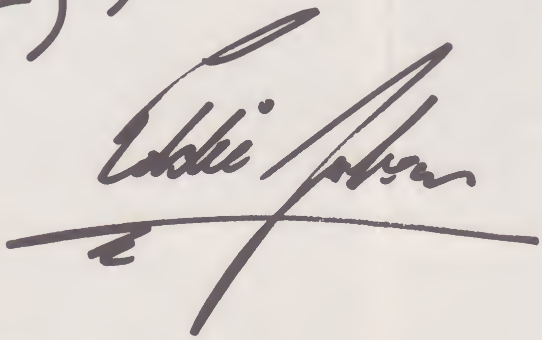
全く、こんな七面倒臭い評論家然とした長い文章を書いたのは、本当にひさしぶりの忘れかけていた体験であった。〆切の3日前に博多の友人から現在進行形の音楽、つまり最新のアルバムを数枚聴かせてもらったのが運の尽き。いつのまにか原稿全てに筆を入れ直す羽目になってしまっていた。実は、〈ダークサイド・オブ・ザ・ロック〉についてオカルティズムを人類の開かれるべき可能性に結びつけて書いてしまっていたのである。当然、現在の状況は批判されるのであるから、パンク・ニュー・ウェーブでも同罪!とやって恥をかく所であった。それをパトリック・フィッツジェラルドという少年の顔をした男のアルバムを聴いた為にこうして前向きの姿勢になれたのだからすごいもんだ。いつのまにか私って静止していたのだわ。それにしても、単純明快な事実だけを簡潔な文体でスカッと書いてみるのもよかったな。けれどそれは日頃の私の生活だから丁度いいのだ。

とにかくレコードを聴かせてくれた平山とこんな機会を与えてくれた北村氏とフールズメイトに感謝。



セミ・クラシカルな音楽をイギリスのグループとして演るのが僕にとってベストだ。—E・ジョブソン

本誌独占
UK
来日インタビュー



プログレッシヴ・ロック・ファン待望のＵＫが来日した。この日本公演をライヴ・レコードとして年内に発表するという彼等は、正統的ブリティッシュ・ロックを久々に僕等の前に披露してくれた。とりわけ若き天才エディ・ジョブソンのはつらつとしたバイオリン・プレイと、それとは対照的なジョン・ウェットンのおちついたステージは印象的だった。あれだけの音楽性と演奏技術を兼ね備えたグループが来日したのは、本当に久しぶりのことなのではないだろうか。そこで本誌では、メンバーのエディ・ジョブソンとジョン・ウェットンに来日インタビューを行ない、現在彼等が考えている事や今後のグループの方向性などを聞いてみた。(三)

Interview by Nick Bonie

Eddie：僕は幾度となく来日の機会からはぐれてて、やっと日本にきたよ。でも君は僕がザッパの時にテリーと一緒にやってるのを見た人間だから、この組合わせで来日と言ってもあまり新鮮味を覚えないんじゃない？

F：——そんな事ないさ。この３年間の間に君とテリーが何の進歩もない人間で、たがいに利己主義であれば別だけど、U.Kは僕が心待ちにしていたバンドの１つだったんだよ。でも、変な意味じゃなくて、本質的に、ザッパ時代のテリーのドラムと君のキーボードの組み合わせ自体はあまり変わらないみたいだけどもね。

E：君がそう感じた気持ちわかるよ。僕達２人共、長い間〝必然的〟なやり方でプレイしていたし、お互いのかみ合わせ方も知っている。

ザッパの時には僕は本当の自分のスタイルで演奏はしていなかった。今 U.Kでは、より自分のスタイルでプレイしている。だから僕にしてみれば、かなり自然な流れでドラムとかみ合わさっていると思うけど、リスナーには違いはそんなにない様に見えるんだろうね。でも、アプローチの仕方はザッパの時と全然違うんだよ。ザッパ時代ではね、僕は研修生みたいなものだった（笑）。ロスでアメリカン・ミュージシャン達とプレイして、アメリカン・ミュージックの性質やジャズのアプローチを学んだ。アメリカ的なジャズ風プレイを盛んにやったよ。そういう音楽の捉え方ではね、ザッパの連中は皆グレイトだった。彼等は自分達のポイントをよく捉えていて、何が強みで何が弱味であるかしっかり心得ていたんだ。そんな中で僕が考えていた事は、常にイギリスだった。キーボード・プレイヤーとしてセミ・クラシカルな音楽をイギリスのグループとして演るのが僕にとってベストだって気が付いたんだよ。それで僕はイギリスに戻って、先づブリティッシュ・スタイルの曲を書く事に専念した。

F：──君の表現したい事が、U.Kといううってつけの被写体の中に強く映しだされているよ。でも、ファーストで打ち出した音の方向性ってのはセカンド『デンジャー・マネー』とは微妙に違ってるじゃない。いや、かなりかも知れない。君の言葉の通りを受けるとファーストの『憂国の四士』の方がイメージ的だったんじゃないの？

E：それは違うよ。僕は納得のいかない事はしないよ。セミ・クラシカルという言い方のせいかな？とにかく僕はセカンドの方がより焦点が定まっていると思うよ。ファーストで僕たちはいっぺんに色々な事をやりすぎたんだ。ありとあらゆる試みを一挙に表現してしまった為に、聴く人には何が何だか解らない面が強かったと思う。セカンドはね、そういったものの余計なものを全て剝ぎ、シンプルではっきり僕達のやってる事がわかる様な音作りだ。

F：──でもね、シンプルなのはいいけれど、ギターがなくて物足りなくないかい？特に君のバイオリン・ソロなんて後ろでギターがコードでも刻んでくれなきゃやりづらいだろうよ。ギタリストを参加させるアイデアってないのかい？

E：うん、バイオリン・ソロの時はね。だけど特別に欲しいとは思ってない。メンバー・チェンジをした時にアチコチ探したけどいいギタリストが一人も見つからなかったんだ。U.Kにピッタリくるギタリストは今のイギリスには居ないよ。

F：──随分きっぱり言うねえ。一体どういう人間がいいの？探してた時の条件的なものは何を基準としてたんだい？

E：色々な条件が含められてたから見つけられなかったんだよ（笑）。U.Kの新ギタリストとして僕達が望んでいたのは、ただ単にいいプレイをするって事だけじゃダメなんだ。多くの要素を備えていて、かつ僕等と同じ方向性でね、ロックからジャズに入った奴じゃなくて、ジャズからロックに入った奴がいい。そしてルックスも良くてビジネス・ヘッドをもった人ね。

F：──そんなの世界中に5人といるかよ!!滅茶々々にシビアな条件だな…。時に、君もルックス的な事に関して必要だと思ってるの？

E：違うよ、意味が。僕がルックスと言ったのは、50,000人のオーディエンスの前でもアピール出来る位の貫禄をもってる人という意味だったんだ。その中にテクだって含まれるんだよ。大勢の聴衆の前でどうやって演奏したらいいかを知っている奴のことさ。

F：──アラン・ホールズワースはどうだった？

E：彼はいいギタリストだ。いいプレイをしてくれたよ。でも彼はいつも後方にいてね、アピール性は全くなかったね。ピン・スポットが上からパッと彼を照らすと、そっと後ろにさがってライトの影でギター・ソロを弾くっていう人間だからね（笑）。

──アランの後釜のギタリストを探すのをやめたって言うけど、ある程度発展すれば絶対に行き詰まりを感じると思うけどな。

E：今は満足してるからいいんだ。ちゃんと3人でオーディエンスを満足させる責任も果たしていると思うし…。先、ギタリストを入れる可能性もあるかもしれないけど今は3人でつづける。少し演っていれば、何が必要かこれからどうしたらいいかという事が解ってくるだろうし、全ては試みの中で進展していくんだ。

F：──なる程ね。じゃあ話を戻して悪いんだけど、デビュー・アルバムについて。実際にアランとビルはJAZZ的な要素が強くて方向性があわずにやめた訳だよね？

E：うん。

Photo (Stage) Max Takahashi
(Off) Hiki Kohichiro

F：――アランとビルはインプロビゼーションを基本としたフリー・スタイルだし、逆にジョンはストレートでシンプルだよね。君と言えばその中間に位置してた訳だけど、そのバラバラの四者の意志をどのように統一させてた訳？デビュー・アルバムの中ではどういう風に展開してったの？

E：ヘイ、君の言ってる事はその通りだ。アランやビルとジョンのスタイルは全く異なっていて、僕がその中間に居たから統一されていたのだと思う。例えばジョンが作った曲をアランやビル風にやり直すのは手間がかかったりね。その点僕の曲は誰にでもフィットしたんだ。僕はムードを大切にする為に中間になる事に務めてきたし、僕がメイン・ライターだったから順調にいっていたんだ。ところが、皆あまりにもスタイルが違いすぎていて、1年後には皆中間で進んでいくという事が妥協の様に思えてきたんだろうね、それで別れたんだ。ファースト・アルバムの時には皆、うまくやってたんだよ。僕がオファーした音楽に皆同意してくれたからね。

F：――じゃあ『デンジャー・マネー』になってシンプルになったというのは音楽がもっと簡単になったって事かい？それとも統一され易くなったって事かい？

E：んんんんん、ううん、そ・そう言えるかな。うん。色んな意味でね…シンプルなんだ。

F：――セカンドではコマーシャルな部分も窺えるね。

E：うん。ファーストは音楽的に高度だったけどコマーシャルな面にかけていたから…。

F：――レベルの高い音楽でかつコマーシャルな曲を書くって事が今の君の悩みなんじゃないのかい？

E：いつだって、いい曲を書きたいと悩んでるだけだよ。具体的な意図はもたないよ、レベルが高いだとか、コマーシャルだとか…。でもつけ加えておくと、いい曲ってのはそういうものを含むけれどもね。

F：――もっともだ!!今回の君達のライヴが今度アルバムになる訳だけど、もっともっと素晴らしいものを我々に生の迫力で提示してくれる事を切望するよ。

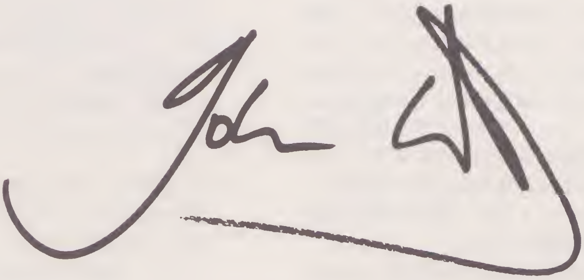
E：まかせといてくれ。日本の聴衆は皆グレイトだ。僕たちは素晴らしいライヴを生む事が出来るだろう!!

＊　＊　＊

確かに聴衆は彼等のプレイに酔っていた。でもその中に居た女の子達の何人かは双眼鏡でエディーをおっかけまわしてたなんて哀いそうで言えなかった。

ミュージシャンとしての自分の生き方に成功すれば有名になれなくてもいいんだ。

―J・ウェットン



周囲のざわめきをうるさそうに目で制止しながら、一昨年Roxyで来日した時よりもはるかに堂々と、はるかにスマートになってやってきた。

F：――Hi。元気？U.K イン・ジャパンの調子はどんなものかな？初日の日、ライティングにかなりうるさく注文ををつけていたようだけど満足はいったのかい？

John：まあね。君はコンサートに行ったんだろう？どんな風に思ったんだい？

F：――いやー、これは凝ってるなあと感心してたんだけど。仲々効果的なライティングだったよ。やっぱり君等のサウンドってさあ、聴覚のイメージを視覚によって具体化する事が大切なんだろう？ショーでのライティングが一番気を遣うでしょ？

J：それはどのバンドにも言える事だし、僕達のバンドだけ特にって事はないよ。

F：――でもイエスとかジェネシスとか、君達の様なサウンドをもったいわゆるプログレッシブ・バンドって幻想的なショー作りを必死になってするじゃない。イエスなんてステージングの費用でツアーやる度に赤字なんてオマケつきでさあ。

J：ねえ、僕達プログレッシブ・バンドじゃないよ。

F：――ん？

J：僕達のスタイルはもう決まってるんだからプログレッシヴじゃないよ、ちっとも。プログレッシヴ・バンドってのはいつもいつも変化して向上していく事だろう？僕達のサウンドは変わらないよ。

F：――え？え？(汗)あ、あのねえ、僕がプログレッシヴ・バンドって言ったのはね、つまり日本語英語で我々が使ってる表現の一つで、例えばシンセサイザー使ったり、例えばタンジェリン・ドリーム、ピンク・フロイド、例えば、えーと、えーと、

J：ああなる程ね。そうね、そういう使い方をすれば僕達もプログレッシヴ・バンドになるな。

F：――それで君はね、U.Kを結成しようと決めた時、最初どんな風にやっていこうと思ったの？ What did you wanted to be ？

J：ミュージシャン。I wanted to be a musician。

F：――（あんまりオチョクルのでか

なり熱くなってきた)あ、あのねー

J：ハハハ、ゴメンゴメン。U.Kに僕が求めたものはね、'60年代のオールドな感覚と、'80年代に続く新しいものの丁度中間をついていこうと思ってたんだ。ニュー・ウェイヴ・バンドよりはソフィスティケイトされたもの。だけど、根本にはしっかりとしたフィーリングのある、ストリート・ピープルにもアピール出来るような音楽だよ。

F：——ニュー・ウェイヴの出現も同じ設定のもとに生まれてきたとも言えるね。君は現在の音楽状況についてどう思う？世界の音楽活動や雰囲気なんかね…。

J：その国によって多少の違いはあるけれど、アメリカとイギリスでは全く違うね。現在のイギリスの音楽状況というのか状態はとても混乱している。'60年代の、いわゆるオールド・ロックン・ロールやポップ・ミュージックも盛んだし、一方のニュー・ウェイヴ、パンクもがんばってるし、その中間の、例えば僕達の様な音楽も多く根づいているし…とにかく色んなものが入り乱れて、いたずらに混乱しているよ。人々は、何を選んだらいいのか、何を聴くべきか、どっちの方向に向くべきか全く困惑させられていると思う。

F：——一理あるね。でも困惑するっていうより、若い子達ってすぐに新しいものに飛びつきたくなる傾向にあると思うよ。もちろんイギリスに限った事ではないけれど。ほら、パンクが流行はじめると、みんな髪を短くしてさ、やれ安全ピンだ、やれ皮ジャンだと、完全にファッション化してしまったりして。

J：その通りだ。でもそれは、みんなが何かをやらなくてはという気持ちと、何か新しいものに対するハングリーな面を持ち合わせているからだと思う。僕達はそういう意味では成功できると思う。

F：——違う意味では成功できないっていうの？

J：ハハそうだよ。どういう面で成功できるってのは、若いインテリジェントな人達の為に満足いくプレイができるって事でだ。又、成功できないというのは、もっと俗っぽい感覚でポピュラーになれないって事。だって、世の中には、そんなにインテリジェントな人々がたくさんいるとは思わないからね。ハハ

F：——人の顔見ないでよ。じゃあ君は俗的な成功は収められないと最初から思ってんの？

J：僕達の音楽では難しいね。かと言って、僕達は自分達の音を変えていくつもりはないよ。ミュージシャンとしての自分の生き方に成功すれば有名になんかなれなくっていいんだよ。

F：——……これはこれは完全に言いきれるんだね。スゴイや。じゃあ原点に戻った質問を1つ。君がキング・クリムゾン解散後、色々なバンドとセッションをしてね、最終的にU.Kを作った理由とそのいきさつなどを…。

J：Well、エディやビル（ブラフォード）とは昔からの友人でね、僕とビルはキング・クリムゾン、エディがロキシー・ミュージックで同じレコード会社、同じマネージメント、EGマネージメントだったから。僕がブライアン・フェリーのアルバムに参加したり、エディがクリムゾンのアルバムに参加したりしてたんだよ。オフィスの中は皆とってもフレンドリーにやってたんだ。エディと親しくなったのは'74年に僕がロキシー・ミュージックと一緒にプレイした時でそれまでは単なる顔見知り程度。'74年7月にクリムゾンが解散してから僕は色々な所でプレイしてきた。ユーライア・ヒープとかブライアン・フェリーとかね。でもそれは単なるセッションで、僕は常に自分のグループの事を頭に浮かべていたんだ。新しいグループで、本当のブリティッシュ、ヨーロピアン・スタイルのロック・ミュージックをやっているバンドは少ない、だけど、ファン達はそういうバンドをこそ望んでいる。そんな彼等の思もちとは裏腹に、そういうバンドって少ないじゃない、僕達がここでひとつ奮気をしたのもそういう訳さ。

F：——使命感!!輝くスーパー・スター（小声）。

J：'76年に僕とビルとリック・ウェイクマンでバンドの設定を立てたんだけど、リハーサルの段階で上手くいかなくて、一時、間をはずしてメンバーを新めて物色する事にしたんだよ。最初に僕が選んだのがエディで、僕は一番一緒にやっていきたい人間だと思ったからね。ビルはビルで、アラン・ホールズワースとやりたいと願って、最終

的にこの4人によってU.Kはスタートしたんだ。いや、本当のスタートをきったのはアラン加入前の3人だったのかもしれないな。エディもやはり誰かもうひとりの人間を望んでて、特に彼のバイオリン・ソロの時なんかにベースのパートを弾いてくれる人間をね…それでビルの勧めもあってアランのプレイを聴いた。そして驚いた。信じられない位ファンタスティックだったんだ。彼は世界一のギタリストだと思ったよ。でもね、問題はだ、彼がU.K向きでないって事だった。彼の求めていたものは、バンドの方向性からそれ、多分にジャズに傾倒していたから。ビルもそうだった。ビルと僕は、キング・クリムゾンからどの位変わってきたのかという点を忘れていた。ビルとアランはジャズに影響され、僕はロック、そしてエディは中間だった。そのバランスの乱れが結果的にアランとビルの脱退を招いたんだ。

F：――テリーに決めたのはどんな感じで？ドラマーのオーディションはなかったんだよね。

J：オーディションはしなかった。エディがテリーをやたらに気に入ってて、アメリカに彼を聴きに行ったんだ。その時テリーがブレッカー・ブラザーズとやってるのを聴いて納得したよ、彼はVery Goodだった。僕達はイギリスに戻って即、始めたんだ――新しいU.Kの音作りを。

F：――そうだね、彼は本当にいいドラマーだよ。音もたぶんにロック気質だし、僕も『憂国の四士』よりは『デンジャー・マネー』の方がハードだけど音がまとまっていて気に入ってるよ。

J：僕達3人のバランスはすごく上手く出来てるんだ。ギタリストを入れても入れなくてもこのバランスは保たれて、より強化されるに違いない。でも僕はこの3人で満足してるからギタリストの事はあまり気にしなくて、

F：――ねえ、もし君がU.Kをやってなくて、他の奴等がU.Kを作ったとしたらどう見る？客観的にさ。

J：もし僕がU.Kをやっていなかったら…もしいなかったら…。うーん、うーん。そんなの想像出来ないよ!!僕はU.Kの僕なんだから!

ブリティッシュ・ロック・シーンにおいて、常にプログレッシヴであり続けたバンド、キング・クリムゾン。かつてその王国を通り抜けてきた人達が、その頃の経験を生かし現在のロック界で様々なすばらしい活躍をしている。そんな中で今回は、正統派ブリティッシュ・ロックの雄として活躍中のU.K.にスポットを当ててみたいと思う。

74年9月26日、キング・クリムゾンは5年8ヶ月余りの偉大なその歴史を閉じ、バンド解散後、ロック界屈指のリズムセクションすなわちジョン・ウェットンとビル・ブラッフォードは、将来の再会を誓い合い、それぞれロキシー・ミュージック、ゴングへ。その後、ウェットンはユーライア・ヒープ、その他のセッション・ワーク、ブラッフォードはロイ・ハーパー・バンド、パブロフス・ドッグ、アブソリュート・エルスウェア、ジェネシス、ナショナル・ヘルス等を渡り歩く。

76年、遂に自分達のバンドを結成すべく2人はリック・ウェイクマンとセッションを行なう。しかしウェイクマンはまだA＆Mとの契約が切れておらず、またA＆Mがレコードを出すなら「リック・ウェイクマンと○○」という名前を使うことを要求したためこの話は流れてしまう。

再度別れ別れになった2人は、その後ウェットンはブライアン・フェリー・バンドの一員として77年6月に来日、ブラッフォードは11月にソロ・アルバム〝Feels Good To Me〞を発表している。

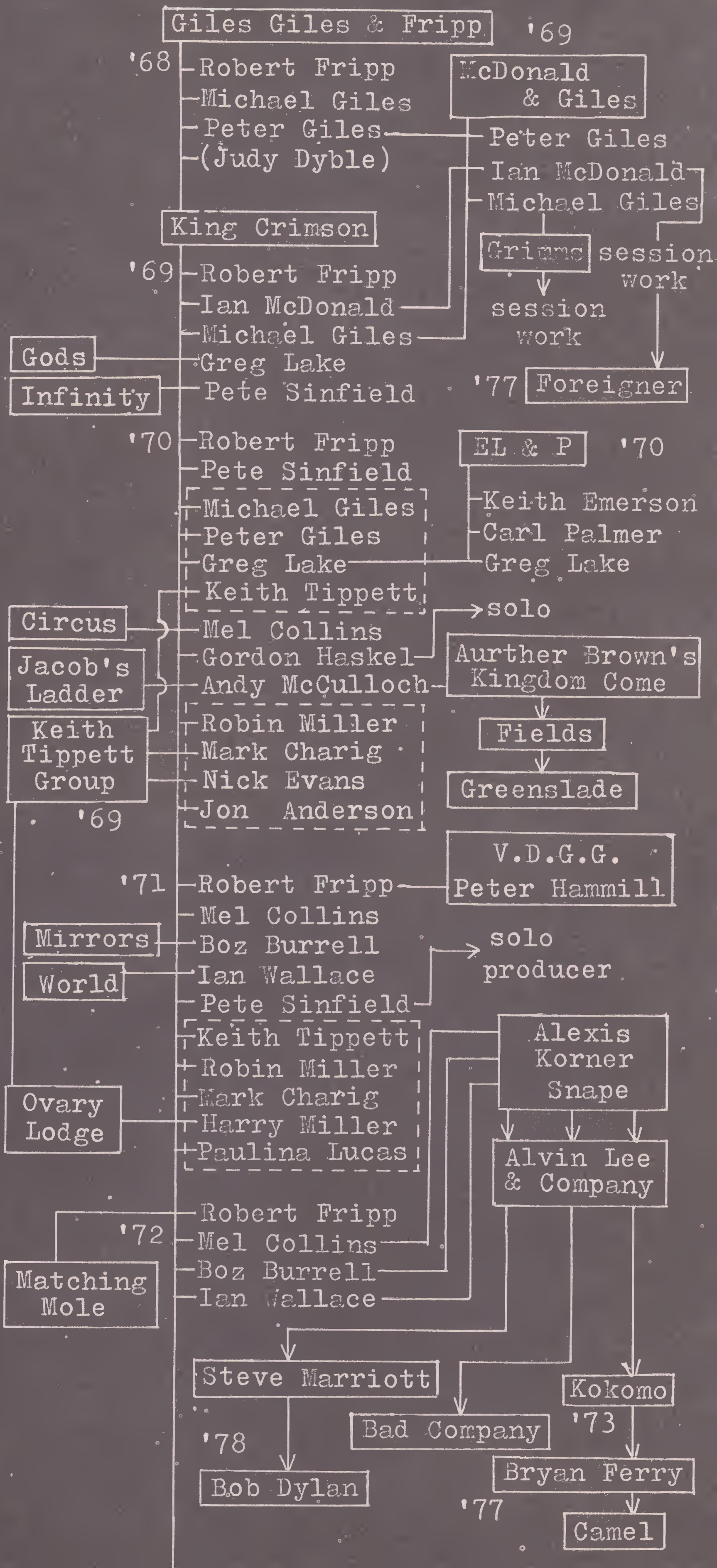
一方わずか16才でプロのミュージシャンとなり、17才で一流バンド、カーブド・エアに参加、18才で早くもロキシー・ミュージックのメンバーとなり、実力とともに人気も得た天才少年エディー・ジョブソンは、21才の時アメリカに渡ってフランク・ザッパのバック・ミュージシャンとして活動していた。そこへ白羽の矢がたった。

ブラッフォードはギタリストとしてアラン・ホールズワースを推薦。彼は69年イギンボトムでデビューし、テンペスト、ニュークリアス、ソフト・マシーン、ゴング、トニー・ウィリアムス・ライフタイム等を点々としていた。

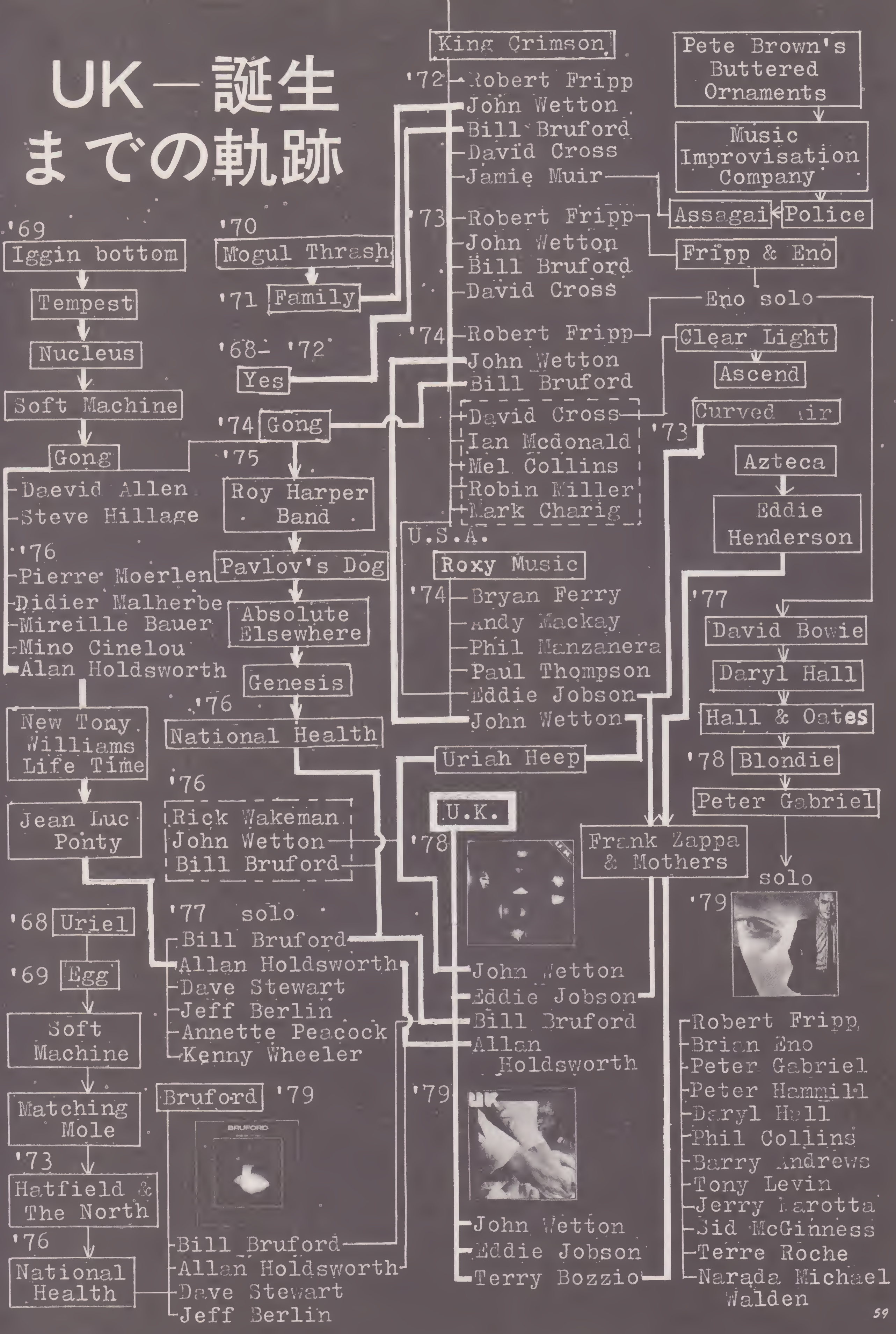
ここにバンドの原形が誕生し、ブラッフォードが〝U.K.〞と名づける。そして78年春デビュー・アルバム「憂国の四士」を発表。高度な演奏による伝統的ブリティッシュ・サウンドを展開し評判になるが、音楽の方向性の違いからブラッフォードとホールズワースが脱退しジャズ・ロックへ向い〝Bruford〞を結成する。

残ったウェットンとジョブソンは、アフロ・ロックのアズテカからマザースに加入したドラマー、テリー・ボズィオを誘い、セカンド「デンジャー・マネー」を発表。よりヘヴィーになりバンドも一体化する。79年5月には日本公演も行ない、何とそれはライブ・アルバムになるとか。

作成　渡辺　勝美
　　　清水　嘉久



UK—誕生までの軌跡



UK—誕生までの軌跡
'69
Iggin bottom
Tempest
Nucleus
Soft Machine
Gong
Daevid Allen
Steve Hillage
'76
Pierre Moerlen
Didier Malherbe
Mireille Bauer
Mino Cinelou
Alan Holdsworth
New Tony Williams Life Time
Jean Luc Ponty
'68 Uriel
'69 Egg
Soft Machine
Matching Mole
'73
Hatfield & The North
'76
National Health
'70
Mogul Thrash
'71 Family
'68- '72
Yes
'74 Gong
'75
Roy Harper Band
Pavlov's Dog
Absolute Elsewhere
Genesis
'76
National Health
'76
Rick Wakeman
John Wetton
Bill Bruford
'77 solo
Bill Bruford
Allan Holdsworth
Dave Stewart
Jeff Berlin
Annette Peacock
Kenny Wheeler
Bruford '79
BRUFORD
Bill Bruford
Allan Holdsworth
Dave Stewart
Jeff Berlin
King Crimson
'72
Robert Fripp
John Wetton
Bill Bruford
David Cross
Jamie Muir
'73
Robert Fripp
John Wetton
Bill Bruford
David Cross
'74
Robert Fripp
John Wetton
Bill Bruford
David Cross
Ian Mcdonald
Mel Collins
Robin Miller
Mark Charig
U.S.A.
Roxy Music
'74
Bryan Ferry
Andy Mackay
Phil Manzanera
Paul Thompson
Eddie Jobson
John Wetton
Uriah Heep
U.K.
'78
John Wetton
Eddie Jobson
Bill Bruford
Allan Holdsworth
'79
UK
John Wetton
Eddie Jobson
Terry Bozzio
Pete Brown's Buttered Ornaments
Music Improvisation Company
Assagai
Police
Fripp & Eno
Eno solo
Clear Light
Ascend
Curved Air
'73
Azteca
Eddie Henderson
'77
David Bowie
Daryl Hall
Hall & Oates
'78 Blondie
Peter Gabriel
Frank Zappa & Mothers
solo
'79
Robert Fripp
Brian Eno
Peter Gabriel
Peter Hammill
Daryl Hall
Phil Collins
Barry Andrews
Tony Levin
Jerry Marotta
Sid McGinness
Terre Roche
Narada Michael Walden

ニュー・ウェイヴとプログレッシヴ・ロックの深淵を探る　第2回

暗黒のアマルガムから安息の地へと向かうエレクトロニクス遊星

ASH RA TEMPEL

さて、〝ニュー・ウェイヴとプログレッシヴ・ロックの深淵を探る〟第二回。今回は、〝輝くような瞳をもったギタリスト〟として、本誌でも度々紹介されてきた、マニュエル・グートシュンク率いるアシュ・ラ・テンプル——。

ニュー・ウェイヴの多くのバンドのエナジーの出所が、過去のロックとは異質な所からきている、というのは前回も述べた。それはつまり逆説的な言い方をすれば、僕らが今までシンボリックな統一見解としてきた〝ROCK〟、そしてこれからも追っていかねばならぬ〝ROCK〟というものの生みの親は、決して「ローリング・ストーンズ」でも、ましてや「ツェッペリン」でもなかった、ということだ。前回登場したカンやアモンデュールといった70年代初頭のドイツ・ロックのアナーキスト達によって、現在のニュー・ウェイヴ・ムーヴメントの土壌は、培われてきた。そんなドイツ・ロックの中にあって、確固たる位置を占めてきた巨星——。それがAsh（肉体、無常、そして境界）＋Ra（認識、判断、しかしまだ実現を伴わない）＋Tempel(この世に存在する緊密さのシンボル）＝Ash Ra Tempelだ。

君はもう彼らの最新作（日本における3作目）「水平音響への誘導」を聴いただろうか？マニュエル・グートシュンクの才人としての資質の泉は涸れることを知らず、そのギター・ワークはしなやかな感性とみずみずしさに溢れている。

マニュエル・グートシュンク——1952年9月9日、ベルリン生まれ。10歳の時からクラシック・ギターを学び、基礎となる様々の音楽体系にむかって試行錯誤していたグートシュンクが、ヘルムート・アンケ（ベース）、フォルカー・ツィーベル（ハーモニカ）、ウォルフガング・ミューラー（パーカッション）等とアシュ・ラ・テンプルの前身ともいうべき《Steeple Chase Bluesband》を結成したのは1969年10月。その後、前衛音楽の作曲家トーマス・ケセラーのスタジオで、グートシュンクとアンケは、タンジェリン・ドリームの打楽器奏者クラウス・シュルツと出会い、1970年9月にアシュ・ラ・テンプルが結成される。そして71年春に、このトリオは、デビュー・アルバム「Ash Ra Tempel」を発表する。グートシュンクは、アシュ・ラ・テンプル結成（彼はこの時、まだ18歳の少年であった）当時の心境を次の様に語っている。

「夢想、ドラッグ、悪夢、アルコール、世紀末思想、無限なる精巣、それら全てに興奮を覚え、幻想を破壊し、飢え、ヒステリックになり、ありのままをさらけだす。それを通じて思考する最良の時期に〝アシュ・ラ・テンプル〟は生まれ、人間の生命像をまずは美しくナイーヴに描き始め、躍動感を帯び、徐々に攻撃的、ヒステリックになり、ついには恐怖感を伴った宇宙の内的静寂を聴衆に与えた」と。

また、このアルバムにおけるクラウス・シュルツは、現在のシンセサイザー奏者としての彼の姿からは、想像も出来ないような攻撃的なドラムを聴かせているが、彼はタンジェリン結成以前はジャズ志向のドラマーであった。このシュルツをはじめとし

て、ヨーロッパにおいては、グル・グルのマニ・ニーマイヤーやカンのヤーキ・リーベツァイトのように、それまでフリー・ジャズ界でその地位を確定的なものにしながらも、敢えてそこから転変したミュージシャンが少なくない。その後シュルツは、最終的にはグートシュンクがリーダー・シップを握るアシュ・ラ・テンプルから離れ、ソロ・プロジェクトの実行に移る。（なお、アシュ・ラ・テンプルは、サウンズ誌の71年度新人グループ部門の人気投票において、ウォルフガング・ダウナー等を押さえて堂々第2位にランクされた。）

72年2月、グートシュンク、アンケ、ウォルフガング・ミューラーの3人は、2ndアルバム「Schwjngungen」の制作を開始する。このアルバムでは、「我々の音楽は、自己認識、生命の結合、意識改革の助けとなる触媒にならねばならない」と語るグートシュンクの表現目標が「一人の人間として、兄弟に会いたいとも思わず、透明な日々の中で音に没頭し、その《Schwingungen》(振動）の中に漂う」という比喩を通して描かれている。

72年4月、グループからミューラーが脱けた直後、アシュ・ラ・テンプルは、唯一のライヴ・アルバム「Seven Up」を、ＬＳＤの人体実験で知られるティモシー・リアリー博士を招き、スイスのベルンで録音した。そして同じ年の12月、グートシュンク、アンケの2人は、ベルリンのコズミックな女性、ローズマリー（ロジ）・ミューラーとゲストにクラウス・シュルツを迎え、「Join Inn」の制作に入る。グートシュンクとまさに理想のカップルといえるロジは、1949年8月2日、ベルリン生まれ。「Join Inn」以降アシュ・ラ・テンプルは、エンケが分離し、グートシュンクとロジのデュオという形態をとっていく。グートシュンクとロジは、グートシュンクが「ニュー・エイジ・オブ・アース」の内ジャケに〝Thank you Rosi—Source of My Power(自己のエナジーの源泉)〟とクレジットしたように、男と女として、又芸術家同士としても、羨ましいほどの信頼の絆で結ばれているようだ。「Join Inn」や「Starring Ros i」のジャケットで見ることのできるロジは、澄んだ瞳をしたとても魅力的な女性で、「Starring Rosi」においてグートシュンクは、彼女の詩の語りや息を吹きながら歌うヴォーカルを全面にフューチャーして、今まで見られなかったような牧歌的色彩の濃いアルバムにし上げている。

その後のアシュ・ラ・テンプルは、つまりはマニュエル・グートシュンクという才人そのものとなり、「Inventions For Electric Guitar」、「ニュー・エイジ・オブ・アース」、「ブラックアウツ」の3枚のアルバムでは、グートシュンクがほぼ一人でギター、シンセサイザーを操っている。なお、グートシュンクは、74夏〝Ohr-Musik〟を自ら設立している。

彼らの最新作「水平音響への誘導」は、ヴァージン移籍（76年）後、〝Ashra〟となってからの3作目に当たる。グートシュンクは、このアルバムで再びドラマーを起用し、彼自身も、前2作とは打って変わった躍動感に溢れたギターをふんだんに聴かせてくれる。かつて「This record should be heard comfortably!」とアルバムに記したグートシュンクのしなやかな感性が託されたギターは、解き放された猛禽の如く冴えに冴えている。このアシュラの最新作は、ただ闇雲にエレクトロニクス化することだけが能じゃないということを、見事に裏打ちしている。

日本盤のオビの叩き文句をそのままに、今こそ翔べ、アシュラ——。

（三津間　功）

ANALYZIN' OF ASHRA

by Y.M

Ash Ra Tempel
Ohr OMM556013

1971年当時、多くの若者が既製の社会制度に対する反感から可視のものに不信を抱き、麻薬や幻覚剤による生理的衝動とヨガや禅などの東洋的思想に促されつつ不可視のユートピアへ惑溺していった状況。その中でアンダーグラウンドの意識的なミュージシャンが自ら育んできた毒素の効能を試すべくうち出したデビュー・アルバムの中で、アシュ・ラ・テンプルの１ｓｔは、ひときわ狂気の威光に輝いていた。

メンバーは、ギターのマニュエル・グートシュンク、ベースのハルトムット・エンケ、ドラムスのクラウス・シュルツで、全員がエレクトロニクスも担当した。プロデュースは、おそらく現代音楽系の人だろう。そしてエンジニアは、コニープランクで彼はクラフトワーク、ノイ等のエンジニアとして有名である。

彼らの音楽のコンセプトは、真中で2回開くようになっているこのアルバムのジャケットに反映されている。

表には古代エジプトの専制君主ツタンカーメンが描かれ、それを開くと王の遺体の安置されたピラミッドがあたかも森羅万象の交感の場であるかのように屹立している。

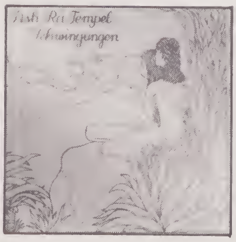
このピラミッドを開くと中に描かれているのは、月と星と十字架と仏に囲まれた裸体の人間。その絵の両側に付されたメッセーシには、「我々の時代の最上の精神が夢と麻薬と酒によって破壊されるのを見た。」とある。つまり顔のない人間は精神の破壊された我々自身であり、その意志のない物体が本源的存在者である神によって創造された宇宙の中に浮遊するように存在している状態を、彼らは表現しようとしたのだろう。

Side Aでは、宗教的なイリュージョンがグートシュンクの幻想的に処理されたギターによって醸し出されるが、ギターは急激に破壊的な凶器に変貌し、古代専制君主の残虐性を目のあたりに見るかのような叫喚地獄を繰り広げて終結する。まさに狂気だ。

Side Bでは、ギターのプラグの接触不良によって起こるノイズが、静かなエレクトロニクスの中を時を刻むかのようにうち続けられ、古代と現代の時間と空間の隔たりを結びつけていく。

いささか誇大妄想的なこのアルバムは、ジャーマン・ロックのアルバムの中でもベストと言える一枚。

当時の彼らの姿は、クラウス・シュルツの「X」の写真集に見られる。グートシュンクは、19才の少年だったという。



Schwingungen

Ohr OMM556020

1stアルバム制作後、クラウス・シュルツは音楽的な方向性の違いから、アシュ・ラ・テンプルを脱退し、現代音楽・エレクトロニクスの領域において「イルリヒト」を発表する。

これに対して、グートシュンク、エンケが、あくまで表現の手段をロックの領域に求めて制作した2ndアルバムが「Schwingungen」である。

「Schwingungen」のジャケットに描かれているのは、ＬＳＤを飲んだ2人が断崖のふちにたたずんで、沈む太陽に向ってもの思いにふけっているところであり、これは青年ステファンが旅先で出会った女エステルによって快楽と苦痛の交錯する陶酔の世界にひきこまれ、最後に破滅が訪れるというストーリーをもつ、ピンクフロイドが音楽を担当した映画「モア」の裏ジャケットの写真の書き写しである。

「Schwingungen」は、映画「モア」の架空のサントラ盤として制作されたのかもしれない。

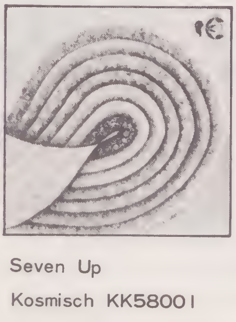
A－1では、自己存在の危機感に怯えるような極度に抑制されたボーカルが印象的だ。

A－2では、「花は必ず枯れるんだ。(快楽も生命もいつかは終わるんだ)」と絶望するようなボーカルが、たたみかけるようなギターのリズムの上を破滅に向って堕ちてゆき、渇き切ったサックスが、それに相乗効果を与えている。

Side Bに繰り広げられる混沌とした世界は、麻薬を求めてあえぎ続ける叫びなのだろうか。

エレクトロニクスをあまり用いず、ロック自体のもつ破壊性に大部分を依存しているサウンドコラージュは、枯渇した砂漠のように荒涼とした世界を創出している。このタイトル曲「動揺」の後半では、再度の注射によって苦痛から解放されるかのように、メディテイショナルなギターが快楽を換起させ、恍惚の極限状態に達したヴォイスが非常にシンプルなドラムスのリズムの上を滑らかに走っていく。

スペーシーな1stアルバムに対して、「Schwingungen」では、麻薬によって幻影と化した動揺する人像の世界が、時間と空間に隔てられた一個体のより深い内宇宙の深淵を探るかのように展開されている。



Seven Up

Kosmisch KK58001

「Seven Up」は72年4月の「Bern Festival」における彼らの唯一のライブアルバムで、ＬＳＤの教祖ティモシー・リアリー博士の指導のもとに制作された。

メンバーは、グートシュンク、エンケの他に元タンシェリンのスティーブ・シュロイダーなど7人であるが、その他に数え切れないほどのドラッグ・カルチャーからのゲストが参加し、麻薬幻想の世界を創出すべく「暗黒のパワー」を提供している。

Side Aでは、リアリーの作詞による4つの破壊的なパンク的ロックンロールが演奏され、その曲と曲の間を究極的なエレクトロニクスと人声のコラージュによってつなぎ、破壊と再生を繰り返すような凄愴な世界を創出している。麻薬夢想者たちのウルトラヴォイスは空間の中に夥しい悪夢を生み出す。

Side Bは「Schwingungen」のB面のライブ版で、うねるような空間は眩暈感や嘔吐感をひきおこす心理的な牢獄のようだ。グートシュンクのギターは、ただひたすら凄いとしか言いようがない。

初期のアシュ・ラ・テンプルのアルバムは、目的としての宗教的指向、方法としてのロック・現代音楽・民族音楽の融合された複合音楽性、そして触媒としての麻薬の生理的作用といった3つの要素を音楽性のみならず、ジャケットという視覚的な伝導体にまで収斂させた凄じいものであったが、「Seven Up」は、その集大成であり、これを最後にテンプルの方向性はよりスペーシーなものへと移行する。

「Seven Up」は、幻のレーベル「Cosmic Music, The Sound Of Cosmic Courierk」の第1弾でもある。

「Join Inn」は、クラウス・シュルツをゲストに迎え、グートシュンク、エンケというオリジナルメンバーに加えて、謎の女性ロジがヴォイスで参加して、72年の12月に制作された。

彼らの4枚目にあたるこのアルバムでは、以前のような重い宗教的な背景が影を潜め、よりフリーでスペーシーなトリップ・ミュージックが演奏されている。

Side Aでは、宇宙空間へ誘うようなシンセサイザーに導かれて、なだれ込むようにハードなインプロヴィゼーションが始まり、上昇と下降を際限なく繰り返す波動が、無限の空間につき進むかのように展開されていく。

全体的な完成度を高めるための宗教的コンセプトは軽視され、ドラムス、ベース、ギターのもつ個別的な役割を極限にまで追求しているが、結果としてその3つのベクトルの合力は、前作を遙かに凌ぐものになった。

シュルツのドラミングは、彼のソロアルバム「Picture Music」におけるほどの緻密な構成力と緊張感はないが、高度のテクニックを誇るフリー・ジャズ的なプレイは、この曲を流動的でスリリングなものにしている。また、グートシュンクのギター・ワークであるが、テクは別問題として、音自体はさほど実験的ではない。しかし柔軟な変化と展開を渉した構成によってギターのもつ枠を遙かに超越した世界を創出しており、アンサンブルの主導権は、完全に彼の手に握られている。

このようにギターとドラムスが、より空間的な方向へと飛躍したことは、朽ちていくしかないような運命を背負ったエンケの暗く重いベースを浮き彫りにしていった。まさにドイツ的なその音は、アシュ・ラ・テンプルのドイツ・ロックたる所以がここにあったということを感じさせる。

Side Bでは、タイトルが「彼方へ」を意味する通り、シュルツの朗々と繰り広げるオルガンのメディテーションが展開される。

「ミスター・ティモシー」とささやくロシもまた、麻薬に魂を奪われた夢想者の一人だ。その官能的なヴォイスに応えるようにエンケのベースは、驚くほどにエモーショナルな旋律を奏でる。この至福のヴィジョンは、彼の手によってもたらされていると言えるだろう。

エンケは、このアルバムを最後に音楽界から姿を消した、極めつけのベーシストだった。

とにかくこのアルバムは、解放的な冷めた感覚でメンバーの力が十二分に発揮されたという意味で、テンプルの代表作といえる内容をもっている。

Join Inn

Ohr OMM556032

ジャーマンロックの極致をいくつかようなアシュ・ラ・テンプルも前作あたりから、観念的な膠着状態から脱却するような方向性が見られたが、73年に発表された「Starring Rosi」では、さらに前作の解放的なイメージが強められ、ファンタスティックとも言えるような世界が創出されている。

メンバーは、ギター、ベース、エレクトロニクス等を担当するグートシュンク、ヴォイスのロジの2人だけ。それに加えて、ゲストとしてドラムスのハラルド・グロスコプフ、ベースで1曲のみディーター・ダークスが参加している。グロスコプフは、ヴァーレンシュタインのメンバーであり、コズミック・レーベルのセッションアルバムのほとんどに参加し、後にはクラウス・シュルツの活動に同行、そしてアシュラの正式メンバーとなる。

グートシュンクの感性そのままといった感じの独善的なプレイを聞いていると、エンケがグループを去っていった所以がわかるような気がする。このアルバムでは、初期の彼らにとって狂気の源泉であったエンケのベースが入り込む隙は失われ、アルバムタイトルが示すとおり、グートシュングのロジへの想いが募るかのような心情的側面が、反復を基盤とするギターの叙情性によって表されている。曲が短く分れて以前のような独特な流れは失われ、聞く方は些か戸惑ってしまうのだが、ロンバールーム風で一見とっつき易そうなジャケットに写ったロジの神秘的で沈んだような瞳を見ていると、アシュ・ラ・テンプルの逆説的な悪夢の世界を垣間見るような気がしてならない。

Starring Rosi

Cosmic KM58007

74年に発表されたアシュ・ラ・テンプルの6作目にあたるこのアルバムは、マニュエル・グートシュングのソロ第一弾であり、シーケンサー、シンセサイザー、その他の楽器を一切用いず、ギターのみによってタンジェリンのような反復リズムによるエレクトリック・ミュージックを展開している。

ドイツには、エドガー・フローゼ（タンジェリン）、アクス・ゲンリッヒ（元グルグル）、アヒム・ライヒエル（ノバリスのプロデューサー）、ギュンター・シケルト（日本のファーイーストのエンジニアを担当した）といった実験的なギタリストたちがいるが、グートシュングはこのアルバムで、その頂点を究めたといえる。

ファウストやノイが、リスナーの感覚を分断するかのような攻撃性をもってダイレクトに夢や惨劇を見せたのに対し、テンプルのメディテーションは、流動的な均衡を保ちながらリスナーの感覚を撃破させることなく、我々の潜在的な内部の世界の虜としていく優しさと悪意に満ちたものだ。

Side Aの「Echo Waves」では、まさに波の音が反響するかのようなギターの躍動的なリズムが、リスナーの感覚をゆるやかに麻痺させ、あらゆる位相の夢と空間の律動の光沢を発せながら、我々を見知らぬ領域へ行きつかせる。

Invetion For Electric Guitar

Cosmic KM58015

そこでグートシュンクのギターは、狂ったように自らを焼き尽くしながら凄絶なページェントを展開し、最後に残された骨髄が軋みをあげて崩壊するかのようにすべてが終わる。
残されたのは灰だけであり、リスナーは喪心状態でその光景を傍観するしかない。
「アシュ・ラ・テンプル」とは「肉体は有限でも精神は不滅である」ということを意味するという。続く「Quasarsphere」では、魂が浮遊するかのような世界がバイオリン奏法によるギターの鎮魂歌によって創造されている。
「6年来のロックンロール、私はギターによるエレクトリック・ミュージックの新しい方法を発見した。」とジャケットに記されているように、高度な構造的コンセプトとアレンジによって制作されたこのアルバムは、グートシュンクが独自の道を切り開いたまさに記念すべきアルバムだ。

New Age of Earth
Virgin V2080

75年頃から起ったジャーマン・ロック・シーンの思想的終焉による所謂商業路線への転化は、多くのジャーマン・ロックのファンを落胆させたが、アシュ・ラ・テンプルが76年に制作した「ニュー・エイジ・オブ・アース」もまた、そんなムーブメントの中で発表されたアルバムの1枚。
前作でギターのもつ可能性を極限にまで究めたグートシュンクであるが、2年間の空白を経て、悪夢の中に美を見出すかのような彼のコンセプトは悉く浄化されてしまい、この彼ら（彼）の7枚目にあたるアルバムでは、タンジェリン的なシーケンサー・ミュージックの手法によって空間を形成している……というとありきたりだが、その優しさに満ちた完璧なサウンドは、あらゆる苦情をのりこえて初めて真の安息が訪れるかのような陶酔の世界へとリスナーを導いていく。アシュラの生み出す波動は、破滅に向っても、また、その逆の方向に向っても、必ずその極限に到達する。これだから凄い。
Side Aの美しさも溜め息が出るばかりだが、圧巻はSide Bをうめつくす大作「Nightdust」だ。
すべてが無為の状態にまで還元されるかのような旋律と心臓の鼓動の如く生理的なリズムのつづれ織り、そこにはグートシュンクの天賦の才能が結実されている。
そして後半におけるギターは、すべての夜明けを告げるかのように端々しい。まさに「New Age Of Earth」だ。
元アジテーション・フリーのミヒャエル・ヘーニッヒの協力のもとに制作されたこのアルバムは、宿敵タンジェリンを追い抜いたどころか、あらゆるエレクトリック・ミュージックの頂点に立つと言えるほどの完成度をもっている。

Blackouts
Virgin V2091

78年に発表された「ブラックアウツ」は、バージン移籍第2弾、通算で8枚目にあたる。
前作では、ややポップスの方へと傾いたとはいえ、知的で繊細なメロディー・ラインの中にあの Ash Ra Temple の惑わされるような魔性を感じたが、このアルバムに針を落としてまずびっくりしたことは、陳腐な表現だがとにかく音が外的な世界に向けて放たれているということだ。シーケンサーによってうたれるリズムは、一種病的なまでに人間の生理に敏感であった以前のそれを思えば、リスナーをつき放すかのように機械的だ。特にジャーマン・ロックを一つの体験として受け止めてきた者にとっては、それは拒絶のように感じられる。しかし自分は思う。音楽とは演奏したいから演奏するのであり、聞きたいから聞くのだと。魔に憑かれた少年マニュエル・グートシュンクは、もうそこにはいない。だから彼は言う。「このレコードは気楽に聞くべきだ。」と。「人間は自分に素直になることはとてもむずかしいことであると思う。だから素直に感動することさえ、今の時代にはむずかしくなってきている。彼の素直なメッセージに対して、リスナーが素直に感動できたとき、はじめて彼の音楽を楽しむことが可能になるだろう。」
そこまで同意した時、目の前の障壁が破れ、新たなるアシュラの波動が、自分に新しい喜びを換起させるのを感じた。これからも…。

Correlations
Virgin V2117

待望のアシュラのニューアルバムが発表された。タイトルは「水平音響への誘導（相互関係）」なんとも魅力的なタイトルだ。ヒプノシスの手がけたジャケットもまた、シュールな中に洗練されたポップな感覚をもっている。メンバーを見るとなんと3人ではないか。それもあのCosmicレーベルで活躍したハラルド・グロスコプフ、そして元Agetation Free（クリス・フランケが在籍したエレクトリック・グループ）のギタリスト、ルッツ・ウルブリッヒ、そして天才マニュエル・グートシュンクだ。これは凄い。期待にふるえながら、レコードに針をおとす。1曲目の「Ice Train」。心地よいシーケンサーのリズムとタイトなドラムス、そして華麗なギターのフレーズとシンセサイザー、その上きらめくようなピアノの響きが渾然一体となっている。これほどのインストゥルメンタルが、微妙にそして完璧に構成されているのだ。そして2曲目、3曲目と聞くにつれ、ベテランの味というかとにかく余裕のあるそのサウンドは、リスナーに心底まで安らぎを与えてくれる。昔からそうだったけどグートシュンクのつくり出すメロディーというのは、本当に信じられないぐらいに独創性に富んでいる。クラフトワークみたいにワンパターンにならず、タンジェリンみたいに血迷った方向へも向かわず、1980年代へと飛び立つアシュラ。

特集

フランス・ロック Part Ⅰ
—HELDON&MAGMA篇—

●MAGMA——帰ってきたコバイア星人たち
●リシャール・ピナス（HELDON）・インタビュー
●図解、MAGMAをめぐるフランス・アンダーグラウンド・ロック
●HELDON、レコード解析

帰ってきたコバイア星人たち MAGMA

Francis Moze　　Klaus Blasquiz　　Janik Top

僕が思い出す限りでは、マグマが最初にイギリスに現われたのは、1973年のレディング・フェスのことだったと思う。この時一緒に、沢山のユーロピアン・バンドが出演した。そのうちあるバンドは、一日中会場を湧かせ、まるでフェイセスやスティタス・クォの様な熱狂をうけたのだが、マグマはこの点、完全に失敗した。集まった聴衆のほとんどは、マグマの演奏を気に入らなかったのである。ロック・プレスもほとんどが無関心か、またあるものはほとんど嘲笑的でさえあった。とにかく、決していいスタートとはいえなかったのだ。

マグマはその年の暮れ、ロンドンに帰って〝Makanik Destruktiw Kommandoh〟—彼らの最初にイギリスでリリースされたアルバムである—を作った。そのうち、突然すべてがかわったのである。メロディ・メーカーのスティーブ・レイクがマーキーで彼らをみて、すっかり気に入ってしまい彼らの記事を書きまくった。突然、1974年はじめの、マグマ最初のブリティシュ・ツアーに、スティーブはマグマのいくところどこにもついて回った。彼の熱狂ぶりは終わる様子もなく、必然的にほかのロック・プレスもマグマに注目するようになったのだ。スティーブ自身の言葉をかりれば、こんな調子だ。〝そりゃ、ニューヨーク・ドールズとかその辺の音はすごく面白いよ、でも、マグマこそ重要だ！〟彼は正しかった！
しかしながら、マグマは今イギリスで、あのレディング・フェス以前の時と同じ位、注目されていない。人々の忘却の、なんとはやいことか。

しかし、うれしいことにマグマはなお活動している。そして、最近２枚のニュー・アルバムが、ロンドンの店頭にあらわれた。〝Inedits〟と〝Udu Wudu〟である。このうち、〝Inedits〟（新案物の意）はまったくマグマ・マニアのためのアルバムだ。これは、1970年から1976年迄の、マグマのライブ・レコーディングをよせ集めたもので、そのサウンドはまるでブートレッグに近い。なお悪いことに、なんとも無残な編集がしてあって、多くの曲は途中からフェード・アウトしてしまうのである。せめて、ダブル・アルバムにするべきだったのに、という印象をのこしながら。それが特にサキソフォンのJett Seffer とピアノのFrancois Cahenをフィーチャーしたトラックだったりすると、じれったさはなおさらだ。この２人をフィーチャーしたライン・アップは、マグマのセカンド・アルバム〝1001 Centigrade〟以降すぐに消滅してしまったのだから、当然イギリスでは見られなかったものだ。Seffer とCahenは、その音楽ポリシーについて、リーダーのクリスチャン・ヴァンダーと仲たがいしてしまい、脱退して彼らのバンドを作った。即ちZoo である。そのファースト・アルバム〝７＝ZL×２〟は1001 Centigrade〟が残したものを、そのままひきついでいる。

目立つことは、ただクリスチャン・ヴァンダーだけが、〝Inedifs〟の６つのトラック全部に参加していることだ。このリーダー

はミュージシャンたちに、彼への絶対の献身を要求し、それがダメだとクビにしてしまうらしい。結果としてマグマは、1969年の結成以来実に40回以上ものメンバー・チェンジをおこなっている。

ヴァンダーの最終的な目標は僕にははっきりわからない。おそらく、彼自身の口から語られることはないだろうけれど。しかしながら、彼は精神的・音楽的に主となる影響を、後期のジョン・コルトレーンからうけたといっている。音楽を通して、より崇高な真実を仮借なく求めてやまなかったあの男だ。この偉大なサキソフォニストに対するクリスチャンの傾倒は、20数年にわたって続いている。彼はコルトレーンへの敬意を、マグマの4th Albumの〝Coltrane Sundia〟と名付けられた曲で表わしているのだ。

全体として、マグマの音楽からは、優しさ、おだやかさという印象はうけないようだ。彼らのサウンドには、ワグナーやバルトーク、シュトック・ハウゼン、最も特筆すべきは、カール・オルフなどの影響が見出され、サウンドに闘争的、攻撃的な面を支えている。この印象は、その尋常ならぬ歌詞によって一層強められる。地球上のどこの言葉でもない、惑星コバイアの言語なのだから！

ヴァンダーは、彼の母国語であるフランス語をあまりしょっ中しゃべらない。コバイア語は、16才の時に彼に明確なヴィジョンとなって現われたそうである。コバイア語は、のどの奥から出てくるような荒削りの言葉で、ポーランド語やロシア語にかなり似たかんじだが、完全にマグマの音楽とマッチしている。

マグマが作られた時、ヴァンダーはコバイア語をベースにして、コバイア神話をつくった。それは、未来の地球人たちのグループが、より退廃していない星を求め、自らの星地球をあとにする、というものだ。彼らの目標は、コバイア星へ向けられ、残された地球と、移住者たちの関係について、かなり錯そうしたストーリーがくり広げられていく。それは、高度にモラリスチックな物語で、ヴァンダーは心に描いた話全体を9枚のアルバムに表現している。

コバイア神話の中で、一番新しいエピソードは1976年に録音されたアルバム〝Udu W 〟から知ることができる。このアルバムでのライン・アップは前のアルバム〟〝Magma Live〟からラジカルに変化した。残念なのは、バイオリニスト Didier Lock wood ーライブで大変すばらしいプレイを披ろうしてくれたーが抜けたことだ。（彼はクリアライトのアルバム〝Les Cortes du singe fou〟に参加している）しかし、すばらしいことに、このアルバムでは、あの伝説的なJanik Topが復帰しているのだ。

すばらしいベース・プレイヤーのJanikは、1973年から75年にかけて、グループの不可欠のメンバーだった。彼の脱退について、適確な説明がなされたことは一度もない。ある音楽誌には、彼の脱退前に、クリスチャン・ヴァンダーが彼に呪いをかけたなどと示唆する奇妙な記事がでていた。マグマは、その性格上、こういった話が誇張されすぎるきらいがあるので、多くは用心してきく必要があろう。

Christian Vander

どんなことがあったにせよ、Janikが以前と同じようなひらめきでもって、〝Udu Wudu〟の半分以上を作曲していることからして、呪い云々という話は杞憂だったようである。疑いの余地なく、北アフリカ人であるこの男の作る曲は、血も凍るようなものだ。それはまるで魔法のように、ボッシュの絵にあるような光景や、ヘビの穴のような幻影を、僕らの目の前に呼びおこす。彼の作曲の特に秀逸な例は、マグマの唯一のシングル〝Mekanik Machine〟だ。これこそ、無比の最高けっ作であり、心臓の弱い人はきかない方がよろしい。一体この男、夜どんな夢を見ているのだと思うと、おそろしくなってしまうのだ。又、このニュー・アルバムはボーカリストKlans Blasquiz作のはじめてのレコーディングをフィーチャーしている。彼はMagmaの初期からのメンバーだ。彼はバスク人で、現在のコンテンポラリー・ミュージック・シーンで、ほとんど比類のない声域を誇っている。彼のコンポーザーとしての才能も、期待されたものだったが、今ここではじめてそれが明らかにされたわけだ。

Benit Widemann

Bernard Paganotti

〝Udu Wudu〟はクリスチャンの思想にあるラジカルな変化がおこったことを示唆している。Magmaの前の6枚のアルバムでは、彼ひとりがその音楽的方向性にタイトな統制を加えていた。でもこのアルバムで彼は責任をわかつことを望んでいるようだ。

しかし重要なのは、彼らの音楽があいかわらずエナジーに満ちていることだ。幸いながら、マグマは間もなくイギリスにツアーを行う。きっとMagmaは僕達にそれを確めさせてくれることだろう。

Richard Pinhas Interview

音楽は私にとって極端に激しい
バイオレンスであって欲しい。

Gauthier Pinhas Auger (Heldon)

EGG

やはり、一回限りの実在はより印象的で架空なものであろう。しかしピナスのこの一回限りの実在は2ヶ月前のスタジオの中のことに象徴されている。このスタジオにはたくさんのミュージシャンが出入りし、ここで彼は4つの短い作品を制作した。すべての雑音とは別の息苦しげな叫びにも似た新しい音楽の滑らかなる変化は、まるで暁の咆哮のスタッカートの効いた胸を絞めつけられるような不安を導きだす。このようにピナスは自分に対して、きびしい要求をする男だ。いくらか病的なものと、狂人の間歇的な覚醒を一緒にする実在を理解しているらしい。エルドンにおける音楽哲学（彼らの作品が正確に語る、人間の機械への政略的セオリー）は、今ではもぎとられ、より前進することを可能にし、決して同じような発表は繰り返さないだろう。

人々は、エルドンが音楽を通して表現したものに好感を持ち始めている。根本的に彼らのすべての活動は、（あっけにとられた）ドイツ人とは異なっている。もし、まさしくピナスが何ごとにも到達できないバイオレンスを主張するのなら、もし、キング・クリムゾンの提示に再演の刻印を現わすことができるのなら、そしてもし、その足取りにすべての才能を使い果すことができたのなら、Post・Schizo-Crimson - nienのレコードは、Larks Tonques in Aspicの裏返しと同様に組みたてられたであろう。キング・クリムゾンの獲物は、絶対的な暴力より、創造者の夢の爆発の権利だ。あらかじめ存在していた、すべての産物の除去は、そしてその混乱に打ち勝つには、たくさんのオーディアンスが必要である。彼らの音楽（このアルバムは“1984”と呼ばれている）は、まさしくピーター・ハミルのものと時として似ている。

重要なことは、欠如的芸術の内にはなく、商業的な価値と同様に、芸術的な価値を硬直化させている統制力の失われた自然の状態の芸術にある。芸術は多くの生命と個性的な創造を再演しなければならない。

Jean DUBUFFET

X ：Xavier BEAL
R ：RICHARD PINHAS

X：Heldon 5はすべての点において異質のものを作っている。コンサートに来る人は、まだ、この音楽の常客とはならないんじゃないかな。

R：それは2つの事によって異なる。Heldon 4は、我々のある時代の終わりを示さねばならなかった。一つは、私がとりわけ、すべてソロで演奏していた時期、もう一つはスタジオにこもって家内工業的な音楽として曲を構成していた時期である。Heldon 5において、私は装飾的経過楽句の側面を持つ並外れたタイプの音を見い出したのだ。まさしくこの作品は感覚能力で曲を構成する、よりよい音楽だ。楽符に表わせるような慣用的な形式のもとでの作品とは違うんだ。我々の音楽は極度に意味のないものを、もたらしたりはしない。だから、私はスタジアムも満員にすることができると信じてるよ。Heldon 4では曲の制作段階で録音した硬

直したものより、もっと規範に通じ合うようなアルバムを意識した。これは一回は必要なアプローチだと思うよ。

X：しかし、当然のことながら、人々は恐らくHeldon 4のイメージを捨て切れずにいるだろう。レコードを聴いて、当然コンサートに行き、もうわかりきった音を聴きたがるのではないかな。

R：Heldon 4は、バイオレンスのことを目標に制作したが、私としては、その目標は達成できなかったと思う。私自身、認めたくはないが、私はまだ十分に創造性が円熟していなかったので、多くの決定すべき方策は50%私の失敗だ。同様に、物質的、録音状況の失敗は50%はあるんじゃないかな。今まで私は録音し、それを反映させるための時間を十分にもてた。その時も私は、自分が望む、決して現存しないバイオレンスの音楽の下書きをした。注意しながらやったんだが、その時、明らかに現状からの格差はあったんだ。人々がレコードを聴いたとき、まさしく、コンサートに来たよりも激しいものを、と思って制作したんだ。それで、発売されたレコードはPost-Kripto-Schizo-Crimsonnienであり〝特殊一慣性の空想〟と呼んでいる。それはキング・クリムゾンの海賊盤と同じタイトルだけど、私はすべての意に反してクリムゾンをとても気に入っているからだ。又、クリムゾンに対しても偉大な恩がある。礼拝的、道義的なものだ。しかし、そんなことは遺産であり、今の私には関係ないことだがね。

X：Heldon 2はロバート・フリップに捧げたのか？

R：礼義としての意味もあるけれども、クリムゾンに捧げたよ。Ⅰstアルバムは私にとっての神を表現したかったね。

X：個々の作品は最終的なものなのでは？

R：Heldon 4を例にとってあげれば、そのアルバムはこれからの踏み板にすぎないシンセサイザーの音の反復の作品だ。メロトロン、ギター、ベースの他に録音しようとした音の代わりに、主題の反復を多く使用した。この音は、より良く念入りに作られており、あらかじめ前もって製作されてあったのだがね。完成美として私はより完璧に制作したかった。今でも同じように演奏できるよ。

X：たしかに、それはとても心地良く、静かで、むしろ映像に伴って、演奏する音だったのでは？

R：私は砂丘の中にある雰囲気を考えて制作した。スタジオで多くは作られ、多くのインプロヴィゼーションを盛り込んだのさ。私はNorman Spinradと一緒にレコードを制作する計画を持っている。彼はＳＦ作家で、とても美しい詞を作るんだ。

X：Norman Spinrad自身、詩を作って歌うのか？

R：いや、完全には歌わないだろう。私が気に入っている声の質があるからね。ジム・モリソン、ロバート・ワイアット、ジョン・ウェットンなんかいいね。まあ、私の考えて似合わしい人になると思うけれども。声を挿入した作品には曲を構成する段階で限界ができてしまうんだ。

X：そのあなたの計画は巧みな筋の運び方のＳ・Ｆなのかね？

R：まあ、そう言えるかもね。でも数ヶ月で構成されるロックのレコードみたいになるかもしれない。でも言葉の展望の見地から見て、とてもＳ・Ｆ的だよ。

X：あなたは、イデオロギーにまで発展するようなものを見い出すのが好きらしいが、イデオロギーの支配の中の作品は、余りにも重い感じがする。

R：私は完全に卓越した計画的な効果の録音における完成美とは反対のものを見い出した。私はこのことをすべての一行程として考えることにしている。Spinradは同一化の完全な形態をあらわし、見い出したいらしい。彼が望んだ同一化とはファシズムへの過程に関係しているらしい。私の方としては、いかにファシズムが作用するかなんてことは、虚飾にすぎないと思うんだけど。

X：Spinradの描く世界は壮烈な幻想的なものなのか？

R：たくさんある小説の中では興味が

あるものだ。叙述の部分は彼の得意とするものだ。

X：1984（Heldon 5のファーストタイトル）はどうしてつけたのか？

R：1984年とは現在を表わしている。いわば今日の神話だ。一つの観念を表現するために、それと共通の性質を持つ他の観念を表わす語を用いた。私は都会に住む多くの人々における巨大な恐怖を表わしたかった。人々はエレクトロニクスの人形と同様に、極めて、正確に納税額を計算され、コンクリートづくめのパリで、今日も秒単位で作動しなければならない。私は24時間中24時間、録音したものを合成し、スタジオで2、3回生活を送った。あなたの行動領域の果て、もしくは幻影と透視は、あなたに起った3時間の観念上の世界なのだ。

X：それは息詰まるように、閉ざされた戸口を見つけるようなものか？

R：それは偶然に起ったことではない。私は音楽に、ただ単に目を注いだことはないよ。1984年の一年はとても大きな抽象作用の段階だ。それは今日、ただ今日あり得ることなんだ。人々は十年過ぎて、並はずれて表現されたより大きな抽象作用の音楽があることに気づくだろう。

X：あなたは何ごとに対しても異なった姿勢を取っている。

R：私は多くの音楽家の主題に影響をうける。曲を作り適応させる人々は音楽家の側面を持っている。だから私は誰にでも影響は受けているのだ。行動においての専門化段階はもはや必要としない。シンセサイザーは基準となる音を持つことはない。むしろ精神の楽器だ。

X：これは私の見解だけれども、独創的観念を持たないタイプは、このことを見い出す試みをしてるのではないか？

R：実際にあり得ることだ。もし、あなたが異った事態を理解することに達したなら、基本的なシンセサイザーの音の演奏を理解しているだろう。もし、現存する状態の繰り返しの観念にとりつかれているのなら、もはや、それは繰り返されているのだ。そんなことが現存するなんて気づかないのだろう。何事も致密な日々の生活のあらわれだよ。

X：もし、あなたが作った音楽が今日になすものがあり、その音を見い出したら？

R：実際、そんなのないんだからしかたないんじゃない。クラウス・シュルツ、タンジェリン・ドリームなんか、そんな感じがしないでもないけど。

X：もし、誰かがあなたが作ったような音を作っていたら、あなたはどう思う。

R：私が以前作ったものを繰り返すのなら、それはもっとも良い商業的使命だ。クソッタレメ！私のまねをしている奴らには別に意見を求めたくはないし、ショックなどまったくないよ。人々は絶えずショーの準備にとりかかっている。だから、とにかく演奏する。その音楽の主題は実質的には音を出すことによって得られる結果であり、比較的に自由意志に基づかれている。私は、私にとって役立つ有意義な主題を設定している。音楽は私にとって極端に激しいバイオレンスであって欲しい。が、現在は完全な静止の時代だ。それは恐らく愛情のような殆んど不可能な自己満足だと思う。

X：あなたの言う特殊一貫性とは？

R：それは根拠のないものではないが無価値なものだ。一回限りのとても重要な空想だが、それ故、空想でないかどうかは、もはや現実的なものではない。恒久不変なものを壊すのには極めて重要なことだがね。私の行動は可能なかぎりの私なりの承認を必要とする。私が望む結果に私が迫ったとき、始めてその行動は承認されるだろう。

X：もし、それをコンサートかスタジオで録音したならいいのではないかな？

R：まあ、それは別として、いずれにしても仮定した価値に意見を求めるなんてバカげたことだよ。特にあなたは定義を与えることを可能にしながら、その音楽を客観化してしまっている。それは、とても危険なことなんだ。Heldon 1について、人々はよく言っただろ、「ほら！新しいシンセサイザーの使用がある」と。そんなことを私は求めてなんかいない。みごとな広がりを創造するには、官能を激化した状態が必要なんだ。

X：Heldon 5にあなたは客観的なものを見い出したか？批評家は全く客観的なレコードと言ってるよ。

R：私がなす音楽の視覚は、人々の精神に真実を伝えられる。

X：それは探し示す卓越した態度でないのか。

R：いや、私は何も示してない。私は言葉なしで話し、納得させることができる。概要に逆うことなくね。

X：私が思うに、これは避けられないことでは……。

R：ええ、でもこれは例外的なことだ。君は音楽は言葉、あるいはセンチメンタルな表現を通して完全に媒介であるという関係を事実としてとらえているが、私の音楽は、すべて〝マシーン〟の反復現象が気に入っているのであって他の何ものでもないよ。

X：人々を冷酷さへと促すことのできる楽器のことですか？

R：でも、もし君が私のギターによる方法が、まったく人間的でないものを統轄しているということを理解したならば、君の言う楽器の表現形態が大した意味をもたないという考えから脱けだすことができ、媒介の冷たさが増すということもないだろうね。

X：私はEnoがよりメロディアスなアプローチをとっていた頃のFrippとの音楽に強い印象がある……。

R：Enoは、より皮肉な音楽を通して、１つの深遠なる仕事を行っていると思うよ。

X：でも私にとって彼の音楽は、真剣さの点で取るに足らない手段であるように見える……人々はあなたに〝マグマの中のEno〟のような音楽を勧めるだろう。

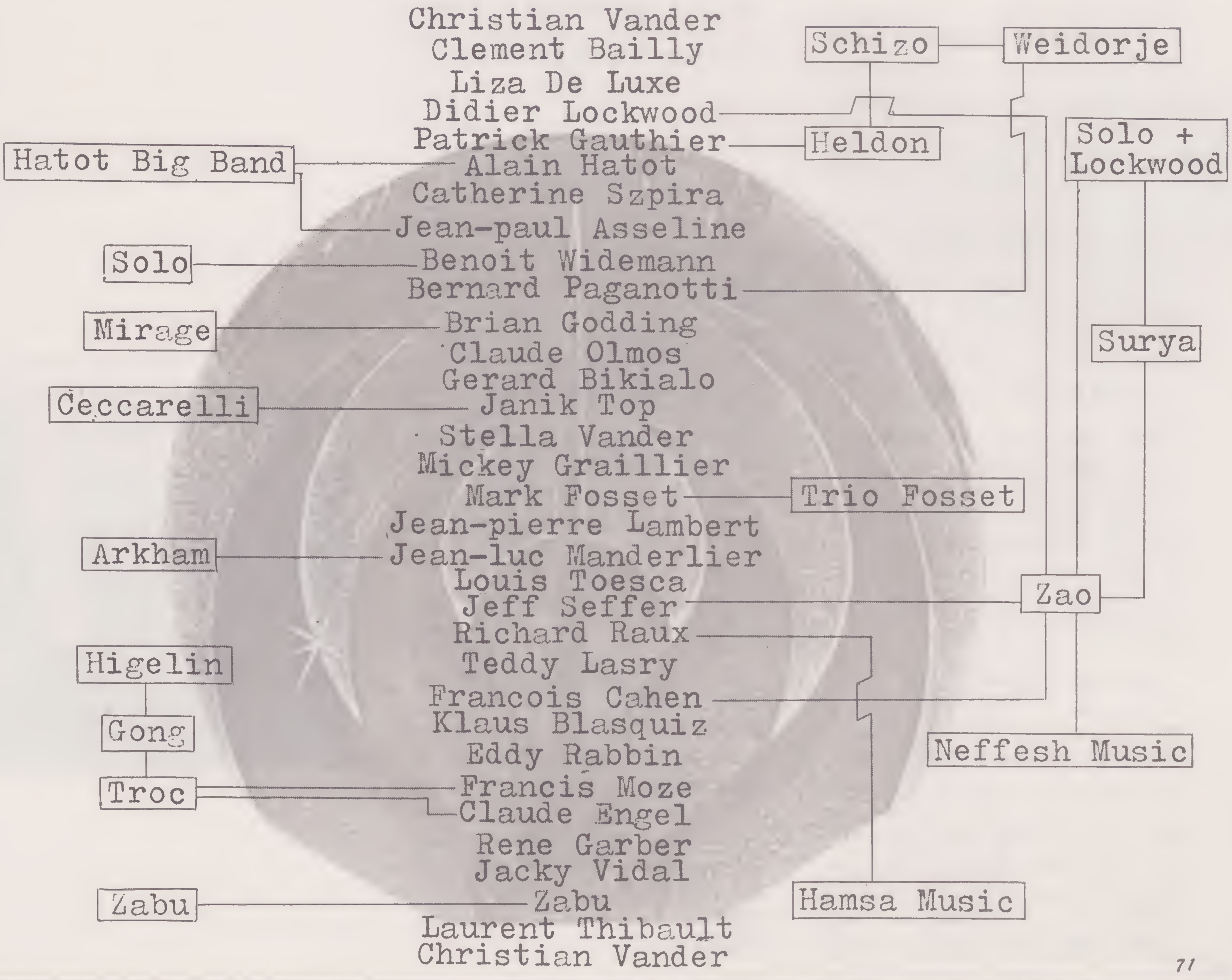
R：マグマの音楽は、君が３ヶ月で出来るような代物ではない。それに君が、彼らが保ち続けているいくつかのプロジェクトを理解したとしても、そのことが有能かどうかに疑いの余地がある。マグマの音楽には、私にはない巧妙さ、また、そこに達しようとする１つの象徴的な側面があるんだ。

X：人々がどこへの帰着を望むかを理解することがすばらしいと発見することですか？

R：私は、たいへん信じてはいるが、それと同時に、どこへ進むか、そしてすべての質問をもとの状態に戻すために壮大な時代の没落を、理解する必要があるようだね。

訳　片山　紀之

MAGMAをめぐる フランス・アンダーグラウンド・ロック



HISTORY OF HELDON

多くのイギリス人にとって「欧州」とは、〝ドーバー海峡を隔てた大陸〟のことを意味するのだという。又、フランス人にとっての「欧州」は、フランスーその国自身のことを指すのだと聞く。どうもフランス人には、欧州の中心はあくまでフランス、という強い自負心が潜在意識としてあるようだ。

そしてこの国の美しい首都パリでは、現在、のべつ幕なく爆弾が仕掛けられるテロ事件が多発しているという。この慢性的な暴力の風潮は、激怒の時代ーフランス５月革命ー当時の確固たる価値観の喪失による若者一般の非政治化、及びその反動としての、一部若者の暴力化、の顕れなのだろうか。

背走する学生、そしてそれを警棒を振りかざし、鬼気迫る形相で追う機動隊員――。そんな国家権力の持つ巨大な〝壁〟のイメージを鋭く喚起させる、フランス５月革命時のと思われる写真をアルバム・ジャケットに用いたフランス・アンダーグラウンド・シーンを代表するロック・グループ、それが今回紹介するエルドンだ。

エルドンは、現在までに７枚のアルバム（リシャール・ピナスのソロを含めれば９枚）をリリースしているが、その活動は、所属したレーベル毎にほぼ３期に分けることができるようだ。つまりⅠ～ⅣまでのＵＲＵＳ　ＲＥＣＯＲＤ期、Ⅴ～ⅥのＣＯＢＲＡ　ＲＥＣＯＲＤ期（現在『Heldon Ⅰ』は、ＣＯＢＲＡから再発されている。フールズ・メイトVol. ８の表紙を飾った写真はその裏ジャケ）、そして話題のレーベルEggに移籍した現在、の３つである。ここではその３つの時期に分けてアルバムを解説していきたいと思う。（なお、Eggよりのエルドンの最新作は、日本発売がとても有望だ。）

リシャール・ピナスがSchizo というグループを解散し、新たにエルドンを結成、ファースト・アルバム『Electronique Guerilla』を世に送ったのが1974年。当初エルドンは、メロトロン、ギター、A.R.P.担当のジョルジュ・グランブラーとギター、A.R.P.、ＶＣＳ３、メロトロン、テープを担当するリシャール・ピナスの２人組だった。ファースト・アルバムには１曲だけ、ヴォイス、ドラム、ベースが加わった演奏があるが、グランブラーとピナスのコラボレーションは、あたかもフリップ＆イーノに通じるかのようなテイストを、初期エルドンの音の中に醸し出していた。事実前出の写真が使用されたセカンド・アルバムには、フリップ＆イーノに捧げられた曲があるし、アルバムのファースト・チューンのタイトルは（これはあまりにも有名だが）、〝In The Wake of King Fripp〟という。

しかし、サード・アルバムにおいては、２人のコラボレーションという形式は薄らぎ、リシャール・ピナスが、自己のコンポーザーとしての攻撃的側面をより抽出化し始める。殆んどの曲がピナスのペンに依り、当然の事ながらセカンド・アルバムに２曲ほどみられた、アコースティック・ギターによる叙情的ナンバーは姿を消す。そして、現在のようにパーマネント・メンバーではないにせよ、ドラマーの起用にみられる以前にも増したピナスのアグレッシヴな姿勢は、かってキング・クリムゾンを率いた崇高的なまでのリーダー、ロバート・フリップを思わせる。

URUS 000002／

HELDON Ⅱ(ALLEZ-TEIA)

続く『Heldon Ⅳ』において、いよいよ彼らは、どろどろのカオスの中から、〈暴力〉そのものといえるような能動的エナジーを放ち始める。「『Heldon Ⅳ』は、バイオレンスのことを目標に制作した。」と語るピナスは、しかしまた「このアルバムは、これからの踏み板にすぎないシンセサイザー音の反復の作品だ。」ともいっている。確かにシーケンサーによる音の反復を基調とした過渡的作品かもしれないが、シーケンサーの反復音とそれに絡むドラム、パーカッションの織り成す不協和音の空間が、新たなるエルドンの飛翔を予知させた作品として、重要視されるべき必然性を有しているといえる。

URUSから離れ、COBRA RECORD時代に発表した2枚のアルバムによってエルドンは、ひとつの頂点を極めたといって良いだろう。これには新しいドラマー、〝シンセサイザーと共演できる唯一のドラマー〟いわれたフランソワ・オジェの参加が、少なからず影響しているようだ。ドラマーとして優れたテクニックを持つだけでなく、コンポーザーとしてもピナスに勝るとも劣らぬ力量を発揮するオジェは、現在のエルドンにとって欠くべからざる存在といえそうだ。

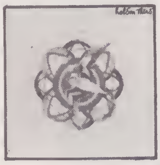
『Heldon Ⅴ』は、このオジェとピナスが中心となって演奏を展開している（1曲だけ、マグマのヤニック・トップがベーシストとして参加）。孤高なまでにクリムゾナイドされたピナスの硬質なギターとオジェのドラム＆パーカッションは、ジャケットに描かれた巨大な鋼鉄の溶鉱炉の作動ノイズさながらの壮美な音空間を構築している。

また、この5枚目とほぼ並行して、ピナスは初のソロ・アルバム『Chronolyse』を録音している。この「全てのS.F.フリーク」に捧げられたアルバムは、B面を埋め尽くす〝Paul Atreides〟が圧巻だ。ピナスのGibson Lespaul 1954はもちろんのこと、彼の奏でる幽玄なメロトロン、エレクトロニクスが今まで以上に印象的なこのナンバーは、リシャール・ピナスという謎に包まれたミュージシャンの、内的世界を窺い知ることのできる数少ない曲として興味深い。ピナスをサポートするオジェとベースのディディエ・バタールドのプレイも地味ながら光っている。

1977年の2月から6月にかけて録音された『Heldon Ⅵ』は、基本的には前作の延長線上にあるが、このアルバムが現在のところエルドンの最高傑作といえるのではないだろうか。メンバーは、エレクトロニクスとギターを担当するリシャール・ピナス。ドラム、パーカッション、シンセサイザーを担当するフランソワ・オジェ。そしてエルドンには、サード・アルバムから参加した、ミニ・ムーグ、ムーグ・ベース担当のパトリック・グァティール。このまさに〝黄金のトリオ〟というべき3人を中心とした『Heldon Ⅵ・Interface』は、ユーロ・アヴァンギャルド・ロックの持つ比類無きバイオレンスを、最高の形で露呈した名作といえよう。特にSide B一面を費やした19分に及ぶ大作〝Interface〟では、オジェの冷徹なシンセサイザー・パーカッションとピナスのギター、グァティールのムーグ・ベースが渾然一体となって、性的オルガスム状態とでもいうべき音の飽和空間を形どっている。

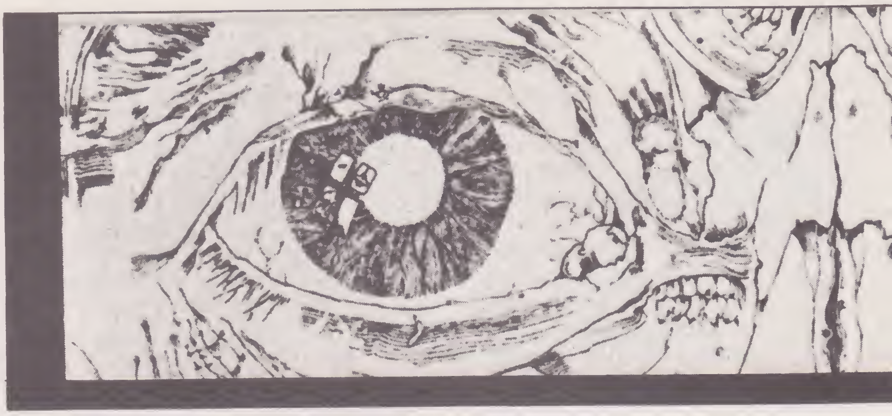
ところで話は前後するが、ピナスは、『Heldon Ⅵ』の録音直前、自己のセカンド・ソロ・アルバム『Rhizosphere』を製作している。メンバーは、ピナスとオジェの2人。ここでは、エルドンのアルバムに見られた狂的バイオレンスは影を潜め、ピナスは、エレクトロニクスの反復音を基調においたプレイを行なっている。アルバムの中の1曲、〝Claire P.〟を、ピナスは、現代音楽の作曲家フィリップ・グラスに捧げている。

URUS 000001／
HELDON(GUERILLA ELECTRONIQUE)



URUS 000006／7／
HELDON Ⅲ(IT'S ALWAYS ROCK'N ROLL)

URUS 000011／
HELDON Ⅳ(AGNETA NILSSON)



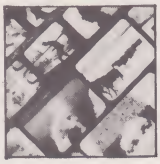
他に類を見ない重く、硬質なエナジーを噴出するエルドンを率いるリシャール・ピナスは、本当に素晴しいミュージシャンだ。Egg に移籍し、エルドン通算7枚目に当たる『Stand By』によって、ピナスは、新たなる領域にその身を投じたようだ。それは、ヴォイスを用いたタイトル曲に明らかだ。ここでは、今までのような実験音楽的面持ちは完全に拭い去られ、とても斬新な曲作りがなされている。他の2曲（1曲は、8つのパートに分れた〝Bolero〟組曲）も、ピナスの志向する音によるバイオレンスを今までより以上に具象化した、起伏に富んだ展開を示している。そして随所に、彼の攻撃的なギター・ソロを聴くことができる。

なお、ピナスとオジェは、同じEggに所属しているオズの『Adonia』にも参加しているが、こちらの方は、前号のEgg・レーベルの特集記事を参照されたい。

最後に、ピナスが関係したその他の代表的レコードを挙げておこう。Schizoの「Schizo And The Little Girl/Paraphrenia Praecox」、「Le Voyager/Torcol」という2枚のシングル盤。レーベルはDisjuncta。同じレーベルより、エルドンの「Perspective 1/Perspective 2」、「Baader Meinhoff Blues/O.D.B.」というこれもシングル。Flunceというグループの同名アルバム(POLE 0008)。その他Mettal Urbain というフランスのパンク・バンドのプロデュースも行なっているという。

COB 37002／
UN REVE SANS CONSEQUENCE SPECIALE

COB 37013／
HELDON Ⅵ(INTERFACE)



COB 37015／ CHRONOLYSE

COB 37005／
RHIZOSPHERE

EGG 900578／
STAND BY

構成　三津間　功

今は昔　懐しのブリテイッシュ・ロック傑作選

CHOPYN／Grand Slam
Jet：LP08

ショパン…グランド・スラム…、なんて言うと、プログレ・ファンが、「おお、クラシカル・ロック!?」と雄叫びをあげそうだが、残念ながらこのグループはクラシカル・ロックなどひとつもやっていない。何故こんなグループ名をつけたのかと疑いたくなるが、まあそんなことはどうでも良い。このショパンにはアン・オデルちゃん（前号参照）が入っているのだ！ヴォーカルを全曲とっているわけではないが、キーボードと数曲におけるヴォーカルで、その才能をいかんなく発揮している（もちろん曲も書いている。）。

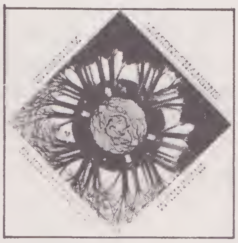
もう１人注目すべき人はギターのレイ・ラッセルで、この人は元ロック・ワークショップの人である。このアン・オデルとレイ・ラッセル２人を中心に、ショパンのサウンドは実にヴァラエティーに富んだものとなっている。まあ大ざっぱに言えば、クラシカル・ロック以外のことは大体やっているのだ…。（山口尚武）

RIFF RAFF／Original Man
RCA・Victor LPL15023

このボクが女性ヴォーカルを含まないグループを書くのだから、相当なものである…。ブリティッシュ・ロック・ファンなら誰でも一目置いているグループ"Riff Raff"は、マーク＝アーモンドにいたトミー・アイアーと、ロジャー・サットンを中心に作られたグループである。このアルバムはセカンドで、惜しくもこれがラスト・アルバムとなった。サウンドは、ホーンを加えたジャージーなもので、１stのアコースティカルな渋さとはまた一味違った渋さを感じさせる。大体の人は（ボクも含めて）この２hdの方が好きと言うが、どういうわけか佐藤正徳氏は１stの方が良いと言う。まあどちらもそれなりに「良い」アルバムなので、是非一度聴いて頂きたい。両アルバムの根底に流れるものは、まさにブリティッシュ・フィーリングそのものなのである。アシュラ狂いの山本くんも聴いてごらんなさい……。（山口尚武）

RUPERT HINE,DAVID MCKIEVER
／Pick Up A Bone Purple TPSA7502

ルパートハインの名前を御存知でしょうか？もし、あなたがブリティッシュロックをこよなく愛されているのなら数多いコレクションの中に彼の名を見い出すのはたやすいことでしょう。クオンタム・ジャンプを解散した後は再びプロデューサー業に専念しているようで、最近では、カフェジャック、アンソニー・フィリップスのアルバムにその名を見ることが出来ます。（特にカフェジャックの２ndは素晴らしかったのです。）"Pick Up a Bone"は71年に発表された彼のファーストアルバム（詩人のデヴィッドマッキーバーと連名）であり、才能豊かなシンガーソングライターのアルバムなのです。ここに収められた11の小品は、どれも、優しく語りかける彼の歌声を、ひときわきわだたせる、素敵な曲ばかりです。彼が心の通じ合った多くの友人たちと共に作り上げたこのアルバムは、ほんとうの歌を求める多くの人たちに聞いてもらいたい、決して色あせることのない重厚な絵画のような名盤です。（佐藤正徳）



BYZANTIUM／Season Changing
A&M AMLH68163

幻想の惑星に根を張る樹木の春・夏・秋・冬の変化をメルヘンチックに描いたきれいなジャケット（それも恐怖の４面変形ジャケット）で華々しくブリティッシュロックシーンに登場したビザンチウムは、彼らの音楽に対するみずみずしい感性をすべてこのアルバムに凝縮させている。72年、彼らはこのアルバムによって英国ロック界において一躍注目をあび、そして輝かしい前途が期待された。しかし当時の英国の多くのバンドがそうであるように、彼らもまた商業性の問題により解散をよぎなくされていく。(セカンドアルバム録音後解散)

このアルバムは、そんな当時のロックシーンの情勢を感じさせないすばらしい作りである。特に、親しみやすいＡ面の小品のあとに続く、Ｂ面すべてを使った３部作から成る組曲は圧巻である。そこにはメロデアスなアコースティクギターが随所に取り入れられ女性的な響きを醸し出しており、流れるように演奏していく様はまさにジャケットの風景をかいま見るかのようである。そしてクライマックスを向え、走り出す粘っこいエレキギターの高揚によりブリティッシュロックのパワーは甦えるのである。（坂地昭一）

LINDA LEWIS／Say No More
Reprise：K－44130

前号と同じ文章で申し訳ないが、女性ボーカル気違いのボクにとって永遠の恋人であるリンダ・ルイスの記念すべき１stソロ・アルバムが、この「セイ・ノー・モア」である。全曲彼女自身のペンによるこのアルバムには、天才少女（当時）リンダ・ルイスの才能・個性・センスが、まるで星クズのようにキラキラ・バラバラと収まっていて、森氏ではないが「涙無くしては聴けない！」といった感じである…。アレンヂには、レスリー・ダンカンの旦那であるジミー・ホロヴィッツがあたっており、バックにはクリス・スペディング(出たな色男)も参加している。

このアルバムの後に、歴史的名盤"Lark"を発表するのだが、リンダ・ルイスの歌は、まさにLark（ひばり）のさえずりである（どこかのひばりさんとはだいぶ違うが…）。

アリスタに移ってからの彼女は、だいぶポップに、さらにソウルっぽくなってしまったが、それもまた良いではないか……！（山口尚武）

SAMURAI
Greenwich GSLP1003

「色みえでうつろふものは世の中の、人の心の花にぞありける」(小野小町）。人間の心ーそれも男女関係における男の心のは

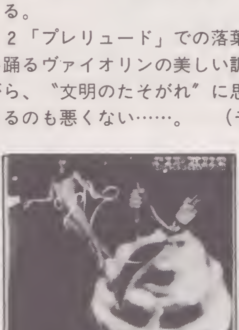
かなさ、うつろいやすさを巧みに表現した小町。彼女は「なげき」の歌人と言われる。そんな彼女の和歌を現代風ジャケットに盛りこんだこのアルバムは、ブリティッシュロック界に埋没してしまったＬＰなのだ。サムライの前身バンドのウェブに、イギリス空軍バンドなどで10年のキャリアを持ち、エピソードシックスを経てきたリーダー格のデイヴ・ロウスン（後にアランボウンセットを経てグリーンスレイドへ）が加わって作られた最初で最後のアルバム「サムライ」は、そのレベルの高い音楽性、ジャズ風な演奏内容等、なかなかのものであった。そしてその奥底には、日本武士道と相反する男の「なげき」が淵瀬を作りながら流れ、彼らの唱えた「世の中の人の心の花」は、８年後の今でも私たちの心底を揺るがしつづけているのである。　（久野克浩）

STUD／September
BASF：20・29054-9

ファミリーとテイストが合体するとどうなるか？……こうなります。

１stは71年に発表されているが、大方は不評だったようで、この２ndそしてライヴである３rdは、独バスフを通じてリリースされたものの、本国では今もって発売の機会をもっていない。この事を逆手にとるかのように、ここでの彼らは何といきいきとしていることか。枯れた味わいのクリーガンのヴォーカル、ウェイダーのヴァイオリンはファミリー在籍時にも増して、男性部門いっちゃん！と叫びたくなるほど素晴らしい。曲そのものの出来よりも演奏全体に漂う〝まろみ〟が魅力となっていて、安息の日々を見つけ出した余裕と共に、和気あいあいとしたセッションの光景が目に浮かんでくる。

Ｂ－２「プレリュード」での落葉のように舞い踊るヴァイオリンの美しい調べを聴きながら、〝文明のたそがれ〟に思いを馳せてみるのも悪くない……。　（モ）

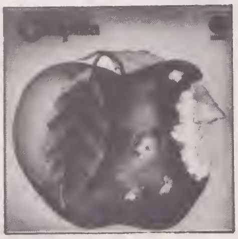


CIRKUS／One
RCB－１

ロンドンでたったひとりで働いているボクの友人がこのレコードを送ってきたのは去年の暮だった。今だにいつだれの手によって作られたものかわからないし、本人たちも今頃はもう英吉利の土と化してしまっているのかもしれない。でも彼らの残した遺産は確実に現代に呼吸して、今日もひとり、明日もまたひとり、と聴く者をのけぞらせ続けている。とにかく「音は？」とたずねると、「70年前後」と答えるから、ムーディー・ブルースはもう屍となっていても、クリムゾンの登場がほの見えるようだけれど、メロトロンとストリングスのコンビネーションが実に絶妙の極致で、もう70ミリ超大作、壮大な宇宙空間にすべては吸い込まれてしまいそうだ。しかも彼らは、〝白っぽくなる為の手段〟としての電子楽器といったものを極端に嫌ったようで、ソリッドなギター・サウンドが縦横無尽に駆けめぐるあたり、〝シンフォニック・ロック〟と呼ぶにはあまりにも刺激的な横顔をのぞかせる。

出会いの鮮烈さが驚愕に変わり、それがさらにロックの歴史に還元されるという、存在することさえ信じがたい稀有の名盤!!

（モ）



CATAPILLAR
Vertigo 6360 074

皆さんはよく、ブリティッシュの著名なレーベルのリスト等を見て、その廃盤の番号だのタイトル及びアーティスト名に胸をときめかせることがあるだろう。特に幻の名盤と言われる代物を多く含むVertigoにおいては、少なからずその経験があるに違いない。Vertigoの数多い謎のグループの１つとして、このキャタピラがあげられる。アンナ・ミークというオペラを学んだ本格派（？）の女性ヴォーカリストと、ホークウィンド等で知られるロバート・カルヴァート（サックス、フルート担当）が在籍した幻のグループで、２枚のアルバムを残してこの世から消え去っている。このアルバムは１stで、後に発表したChanges を未だ耳にしていないので何んとも言えないが、ホーンをとり入れた何やら神秘的なサウンドが彼等の特徴である。思ったよりアンナのヴォーカルがフィーチュアされていないのが残念だが、謎のグループにふさわしい謎の音…といった印象がもたれる１枚である。

（山口尚武）

COMUS／First Utterance
Dawn DNLS3019

うら若き貞女の美徳はコウマスの爪に汚される。叫びは静寂を切りさき、コウマスは夏の日の悪徳に戯れる。

人は皆一様に潜在意識の奥底で狂気の種子を育てている。蓄積された感情の排き物は、秘やかに狂気の花を開かせる。リーダーのロジャーウットンは自らを神経症患者と呼ぶ。ヴァイオリン、セロ、ギター、ボンゴ、フルート等、生楽器を中心に作り上げられるコウマスの、パワフルかつラウドなサウンドは、人間が内在する〝邪悪な欲望〟をあからさまにぶちまけたような、そら恐しいものを感じさせる。かき鳴らされるギター、不気味にきざまれるヴィオラのフレーズ、そしてこれなくしてはコウマスの魔力も半減してしまうロジャーウットンの鬼々迫るヴォーカル。ファースト・アッテランス(アデランスではない。)と題されたこのアルバムのジャケットはその内容と相まって長きにわたり、ブリティッシュ・アンダーグラウンドシーンに異彩を放ちつづけている。　（佐藤正徳）

INDIAN SUMMER
Neon NE3

今や押しも押されぬビッグネームとなった王者ブラック・サバス。デヴュー以来変わらぬヘヴィーなギターサウンドを持って、その王道を歩んできたわけだが、1969年11月、彼らと共にオーディションを受けたもう一つのグループがあったことを知っているだろうか。それがこのインディアンサマーなのである。サバスにおくれること約１年、ＮＥＯＮからデヴューを飾った彼らは、既にその姿を消してしまったわけだが、R.ベインのプロデュースのもと貴重かつ素晴らしい１枚のアルバムを残してくれた。サバスが重厚なギターを前面に押し出したのに対し、彼らは、そのサウンド・ポリシーをキイボードに置き、絶妙のアンサンブルによって奥行きと広がりのある音空間を作り上げた。その空間を流れるような早びきギターが舞い躍る時、彼らの演奏はクライマックスに達する。もし、あと２年登場が遅れれば、そのプログレッシブなサウンドはより高い評価を得られたかもしれない。

（佐藤正徳）

LODGER David Bowie

ボウイが近況

ボウイが"Ziggy Stardust"によって日本でも認められてから　もう何年経つのだろう。もう随分昔の事のようにも思えるが、実際には6年しかたっていない。その間に、アルバム8枚、ライヴ盤2組、ベスト盤1枚を発表している。映画にも3本出演した。すべては順調である。月日は確実に6年たち、ボウイも6歳年をとった。初来日の時、哺乳瓶をくわえて、ぺたぺた走り回っていたゾウイも小学校4年生位のはずである。大恋愛の末結ばれ、お互いを束縛せず、ロック界で最も進歩的で理想的でステキなカップルと謳われたアンジーとの結婚生活も解消した。ロンドンの下町に生まれ、成功と共にケント州にビクトリア風の豪邸を建て、そこに住んだのも束の間、その後ロサンゼルス→ベルリン→スイスと居住先を変え、その都度、発表するアルバムの音楽性は目まぐるしく変わった。一方、初来日のステージを見たファン達、及び評論家諸氏は、少なからずショックを受けたようである。今日程ではないにしろ、海外のロック・アーティストも次々と来日するようにはなっていたが、あんなステージは初めてだった。玉三郎に教わったというメイクを施し、山本寛斉の経帷子のような衣裳で、惜気もなくその鍛えぬかれた肌身をさらし、ストロボとミラーボールを駆使したライティングの中、素足のボウイは、猫のようにしなやかに歩き、たった1人で群集を表現し、軽やかに飛びまわった。おなかの底からしぼり出されたような1つ1つの言葉は、鋭角的に胸につきささり、一種の狂気を孕んだとも言えるそのすさまじさの前に、ただ椅子にへなへなと座り込むしかなすすべを持たなかった。

ステージ3時間位前から、神経質そうに1人でホテルの自室にこもり準備をするボウイが、ステージを終えて30分もたたないうちにシャワーを浴び、着がえて我々の前に現われる時には、いつもの　もの静かで礼儀正しい1人の男に戻り、私達の他愛無いおしゃべりに一生懸命耳を傾けてくれる。とても不思議な感慨に襲われたものだ。

ボウイのコンサートを観た評論家達及びファンは、それぞれの立場から、David Bowie

を書いて　私達に送ってくれた手紙です

という１人のロック・アーティストを解析しようと試みた。或る者はニーチェの〝ツァラトストラ〞の超人思想を持ち出し、或る者は、ボウイが15、６才の時読んで影響されたという、ケラワックの〝路上〞から何かを探ろうとし、又或る者は〝2001年宇宙の旅〞のボウエン大佐にイメージを重ね、サム・ペキンパーとの比較論まで飛び出した。概念的にも、芸術的にもアイドル的にも、真に申し分ない素材だった。その後〝アラジン・セイン〞〝ダイアモンド・ドッグス〞とイメージを脹ませてきたファンは、〝ヤング・アメリカン〞で愕然とする。そのあまりにアメリカナイズされたソウルっぽい音に、裏切られたような思いで離れていくファンもいた。ロサンゼルスに移り住んだ事をまず肯定的にとらえる事によって、その音の必然性を見い出した者は、しぶとくボウイを支持する。が逆に、このアルバムからのシングル・カット〝Fame〞が、全米No.1のヒット曲になったため、新しいファンもできた。そして、アメリカでの生活への結論と言える、〝ステーション・トゥ・ステーション〞に続くが、そこでまた、大きな転機を迎える。重い歴史を背おい、今まさに爛熟し朽ちんとするヨーロッパ文化の中に身を置き、アメリカ文化における音楽の持つ娯楽性へのアンティテーゼとも言える〝ロウ〞を発表する。ブライアン・イーノという、非常に似かよった姿勢を持ちながらも全く違った方法論を取るパートナーを見い出したがボウイは､続いて〝ヒーローズ〞を発表し、その後、５年半ぶりに日本公演を行なった訳である。

そのステージは、初来日の時とあまりにも違っていた。ステージのバックと頭上に何本もの白色ネオン管を飾っただけのシンプルなライト・エフェクトの中に、この６年間の実績からくる余裕さえうかがえる堂々としたボウイが立っていた。重く荘厳な〝ワルシャワ〞から始まったステージは、ずっとファンであり続けた人にとっては必然的なものであり、それ以上のものを期待した人は少なからず失望したようだ。

非常に前置きが長くなったが、問題はこなのだ｡〝ジギー・スターダスト〞で目を開かれた評論家、ファン達のボウイ信仰が作り上げたボウイ像が先行してしまっているのだ。今回のアルバム〝Lodger〞は、そういうファン達への警告が一つの大きなテーマである｡来日の際にも強調していた〝Generalist〞という立場で完全に作られている。初期において、ボウイの場合、音楽性そっちのけで、詞の重要性を説かれ、その詞の持つ〝時代の先見性〞を高く評価されたため、ボウイの一挙一動に注目し、何かを暗示しているのではないかというような詮索がめぐらされるのが当然のようになっていたところがある。

近年、ボウイがドイツ表現主義の絵画に興味を持った事で、それまで日本ではクリムトと比較したら無名に近かったエゴン・シーレの展覧会も、なかなかの盛況だったようである。確かにボウイの停滞する事のない知識欲、鋭い感性、またそれらによって得たものを確実に消化してしまうバイタリティには目をみはるものがある。が、かつてボウイの音楽性の変遷から〝変化の必然性〞を説いた評論家達、また、次はどう変わるかを期待しすぎたファン達は、逆にボウイに変化への義務を負わせてしまったようだ。普通のロックミュージシャン達は、違う音に挑戦する時、非常な困難がつきまとうものであるのに。

この〝Lodger〞では、ボウイの、普通の１人の男として、地球人の１人として、これからやっていく決意がうかがえる。

来日の時言っていた、横尾忠則氏のジャケット・デザインは時間的に間に合わなかったらしいが、ジャケットには、いかにもブザマに負傷したボウイの姿がある。

Ａ面１曲目､〝Fantastic Voyage〞の中に出てくる。

'Cause I'll never say anything nice again
how can I

がとても印象的だし、このアルバムを象徴しているようだ。全部で10曲、納さめられているが、すべて歌詞は日常的な言葉を使い、具体的な表現をしている。妥協して鋭さがなくなってつまらなくなったと思う向きもあろうが、もっと心をリラックスさせて、ボウイが近況をしたためて私達に送ってくれた手紙かエッセイのようなつもりで聞いて欲しい。ボウイ自身も気負いがなくなり、のびのびと歌っているようだし､〝ハンキー・ドーリー〞の頃のみずみずしい生命感さえ感じさせる。音の方は、またもやイーノが参加し、ヴィスコンティのプロデュースの為､〝ヒーローズ〞の音作りと似ているが、メロディラインに民族音楽を巧みに取り入れ、かつ自然で聞きやすい。今回印象に残ったのはパーカッション。パトリック・モラーツのソロアルバムの如く、メロディラインと関係なくドコドコ、ドコドコ響いている曲が何曲かあるが、非常に快い。暫くヨーロッパにこだわっていたボウイの興味が第三世界に向いている。そして彼のLodger（間借人）としての生活は、Ａ－３の〝Move On〞という曲の内容からしても、まだ当分続きそうだ。地球には、まだまだ興味深い土地・生活があるようだ。日本にも公演終了後、１月中旬まで滞在していたらしいが、また、何かを感じとって帰った事だろう。イギー・ポップと来日した時、車に乗っていても、表通りよりも、一歩入った路地で、窓の外に目を輝やかせていたボウイが印象的だった。ボウイは生きる事にいつも真剣だ。１枚１枚のアルバムは、その時その時の本音だと思うし、その時その時の最良の方法で作られていると信じられる。が、以前のようにロックに対する切実さみたいなものが、やや薄らいでいるようだ。〝ジギー・スターダスト〞の頃も、ロックを手段としてつきはなしている部分はあったが、とりあえずロックしかないという切迫感が、凄みとなって現われていた。しかし、今のボウイにはロックの他にも絵や映画という表現手段を持っている。最近私も、ロックに固執する必要は全くないという気がする。大切なのは、自分自身の感性をいかにして自分に合った方法で磨くかだ。今こそ、それが必要なような気がする。最終的によりクリエイティヴである為に。ボウイに多くを求め過ぎたり、水先案内を頼るのはもうやめよう。もっと心を楽にして、一つの事にこだわり過ぎると、割と何も見えてこないようです。

（松井亜由美）

Talking With Shingetsu

新月

M. KITAMuRA

新月は僕の知る限り、日本のロック・シーンが生み出した最初のプログレッシヴ・ロック・グループである。ここで言うところの〝プログレッシヴ〟とは、キング・クリムゾンやその他のバンドを意識的にフォローしたという意味ではなく、彼らの音楽がひょっとしたら、メディアや流通機構を通じて何かしらの有意義で思索的な創造を行なうことになるかも知れないという可能性を指している。未だ新月の音に接したことの無い人にとってはあまりに抽象的な説明になってしまうかも知れないが、新月の持っている音楽概念、創作意欲は、これまでのロック・グループとはそのスケールの大きさに於いてかけ離れているという僕の主張をまず信用して頂きたい。ある意味でジェネシス、キング・クリムゾンが我々を魅了する際に最もはっきりと認識し得るあのアンサンブルによる魔術性というものを彼らも追求しているのだ。

新月は76年の夏、キーボード奏者花本彰と鈴木清生(B)、ヴォーカリスト北山真(Vo)の3人が作っていたグループと、ギタリスト津田治彦とドラムの高橋の在籍していたHALというグループの合体がきっかけになって結成された。

「当時のグループはいうなれば学生バンドだった。新月を結成した最も重要な動機といえば、それよりもワン・ステップ進んだバンド形態、つまりプロフェッショナルを目指したもの、よりつきつめたもの、奥深い音楽をやりたかったからだ。」(花本)

リーダーでありグループの重要なコンポーザーである花本は、新月が最初からある程度趣味的レヴェルから脱却した地点から出発したことを強調する。社会的レヴェルでの音楽家の影響力というものを非常に強く認識しているようでもある。

その後約半年間のリハーサル期間を誰に知られることもなく猛練習に費し、新月が初めて聴衆の前で演奏したのは77年の暮頃からだという。屋根裏などのライヴ・ハウスを中心に活動し着実に名前が知られるようになると、新月の存在は一部のファンの間で非常にエポックなでき事として受け止められるようになる。(驚くべきことに新月の出演した最も大きなコンサートは、78年11月に本誌とOMNI－PRODUCTIONが主催した「From The New World」である。)

数少いステージの根本的な原因は、無論彼らの大量の器材の運搬の困難や、マネージメントの不備が災いしていた。ZENレーベルのディレクター氏を「From The ……」に招いていた僕たちは、新月のステージが彼の興味を大きく惹いたことを知り、またもやひとつの大きな確信を持つに至った。

「マス・メディアが僕たちの音楽に商業的な価値を見出したことに関して僕らは別

津田＋北村（本誌）＋花本

に何の抵抗も持っていない。むしろそれらは積極的に利用したいと思っている。しかしここで最も大事なことは、僕らはそのための妥協を一際行っていないということだ」
（花本）

一般にこうした音楽は、ロックの世界でもきわめてアンダーグラウンドな産物と思われがちである。実際にかっての日本でこうしたロック・グループが売れたということはまるでなかったし、まして生まれたことも皆無に近かった。新月はこんな日本のシーンのメジャーとマイナーの間で何を強い主張としてゆけばよいのであろうか。

「ロックが興奮を促す働きだけでなく、覚醒を促すことも可能だという認識は、今は世界的な傾向として認められているのではないだろうか。僕たちの音は日常感覚だけで人生を送っている人々に、いくつかのイマジネイティヴな要素を提供することになるだろうね」
（津田）

「音に対して個有の概念というものはあまり意識していない。好きな受け取り方をしてくれればいいのです。新月の音には強制的なものはあまりない。」
（鈴木）

「作曲や構成の段階で僕らが決定してゆくことは、第一に聞き易さだといえる。実際にレコードになっている新月の音楽は非常に聞き易く処理されていると思う。つまり素材は確固としたものであれど、そこに入り込むのはとても簡単なことなんだ。」
（高橋）

「ロックが一般的に肉体的な表現だとされているにもかかわらず、新月の音楽は極めて精神的だ。ファンタジィーに関係した内的な意識性をとても子どもじみたものとして片向けようとする傾向が強いが、そうした世界と日常との価値感、均衡のようなものの重要性の再認識を促すようなねらいがある。」
（津田）

彼らの音楽が根本的な部分での現代との反発を呈していることは発言からも明らかだ。しかし彼らは現代の日本の状況にとても楽観的で希望的な一面も持っているようだ。新月のデビュー・アルバムは、今年の４～５月にかけて箱根のロックウエル・スタジオでレコーディングされた。この段階に於いても新月のメンバー５人と少数のスタッフの完全に自由な録音が行なわれ、外的なものとの妥協は一際シャット・アウトされることになった。特にレコーディング・エンジニアの一人である森村寛が、サウンド面のまとめ役を行ない、新月サウンドを完成させる大きな力になっている。

新月のファースト・アルバムについて、彼ら自身の口からコンセプトを語ってもらおう。

「もちろん最初は唯のロック・ファンの１人でした。僕の聴いていた音楽はもちろん〝プログレッシヴ・ロック〟だったけれど、日本のアーティストには満足できるものが全々なかった。バンドを始めたきっかけはまあこんなものだけれど、その際にやはり『ジェネシスとクリムゾンが大好きなので、あんな風にやってゆこう』ではどうしようもないことを切実に感じた。僕らは日本にいるんであって、ヨーロッパのロックは当然よその国の音楽でしかなかったわけだからね。そこで僕らは日本の風土とか、日本人の記憶の中にあるファンタジックな要素とか、そういった日本的な土壌からマテリアルを捜すことが最も必要なことだと感じた。」
（花本）

鈴木 ＋ 北山＋森村（レコーディング・ディレクター）

Ａ面の１曲目『鬼』とＢ面１曲目の『白唇』は世界的視野の中の日本のグループ新月を最も色濃く表わしているといえる。日本の民話的な風景の中で語られてゆく物語的な形式を持った美しくも複雑な曲である。

「『白唇』は僕の作った曲だけれど、白い唇の女というのは実は〝もうひとりの自分〟の投影なのだ。つまり内的な美を秘めた自己の女性原理への憧れを表わしている。」
（津田）

オカルティズムやファンタジィーを作品の中の支柱に置こうとするギタリストの津田は、レコードにおいてスティーヴ・ハケットばりの妖しい音色のギターをふんだんに聴かせてくれる。もちろんステージに於いてもキーボードの花本の操る重厚なオーケストレイションと共に新月の核を成している。ステージに於ける新月のヴィジュアルなコンセプトは、ヴォーカリストの北山真の演劇的なステージ・アクトと、高さ10数メートルの三面マルチ・スクリーンを使用した映像が、多分日本では初の試みとして大きな注目を集めることになるだろう。７月25日、６日のデビュー・コンサートに期待しよう。

新月の登場は果たして日本のロック・シーンに何をもたらすであろうか。新月が今の音楽界の一般性から見ると特異な場所にいることは否定できない。しかし彼らは独自のアイデアをテクニカルに昇華してしまうだけの充分な素養を秘めている日本で唯一の存在だ。時代の移行が彼らをメイン・ストリームに迎え入れる日は近いだろう。

高橋

ロマンの記憶の彼方——アル・ステュワートの音楽

一抹の風がヒョウと音をたてたかと思えば閉ざされた世界の隙間から心の真実を引き出そうと入り込む。暗闇。そこは暗闇の世界。求めていたものの全ては偽りと化し、訳の解らぬ諸々の事象、疎外感だけが渦を成し、彼を彼の最も恐れるべく現実へと引き戻す。薄ぺらな事実はその牙をむいて彼の真実をズタズタに引き裂き、残された少しの言葉を埋めて詩う事に気付いた時彼は初めて抵抗する手段を知った。アル・スチュワート、そんな彼の言葉の一かけらが乾いた心を涙で潤していく。

45年9月5日、スコットランドはグラスゴーに生まれる。かつて動乱の地イギリスを支配していたスチュアート王家の血を引くアル・スチュアート、その鋭く醒めた瞳の中に淡々と時の流れだけが映り、消えていく。まだ自分自身が確かなものでなかった頃、アルは〝生きているもの、確かなもの〞を見つけ学校をやめた。17の時の事。1962年、正にイギリスは波乱万丈、幻のギタリスト、ジミ・ヘンドリックスやクリームが一世を風靡し、その躍動感を至る処に浸透させていた頃である。彼は、他の同年代の少年達同様にR＆Bのバンドを作り、音楽を以ってもう1人の自分を表現する事を覚えひたすらにそれに務めた。自分の道が音楽の中にあると知った彼は、いやおうなしにその矛盾を味わう。〝自分が食べていく為に、自分が生きる為に食べる為に〞苛酷な条件を背おって一歩を踏み、新聞売り、ベッド・カバー売り、貿易事務所、楽器、ありとあらゆる単発的な肉体労働に従事した。あまりのつらさの為に彼は錯覚し、肉体的な辛さばかりが頭の中に響いていた——何の為に？——と。'63年、トニー・ブラックバーンのバック・バンド、バーンマウスに参加し、プロとしての正式なスタートを切った時アルは、ただ音楽の中に生きる為に生きているしかない自分を悟ったのである。'65年ロンドンにてソロ活動を始めて直に、彼は病に1ヶ月以上も伏した。精神的なギャップと肉体的な疲労が彼にもたらせたしわよせだ——栄養失調。それでも彼は歌を捨てない。そして、彼が自分の運命ともあるべくサイモンとガーファンクルとの出会いから、その人生を見つめ直すのにあまり時間を費さなかった。人々の前にその傷口をつきつけ、血をまき散らしながらそのサウンドをクリエイトするロックよりも、傷口の血でその心の模様を著す詩を書く事を彼は選んだのだ。'65年から'66年にかけてフォーク・クラブを巡り、'67年に『ベッドシッター・イメージズ(Bed Sitter Images)』でレコード界にデビューする。続く『ラヴ・クロニクルズ』『ゼロー・シーフライズ』も含め、アルはまだ大人になりきれない心をそのまま現わしている。幼い頃の恋心、17才の時の初めてのセックスから、旅先で出会った少女達との戯れが、延々とつづられた日記の様なものだった。そして、彼が最も愛した恋人マンディとの別れが、この頃の彼の痛々しいまでの感情をこめた唯一のテーマであった。

スペインからの便りが届いたよ——君はまだ学ばなきゃいけない事がたくさんあるんだってね。いつ帰れるかもわからないんだね。物事が上手くいって、君がそれを見つけられる迄なんて……。僕は我慢しなくちゃね。
スペインからの便りが届いたよ——君はその心をほぐしてくれる人に出会ったんだってね。彼は君の涙を乾し、そして君の側に横たわるんだろう。ワインを飲みながら時を過ごして……。僕は我慢するよ、——(News From Spain)

人々が初めて心の想いを詩に描く時、恋の詩を書く。〝失恋した時にね、「ああこんな辛い事が世の中にあるなんて…。」って思ってね、文字に著して自分の滞りを癒やそうと思ったのがきっかけさ」さる有名なヴォーカリストが語ってくれた事がある。アルが、その胸の苦しみを表現した時それは、あまりにもろくあまりに鋭いものだった。一生の内で一番辛くて悲しかったマンディとの別れ、しかしそれは結果的に、アルにアーティストとして自分をつき放して見る事の自覚をももたらしたのである。72年に出た『オレンジ』では、彼は1つの人生を客観視する事の出来る、理性によって導びかれる魂をもった吟遊詩人へと成長し、翌年の『過去・現在・未来(Past Present Future)』で、一般的に彼の名を知らしめるに至った。ジミー・ペイジがギターで参加したこのアルバムでアルは、彼の眼を通して見た予言者ノストラダムスの事や、公然の沈黙であるドイツのロシア進攻をテーマに挑み、そのスタイルを確立した。アメリカ初デビューをこのアルバムで果たしたのを機に、彼はその拠点をロスに移し、アラン・パーソンズをプロデューサーに迎え『追憶の館(Modern Times)』を'75年に制作した。これは全米ベスト・セラー・チャートの上位を占め、彼は世界の檜舞台に舞い降り、手の内を見せて大きく翼を広げた。一瞬のブームの中にその運を勝ちとったアルの次作『イヤー・オブ・ザ・キャット』はプラチナ・ディスクを獲得し、その波紋を世界のミュージック・シーンに投げかけた。

彼自身の世界には張りつめた緊張感はいつのまにか消えさり、ゆったりとしたメロディーの中に、デリケートでありつづけながらも豊満な感情がある種の自信のもとに息づいている。やせ細って失うものは全て失った哀れなアル、もうその影を見い出す事の出来ない現状に彼自身、徴妙な思持ちで身を任せていたのだ。関節の1つ1つの隙間から冷たく湿った風を感じていたはずのアルの指先から、今は軽快なリズムが刻まれ、カサカサに乾いてひびきれていたはずのアルの口元から、今は憂いを含んだ優しい調べがこぼれる。彼は安らぎを覚えてしまった。最新作『タイム・パッセージ』の中に答を見るか？フランス革命、貴族の妾の子、貴族を呪った水の智人ロベス・ピエールとフランスの血塗られた歴史の叫び、信じる事に死を賭けたトーマス・モア、己の運命を肯定しその身を裂いたマシュー、様々な題材が屈折した空間を経て、時間を飛び越え淡々と語られ、透明なガラスで覆う。どんなに冷たく詩ってみても、もはや本当の暗さは描けない。——タイム・パッセージ——不可抗力に陥りながらも魂が集う、彼の今一番求めて懐しむものが、その想いに含まれているのだ。

スコットランドの名門スチュアート家は、1603年イングランドのチューダー朝絶滅後、ジェームズ6世をイングランドに送り込み名をジェームズ1世と改名させ、スチュアート王朝を確立させた。その後チャールズ1世、チャールズ2世、ジェームズ2世、ウィリアム3世とメアリーの共同君臨を経てアン王女に至ったものの、後継者がなかった為にこの王朝は絶えてしまった。——スチュアート王朝が全盛を誇っていた合い間にも、ピューリタン革命や名誉革命、人民の平等、平和の名のもとにあらゆる争いが起こった。記録書の文字からは汲みとれない地獄絵図を繰り広げて、人々の涙と血で辿られたスチュアート王朝の歴史。

——アル・スチュアート——彼の体中に流れている血の一滴一滴の中に、一生解き放たれる事のない罰の重さと歴史の囁きが、哀しい響きを放って彼を縛っている様な気がしてならない。

そして彼は又、そんな自分自身の人生を裏から見透かして、遠い地、遠い時代への想いを込めて詩を書きつづけるしかない自分を知っているのかもしれない。1980年代へ流れの中で〝今〞に押し流される事ない平静な魂の持ち主、それがアル・スチュアートなのである。

(江本 きん太)

The Pop Group
This Heat

意見、写真展等案内は下記まで、

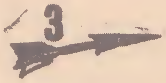
〒157　世田谷区成城5－9－16 Tel．03－484－5656
瀬沼　俊隆

ボウイが日本へ来たとき、「ロックは今、ルネッサンスのようだ。」と言った。ニューウェイヴを中心に数々の新しい動きが起こった。1984年にあと5年と迫った現在、このルネッサンスからそろそろいくつかの結論が導き出されようとしている。アフターパンク、ポスト・パンクという言葉も頻繁に用いられるようになった。ロックを音楽として捉えるならば、音楽の歴史は急激に鋭角なターニング・ポイントにさしかかっているようだ。

むしろ、ロックは変曲点の連続といえるかもしれない。当然のことながら、ツェッペリンやボウイまでが既にイモに聞こえる。聴き手の要求の変化には凄まじいものがある。ニーズが刻々と変化していき、論理は次々に塗り替えられる。

「電話」について考えてみたことがあるだろうか。「電話」という言葉はいかにも事務的に響く。黒く光る「電話」は一種の文学的な懐しさまで呼び起こす。「電話」と言われて「わ!!文明の利器！」と叫ぶ人はめったにいないだろう。このように、明治時代あるいは戦前から普及しているマシン達は、既に我々の生活と一体化している。はだか電球、けしごむ、時計…。

感覚の塗り替えは常に進行しつつある。ディスコ・ミュージックがアメリカで、ニュー・ミュージックが日本で、チャートの主流になった。クラフト・ワークはメジャーなディスコ・バンドとして受け入れられ、東京ロッカーズはメジャーなレコード会社からアルバムをリリースする。そして、ニュー・ウェイヴがロックの中心になった。



シーケンサーを使ったクラフト・ワークタイプの音は、スパークスの新作「No.1 In Heaven」によって完全に消化されたようだ。あんなに素晴しく楽しいレコードはほとんどない。イギリスのチャートに最近よく顔を出しているロビン・スコットの〝M〟というバンドもこのタイプだ。シンセサイザーもやっと実験音楽の領域から一歩踏み出すことができたといえる。アヴァン・ギャルドがアヴァン・ギャルドであり続けることに意味はなく、よい音は必ずメジャーなルートにのる。もし、あるバンドがいつまでもアヴァン・ギャルドのままならば、それは、実は前衛的ではないからだろう。実験的であるだけのバンドは受けない、奇をてらっただけではだめなのである。また、自らをアヴァン・ギャルドという言葉の中に温存するため、壁を作っている人もいる。希少価値だけを追い求めるほど、我々はバカじゃない。

アヴァン・ギャルドな状態というのは、ポップへの布石の結果なのである。いい音は売れるべきだ。

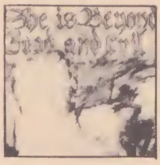
こうして、我々の感覚は日々刻々と研ぎすまされていく。昔は斧でからだをたたき切られたのに、今ではカミソリで神経をひき裂かれる。ニュー・ウェイヴの時代になってから、バンドの寿命が縮まったと言われる。解散とまではいかなくても、メンバー・チェンジは実に頻繁に行なわれている。そして、落ちつくのはワンマン・バンド的な形になったときのようだ。10年近く活動し続けているツェッペリン、フー、シン・リジー、フロイド、イエス等は非常に不自然な気がする。要するに、回転が速くなってきているのだ。我々の親達が気違いと決めつけるようなバンドが続々とメジャーになりつつある。〝常識〟では「変な」音が我々の興味をひく。

それにしても、日本でのデボのコンサートの熱狂ぶりにはちょっと驚いた。中、高校生がかなりいたようだが、完全にのっているようだった。初めの映画だけで相当興奮している人も多かった。デボの真意が日本人に理解されているかどうかは別にしても、こんなにも簡単に適応してしまっていいものだろうか。パンク・ファッションのように、際物として、ファッションとしてデボがウケている面はかなりあると思う。特に年寄りはそういった受けとめ方の人が多い。しかし、ノリまくっていた中学生はどうか。やはり、日本人は世界でもトップの人種なのか。我々の祖先は、古代日本原住民を倒したいくつかの大陸民族らしい。そして我々はいつも大陸の文明をとり入れて、改造して使ってきた。元来、根なし草なのが、日本人なのかもしれない。特に戦前と切り離された現代は浮遊物の集合ともいえる。我々は宗教を持たず、伝統をほとんど無視する、適応性に富んだ民族なのだろうか。とにかく、恐ろしいほど安易に新しいものが受け入れられていることは事実のようだ。

The Pop Group

ALBUM

「Y」
RADAR
RAD20



SINGLE

「She is Beyond Good and Evil」
RADAR
8″ ADA29
12″ ADA29(T)

ところで、下のグラフは世界の全人口の時間的経緯を示したものだ。グラフからわかるように、人々が初めの10億に達するまでには100,0000年から 200,0000年かかっているのに、10億人から20億人まではたった130年、30億人までは30年もかからず、40億へは10年しか必要としなかった。国連の予想では、2050年には確実に100億を越えるとされている。人口の増加は主に乳幼児の死亡率の低下によるから、人類の進歩の一指標として見ることが可能だろう。グラフから、斬近線は年間約1.6%程度の増加率を示す。（つまり増加率はこれ以上大きくなることはなく、ピーク時の1.9%よりはいくぶん下がって平衡状態に達する。）幼児の死亡率を低くすることが機械文明の進歩と対応していると考えるならば、人口の増加率が機械文明の進歩を表わしているといえる。斬近線が1.6%で引けるのだから、それ以上機械が加速的に進歩することはないだろう、という結論が出る。しかし、精神生活を支配する環境は、絶対人口が直接に示す。人口が多ければ、世の中は都市化していく。グラフで見るかぎり人口は真に爆発状態である。それと共に生活環境としての人間の数も〝爆発的〟に変化する、というよりは〝している〟のである。我々はこれに適応しなければならない。

このように、主に精神面の環境の変化が急激に行なわれつつある。それにつれて、我々の意識構造も形を変えているのだろう。それがどんなところへ行きつくのかは知らない。ただ、漠然とした不安が残る。

自分の意識などというのは極めていいかげんなもので、たえまなく変化しつづける。流動体のようなこの心は、どこへ流れつくのだろうか。あるいは、流れつづけるうち蒸発して跡形もなくなってしまうのだろうか。人類全体の意識が級数的、指数的に高められていき、我々の想像もつかない精神構造に達したとき――――脳の生理的限界を越えようとするようなことがあるとすれば、その時、それは何だろう。ユートピアか死か、快楽か苦悶か、今は何もわからない。

現在の状況の下で我々のできることは、とにかく、そこまで行ってみることだろう。新しい音を欲っしているのは確かなのだから。沈滞していれば新しい世代からとり残され、時代に埋めこまれてしまう。
THE POP GROUP
THIS HEAT
どちらもまもなくメジャーになるであろうバンドであり、アフター・パンク、ポストパンクの一角を担うことを期待されている。

ザ・ポップ・グループの方は、既にＥＰとＬＰが出ている。シングルは両面ともリズムの速い曲で聞きやすい。アルバムには特大のすごいポスターが付いている。彼らの音では、いわゆる楽器の使い方をされているのはベースだけで、ヴォーカルを含めて他のパートはいろいろやっている。そのわりには実験的だという印象はあまりなく、この意味では〝ポップ〟だといえるだろう。ジャケットの写真はパプア・ニューギニアの〝マッド・メン〟と言われるもので、文明の手のとどかないアジアの島々の土人達に伝わる祖先の象徴である。祭礼のとき、この泥の仮面をつけるらしい。ザ・ポップグループの欲するパフォーマンスは「tribal（種類の、部族の）」なものであり、パプアのマッド・メン達もそのイメージであるという。観客との間隔をせばめる努力もかなり強く行っていて、版権や印税に関してレコード会社との摩擦もあるようだ。メンバーは、

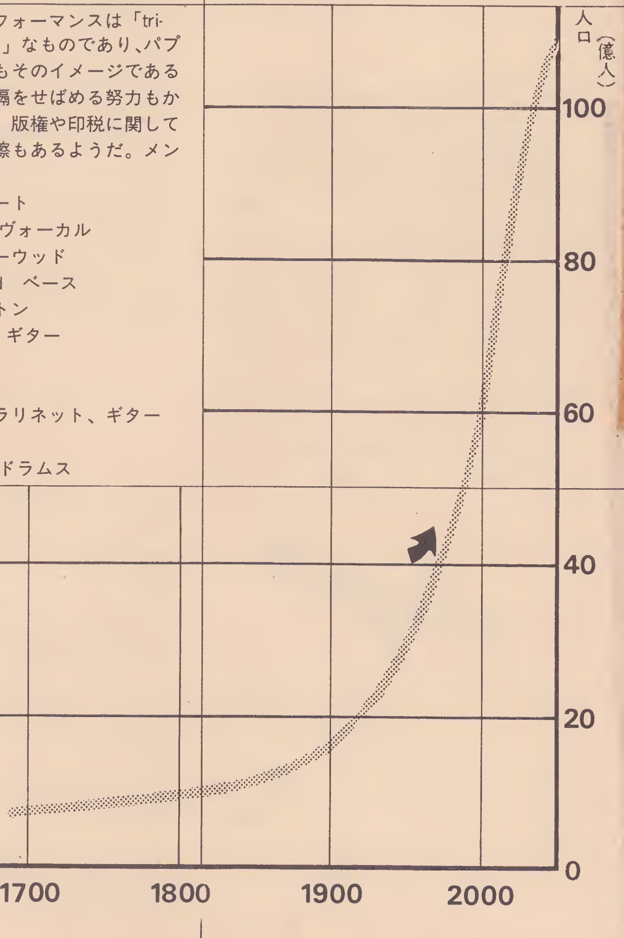
マーク・スチュワート
Mark Stewart　ヴォーカル
サイモン・アンダーウッド
Simon Underwood　ベース
ジョン・ワディントン
John Waddington　ギター
ガレス・セイガー
Gareth Sager
サックス、クラリネット、ギター
ブルース・スミス
Bruce Smith　ドラムス

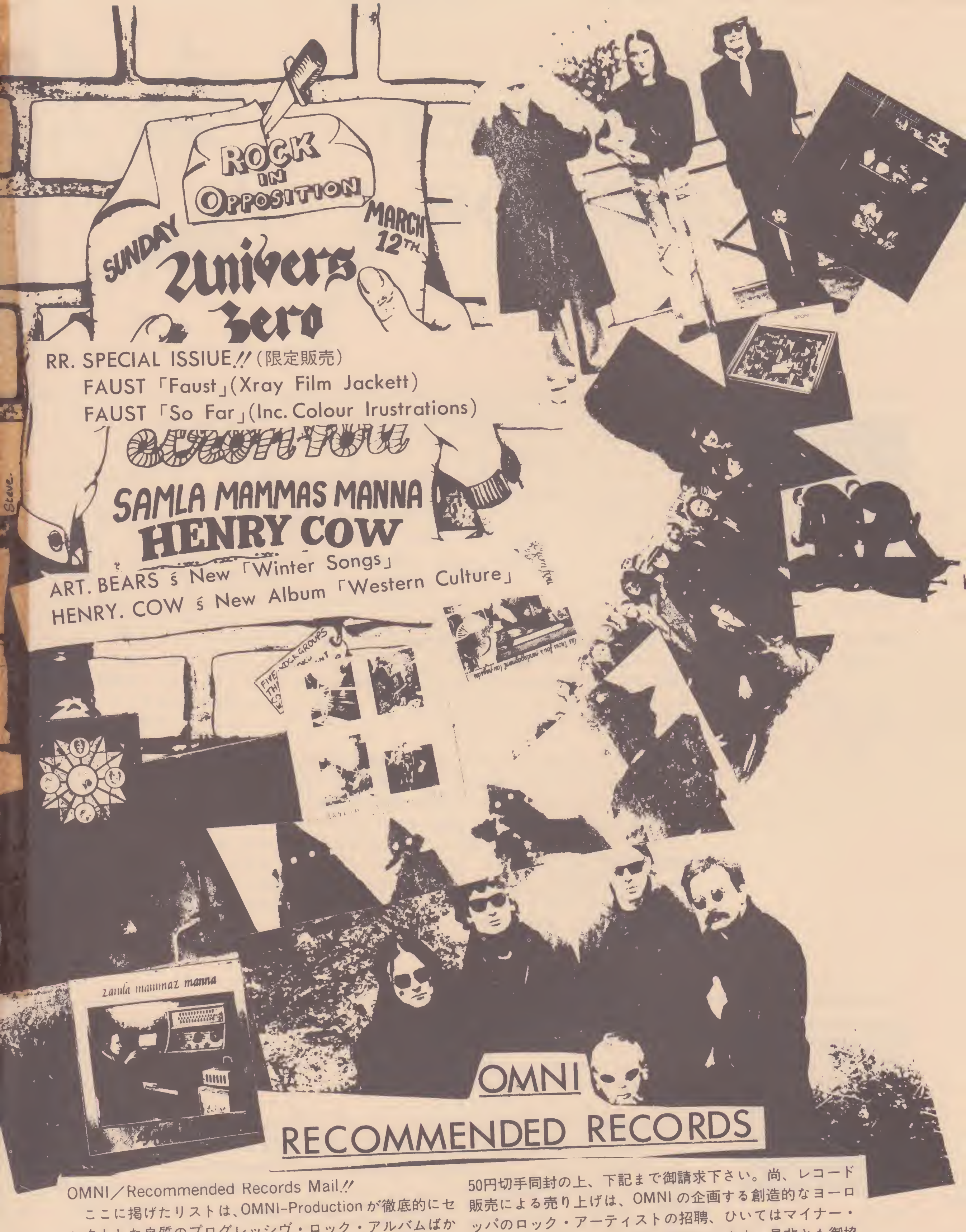
ディス・ヒートの方は、どちらかといえばまだ実験的である。メンバーは、

チャールズ・バレン
Charles Bullen
ギター、クラリネット、ヴォーカル
チャールズ・ヘイワード
Charles Hayward
ドラムス、ヴォーカル、キーボード
ガレス・ウィリアムス
Gareth Williams
オルガン、ヴォーカル、ベース

ポップ・グループと共にツアーをやったようだ。彼らは音楽とノイズの区別について考えている。チャールズ・バレンはリヴァプールからロンドンに来てフリー・ミュージックにかなり影響され、チャールズ・ヘイワードとデュオを組んだ。その後ガレス・ウィリアムスと３人でディス・ヒートを結成したのである。

ポップ・グループとディス・ヒートとの大きな違いは〝ポップ〟ということについての考え方だろう。ポップ・グループは、はっきりと「自分達の音楽を多くの人に聞いてもらいたい。」と言っている。そのために、ある程度の妥協をしてレーダーと契約した。ディス・ヒートは今だにかなりマイナーであり、スロッビング・グリストルのジェネシス・Ｐ・オリッジに「ガッツが足りない。」と言われたほどだ。売れたとしても、おもしろい音として売れるのではないだろうか。ポップ・グループは、いい音として売れそうだ。



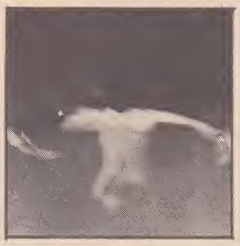


OMNI／Recommended Records Mail!!

ここに掲げたリストは、OMNI-Productionが徹底的にセレクトした良質のプログレッシヴ・ロック・アルバムばかりです。今まで殆んど入手できなかった名作が通販可能になりました。詳しい申し込み方法やリストを希望する方は、50円切手同封の上、下記まで御請求下さい。尚、レコード販売による売り上げは、OMNIの企画する創造的なヨーロッパのロック・アーティストの招聘、ひいてはマイナー・レーベル設立の資金の一部に充てられます。是非とも御協力下さい。

〒180 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-14-14 グリーンハイツ105号 Tel. 0422－21－8030
FooL's Mate／OMNI-Production 通販係

IMPORTED RECORDS



VANGELIS

China

F：Polydor Deluxe POLD 5018

「Spiral」あたりから中国の道教の言葉をひくなどして、その中国＝東洋的な指向・方向性を強めていたヴァンゲリスだが、このアルバムではいよいよタイトルも「China」と、彼のイメージする中国（ドラゴン、托鉢僧、桃の花、ヒマラヤ、道教……）を素材にして、奔放なイマジネーションとマルチ・キーボード・プレイヤーとしての力を十分に発揮している。昔の傾向は前作「La-feta sauvage」から引き続き、ロックというよりも現代クラシック的なアプローチが目立つが、しかし、多彩でファンタスティックで、なおかつある種の暗さ、重さを湛えた彼独特の音世界は健在であり、また、最近見られていた傾向、すなわちメロディーライン、リフの単純・単調化は増々深まっている。その結果として我々、聞き手はより自由な感覚で彼の音を捉えることが可能になり、そしてこれはまた、彼の新しい音楽的コンセプトとも密な関係があるようだ。では彼はなぜその新しいビジョンのテーマとして中国＝東洋を選んだのだろうか。同じように中国をメインテーマにしたものに最近ではアンディ・マッケイの「Resolving Contradictions」があるが、これは実際に中国を訪ずれた彼が目で確かめ肌で感じた事を以前に彼が抱いていた中国というイメージに投影させ、修正を加えたもので、その音は〝ローヤンのトラクター工場〟で働らく人々の力強い生命力をそのまま感じさせるような印象深いものだ。そして、それは主に「中国民衆の革命に向けられた熱情にインスパイアされたもの」ともいう。（しかし彼自身は必ずしもこのアルバムを中国をテーマにしたものとは言っていないようだが……。これはそれこそ矛盾していると思うのだが）

ヴァンゲリスの場合はどうやら、そういう実際的な面での中国＝東洋指向とは異なるようで、「Spiral」などで取り上げた螺旋、ひいては永劫回帰へと連なるような宗教、思想的な面での興味が大きいようだ。だが、そういった我々の推測とは関係なく、生理的にも気持ちのいい音の波が流れてゆく。東洋的な音階をぬって流れるアコースティック・ピアノ、ヴァイオリン、エレクトリック・ピアノの響きは風雅さ典雅ささえ感じさせてくれるもので、静寂で冷え冷えとした空気を回りの空間に漂よわせている。そして何故か、「China」というタイトルとは正反対にその透み切った叙情性を背景に壮大で枯れたヨーロッパの風景が見え隠れしているような気がして仕方なかった。とまれ、私はもうしばらくの間、もっと別の意識が私の内で芽生えるまでこの音世界に身を委ねていよう。夢は未だ遠く……。

（広川　裕）

SPARKS

No.1 In Heaven

U.S.A.：Elektra 6E—186

何とも場違いな感じがしないでもないが、スパークスの登場。彼らにとって6枚目にあたるこのレコードは、ドイツで制作され、〝機械、プラスチックの中の自分に血を流し込み、生を与える〟テクノ・ポップの世界だ。あのビル・ネルソンに言わせれば、「私の身体は電気仕掛け、君を廃人にもできる人間だ、触れるんじゃない！」といったところでしょう。最近のこれらの革新的なポップ・ミュージックも、元を正せば、ジャーマン・ロック。ニュー・ウェイブがジャーマン・ロックの影響を受けているのは一目瞭然だが、このスパークスがニュー・ウェイブに影響を与えたことに気づく人はほとんどいないかもしれない。一編して軽快なリズム・ダンス・ミュージック。その裏には〝未来〟に対する慎重な考えが潜んでいる。未来楽観主義へのアンチテーゼとなるのがこの〝未来で最高の歌〟なのです。ラッセル・メイルの声から有機物が消え、残ったのは、無機物、無表情。スパークス・ユニットは、デビュー当時からロンとラッセルの2人で完結してしまう。なにしろ、前作INTRODUCINGを発表して、ロサンゼルスに戻っていたメイル兄弟が、2年もの間沈黙していたのが不気味でたまらない。

（今野スミオ）

フランスの前衛ロック・シーンの驚異的な躍進と共に、にわかにその存在がクローズ・アップされ始めたのがベルギーのロック・シーンであろう。反対派ロックから登場したストリングス・ユニット、ユニヴェレ・ゼロや3rdアルバムで進境著しいシンフォニック・ロックの雄マキアベル、その他カンダール、フィフス・ボール・ギャングと注目すべき存在の目立つ中、ここに紹介するコスも実に魅力的なロック・グループのひとつである。元々、ベルギーという国のミュージシャンが国内で活動する場所といったら、5つの大学と20あまりのライヴ・スポットくらいしか無いという悲惨なもので（国の人口はわずか1千万足らずだ）オリジナルな音楽が発展する余地が殆んど無きに等しいにもかかわらず、コスの音楽はヨーロッパのロック・グループの中でも比類ない美しさと前衛的意欲を程よくプロパガンダしているのである。具体的には英国のカンタベリー系ーハットフィールズやギルガメッシュの音に割と近いが、女性ヴォーカルの持つ特異なエロティシズムやギタリストの荒っぽいプレイは、時としてそれ以上の精神的ほとばしりを感じさせてくれる。またキーボード奏者であるMarcHollander　はコスで活躍するかたわら、エレクトロニック・コラージュや難解な鍵盤技術を駆使したソロ・アルバムを〝カミカゼ〟というレーベルから発表している。
（北村）

COS

Viva Boma

Belgium：IBC 4B062-23605

マックスというのは、正式なグループ名ではなく、このアルバムにおけるリーダー格であるマックス・スーニィエからとった名称である。スパニッシュ・ロックに詳しい人ならばすぐにおわかりだと思うが、この人はイセベルグという人気ジャズ・ロック・グループのギタリストなのである。このアルバムは、いわゆるスーパーセッション・アルバムで、彼マックスの他に、ベースにスペインの第一人者といわれるカルレス・ヴェナヴェント（ムジカ・ウルバナのベーシスト)、ドラムスに元フシオン（伝説のスーパーグループ!?）のサンテ・アリサ……といった著名なプレイヤー達が集まって作られたものである（キーボードもイセベルグの人)。

サウンドはもろにジャズ・ロックといった感じで、中には殆んどジャズに近い曲もある。イキのいいエレクトリック・ギターを中心に、ビシっと決まったリズム・セクション、さらにセンス溢れるキーボード陣と、文句のつけどころ無し、といった感じのアルバムだが、特にスゴイのはB面2曲目のウルトラ・ラテン・サウンドで、有名なブラジル人のアルバムにも参加しているというパーカッショニスト、ティト・ドゥアルテのプレイが圧巻である。こういったセッション・アルバムがもっと出ているとすれば、それは絶対聴くに値するはずである!!
（山口尚武）

MAX

Babel

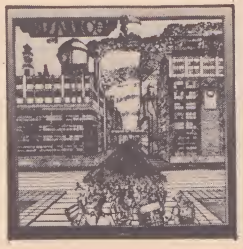
Sp：CFE BS32127

例のオハイオ・アクロンのバンド、ビザロスのデビュー・アルバム。なかなかコッたジャケットで、見ているのにはかなりいい。ところが内味の方は、ちょっと。デボやペル・ウブを聞いているだけに期待して針を落したのに、完全に裏切られたようだ。

そういえば、「アクロン」という殻だけで売っていこうというところが感じられる。だいたい出身地だけでバンドの性質を決めることなんかできないのである。あそこの都市から出て来たからいい音を出す、というような論法は成り立たない。ただ言えるのは、逆に、おもしろいバンドがあったとして、その「おもしろさ」を分析する上で出身地の影響を考えることはできる。

ビザロスの曲は、スティッフから出ているオムニバス・アルバム、「アクロン・コンパイレイション」にも収められている。地元アクロンのレーベル、クローンからもラバー・シティ・レベルズと共にレコードを出している。

裏ジャケに「Thanks To」として、デボやペル・ウブ、ヒューマン・スウィッチボードをはじめZig ZagやN.M.E.まで印刷されているが、いったいどういうつもりなのだろう。メンバー写真も、いただけない。
（瀬沼　俊隆）



BIZARROS

U.S.A.：Mercury SRM−1−[illegible].76

あのレジロスが戻ってきた。と書くだけでも熱くなってくる。たとえ音だけでも………。

彼らは、去年の夏ごろ突然チャートに入ってきたエディンバラのパンク・バンドだ。それよりも1年程前、エディンバラのレーベルからシングル盤を1枚出して少し注目を集めたレジロスだったが、活動のベースをつくるため、他のバンドのようにロンドンへ出て行くことはせず、エディンバラへ留まっていた。77年末、サイアーと契約し、2月にシングルを出した後、NYでアルバムを作った。発売が少し遅れて7月にシングル「Top Of The Pops」と同時にアルバムがリリースされたとたん、彼らの人気は熱狂的なものとなった。あのデビュー・アルバムほど興奮させる音はちょっと最近ないと思う。

しかし、その彼らも今年はじめには分裂してしまった。解散後もシングルを出したり、サイアーのパンク・バンドを集めたオムニバス盤に入ったりしていたが、今、レジロスのライヴが遂に出た。サンダーバードのイントロの迫力はすごい。

カップルのヴォーカルと躁病のリズムにたたき出される音は凄まじいとしか言えない。アニメチックな軽さと、気負わないストレートな感覚が快い。仕上がりとしては、ファーストの方が数段上だが、アルバム未発表曲も多く入っているこのライヴもファンとしては聞き逃せない。
（瀬沼　俊隆）

THE REZILLOS

Mission Accomplished…

But The Beat Goes On

E：Sire Spk6069

PEPAILLE
La Vielle Quel'on Brua
F:Balon Noir BAL13009

もしかしたらフランスという国は、世界で最もプログレッヴ・ミュージックの育成に適した環境を持っていると言えないこともなさそうだ。例えばクリプト・レーベルやコブラ・レーベル、潰れかかっているイサドラ・レーベルのように個性的な作品にあまねく接することができる。リパイルを出したバロン・ノアというレコード会社は、77年にＣＢＳの配下に発足した新生レコード会社である。ここのポリシーもまた個性的だ。トラデショナル・ヴォーカリスト、エマニエル・パレーニンや元マグマのキィボード奏者、ベノーア・ヴィデマンのソロ・アルバムなどがバロン・ノアのライン・アップだが、フランス・ロックの前衛性とロマンティックな伝統性の程よい調和を感じることができる。さて問題のリパイルの説明に移ろう。彼らのサウンドはイギリスでいうならばさしずめ、グリフォンでありジェントル・ジャイアントであり、初期ジェネシスに相当する。もちろん音が似ているというわけではなく、高度な演奏術が巧みに過去と未来のヴィジョンを往還し、かつ生命力を源泉にした有機的ぬくもりが保たれているという意味による。感情が自由奔放に流れ出て表現される美しさがフランス・シンフォニック・ロックの特徴だが、リパイルの場合は、何かに縛り付けられているような厳しさを感じるのだ。エレクトロニック楽器は無論、ヴァイオリン、リュート、リコーダーがいい音を出している。元トライアングルのギタリストがいる。
（北村）

Lewis Furey
The Sky Is Falling
G.RCA PL37254

ルイス・フューレイの歌は、カーテンの向う側から聞こえてくる。真昼の生活、エスタブリシュメントの生活の向う側の、もうひとつの世界。そこで人は目を閉じ、どんな禁忌にだって、身をゆだねてしまう。三人の女性ボーカルをまじえたルイスの声は、相変わらずとてもメランコリックで、頽廃的だ。

これはルイスの４枚目（にあたると思う）のソロ・アルバムで、彼が主に活動しているフランスから発売されている。彼はもうコマーシャルに売る気が全然ないのか、曲想は前作と殆んど変わっていない。中の二曲は、パリの芝居小屋で上演された演劇のため書かれたという。昔から、数多くの亡命者、革命家をむかえ入れ、独特な文化の二重構造を形作ってきたパリ。しかし、彼らは結局は異邦人である。ルイスもまた然り。Ｂ面のSong for Lorcaは、男性へのラブ・ソングだ。Lorcaという名前は､スペインの反戦詩人を思い出させる。いづれにせよこの人、男性へのラブ・ソングを歌わせると、どうしてこんなにいいのだろう。その複雑な心の綾は、とても私にはわからないのかもしれないけれど｡「僕の体中の筋肉が、あなたに出会いたがってる。ねえ、ロルカ、あなたのことを考えると、とてもロマンチックな気持になる。初めて恋をした少年のような、謹直な気持ちに。」
（Ｔ．Ｉ．）

BARCELONA TRACTION
Barcelona Traction
Sp：Oliba OL—09

スペインという国は、どうも廃盤にするのが好きな国らしい。このバルセロナ・トラクションというグループの唯一のアルバムも、75年に発表されたが、すでに廃盤になっている。イタリアもその典型で、これはラテン・ヨーロッパ気質を反映しているのかもしれない……などと下手なかんぐりをしてみたくなる。トリアナとグラナダも、それぞれ１stが廃盤になってしまったというウワサを耳にしたが、なんとも困ったものだ。しかし、日本に及ぼす影響の多大たるやを、よもやスペインの関係者たちは知るまい……。

ところでこのグループ、キーボード・トリオなのだが、ベーシストを除いて殆んど無名の人であるという。スペインにはこのグループクラスの一流プレイヤーがひしめき合っているのかと思うと、今さらながら感心してしまう。やっていることは、わりとつかみどころの無いジャズ・ロックなのだが、やはりスペイン固有のセンスが印象的なアルバムである。誰かが「スペインのナショナル・ヘルスだ！」と言ったのを記憶しているが、そんな感じがしないでもない。しかし、今一つのオリジナリティーが欲しい……とつぶやきたくなる１枚だ。ゲストでオーケストラ・ミラソルのパーカッショニストが参加していることをつけ加えておこう。
（山口尚武）
（マックスのところで言い忘れたので､この場を借りて一言……｢マックスのジャケット最高!!｣）

RUPHS
Manmade
G：Brain 0060. 175

ノルウェーのルーファスの最新作である。実に久々という感じがするが、実を言うとボクにとってちっとも待ち遠しくなかったのだ。ところが、ジャケットを手にとってクレジットを何の気無しに見ると、なんとなんと、あのガドニー・アスパースが帰ってきているではないか!!前々作“インナー・ヴォイス”以来、あのブタ女のいまわしいシャウティング・ヴォーカルに僻易して、その存在すら忘れかけていたルーファスだったが、あのガドニーを擁して再びボクの所に戻ってきたのだ……!!

本作はイギリス録音で、サウンド自体にかなりの余裕が感じられる。ガドニーの一種独特な渋味のあるヴォーカルは健在で、６曲中実に５曲まで彼女のヴォーカルがフィーチュアされている。“レット・ユア・ライト・シャイン”ではたったの２曲、しかもスキャットのみだったので、ボクとしては万々歳だ。正直言って前作の“フライング・カラーズ”は聴いていないので、Brainの前の２枚と比較することになるが、いわゆる「しゃちこばった」ジャズ・ロックをやっていたルーファスだが、本作では実にリラックスしたプレイを展開している。前にも述べたが、ガドニーの声というのは独特で、変な言い方をすると「白人らしからぬ」ヴォーカリストなのである。その彼女も、円熟味を帯びた歌を披露しており、全体的に見て実に聴き易いアルバムとなっている。快作!!
（山口尚武）

テクノ・ポップだか、何だか知らないけど、そんなのが氾濫している中で、ドイツのスカイレーベル19番に登場したのが、このアルバム。アデルベルト・フォン・ディエンという人なんか全然知らないのだが、ボクはこのレコードを手に取った時、何のためらいもなく買ってしまった。と言うのは、ジャケット・デザインがスゴク、クラウス・シュルツのアルバムに似ていて、裏ジャケなんか、もろにシュルツの「サイボーグ（ブレイン盤）」を意識しているからである。それもそのはず、何のことはない、“ Special thanks to klaus schulze for his help”。

さて、内容はと言うと、これまた上記の通り、Ａ面が「ブラック・ダンス」でＢ面が「サイボーグ」という感じ。しかし、似ていると言っても、単なる曲の構成であり、クラウス・シュルツのユング的集合無意識に深く根ざした、シュールな空間サウンドをスカイレーベル独特の業で料理した音とでも言おうか。かつて、シュルツが「サイボーグ」や「ブラック・ダンス」で試みた、体験的音楽、何ともわけのわからない寓意画を、平淡な絵本にして、肌ざわりよくしたという感じである。

とにかく、シュルツ・ファンなら一度は聴いてみたら……。結構、頭がコズミック・ジョーカーズになるかも……。

（山本　雅幸）

ADELBERT VON DEYEN

Sternzeit

G : Sky 019

フランスのジャズ・ロック・グループ“エディション・スペシャル”の２ndアルバムである。前作ではキーボード及びヴォーカル担当のアン・バレステール紅一点のグループだったが、本作で女性ヴァイブ奏者が１人加わり、紅二点となった。さあて、その女性ヴァイブ奏者とは一体誰でしょう……？女性ヴァイブ奏者といったら、この人ぐらいしか居ない。そう、元ゴングのミレイユ・ボーエルだ。いつの間にかゴングに参加した謎の人物だが、いつの間にかゴングを脱退し、そして今度は突然こんなところに顔を出したわけである。彼女のプレイは、ゴングにおけるそれよりもフィーチュアされておらず、むしろもう１人の女性アンのキーボードとヴォーカルの方がはるかに印象的なアルバムだ（先輩後輩関係の女の冷戦でもあったら面白いと思うのだが……）。

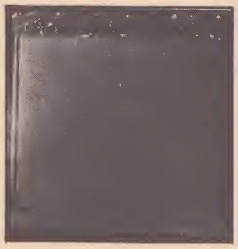
内容についてだが、前作よりはしまりがあって聴くに耐え得る出来となってはいるものの、リズム・セクションの甘さがたたって（これはフランスのグループの致命的な欠点とも言える）、やはりもう一息といったところである。サウンドは、ミレイユの在籍した時期のゴングの出来そこないといった感じである。もう少し上手く間をとって、効果的な音の使い方をしてくれれば……と思うのだが。それにしても、こういったリズミックなジャズ・ロックにフランス語が奇妙にマッチしているのがいとをかし……。（山口尚武）

EDITION SPECIALE

Horizon Digital

F : RCA PL37215

イタリアの前衛的なロック・シーンのムーヴメントは、クランプス、オルケストラ、アスコルトなどの改革的なポリシーのレコード会社のアーティストによってアクティヴに展開されている。大御所アレアを始め、元アルティ・エ・メスティエリのジジ・ベネゴーニのグループ、ベネゴーニ＆カンパニーやアウロ・パガーニの壮絶な作品はそれを裏付けるに充分なものだが、イタリアでは多少保守的な雰囲気のレコード会社、ディスキ・リコルディのナポリ・チェントラーレの名前は、しばしばそういったアーティストの群から遠いように思われている。実際に僕もナポリ・チェントラーレがイタリアで非常に人気があることは知っていたのに、何故か食指が動かなかったのはまさに認識不足の所以である。現在までにナポリが発表した３枚のアルバムの中で最も新しい作品「Oualcosa Ca……」の素晴らしさはどうだろう。アレアなどが秘めるアグレッシヴなエネルギーと変則的なフレーズによる展開を、ナポリはより原初的で線の太い混沌としたムードの中で成し得ている。エコーのかかった独得のサックスの音色や重くて即興的な感覚に溢れたピアノ、そしてエネルギッシュなリズム・セクションの上に、叫びのようなヴォーカルが暗い地の底から湧き起こるかのように精神的な緊張感をかもしている。Ｂ－１のボレロのリフレインの感動的なことといい、イタリアに現存する最もパワフルなグループ、ナポリ・チェントラーレの面目躍如である。（北村）



NAPOLI CENTRALE

Oualcosa Ca Na Mmore

I : Ricord SMRL6224

前回のイタリア特集でも少し紹介したアンジェロ・ブランデュアルディは、いまやイタリアが世界に問うことのできる唯一のアーティストだ。ブランデュアルディの通算５枚目にあたるこのアルバムは、彼が初めて英語で歌い英国でも発売になった記念すべき作である。英詩のプロデュースには元キング・クリムゾンのピート・シンフィールドがあたり、ブランデュアルディと共にムジザ・プロダクションの支柱であるプログレッシヴ・グループ、バンコのジャンニ・ノセッティもキーボードで参加している。ちょうど75年にＰＦＭが世界各国で発表されたのと同じ様なケースだが、ブランデュアルディの音楽性はＰＦＭやバンコの様なロック・グループのそれとは大きく異なったものであることを最初に明記しておかなければなるまい。

彼の音楽を率直に表現するならば、それはヨーロッパの歴史的アイデンティティーなるものが永きに渡って継承しているフォーク・ソングの形式に乗取ったものなのである。スコット・ランドからバルト海沿岸、そしてフランスとドイツの山岳地帯を通じてイタリア北西部に流入してきたバラッド、レイといった民謡を現代的にアレンジしたものがブランデュアルディの音楽だ。バラエティーに富んだ民族楽器がシンセサイザーやエレクトリック・ギターと共に中世の面影をそこはかとなく漂わせ、澄み切ったブランデュアルディーの声がファンタジックな物語をつづってゆく。ヨーロッパが生んだ詩的で幻想的なスーパー・スターの登場である。（北村）

ANGELO BRANDUARDI

Highdown Fair

I : Polydor 244807

RECORD REVIEW 国内盤

文・北村　昌士

エクスポージャー／ロバート・フリップ

虹色の朝／スティーヴ・ハケット

イルリヒト／クラウス・シュルツ

ロバート・フリップ／エクスポージャー
ポリドール　ＭＦＰ1239

元キング・クリムゾンの魔術的オーガナイザー、ロバート・フリップのソロ・デビュー・アルバム。うわさでは２枚組といわれていたが、実際には１枚でタイトルも「エクスポージャー」に変更されている。何はともあれ今年のロック・アルバムの中でも最も興味をそそる１枚であったことは確かだろう。御存知のようにこのアルバムの参加メンバーは、ピーター・ハミル、ピーター・ガブリエル、イーノ、ダリル・ホールと実にイカしている。髪を短く刈り込み、黒っぽいスーツを着たロバート・フリップの変貌は、そのまま現時点での前衛ロックの在り方を反映しているようだ。つまり、フリップのような人々にとって〝今〟とは非常にチャンスに満ち、それでいてとても現実的問題を多大に背負った厳しい試練の時期でもあるようだ。しかしこのアルバムは、クリムゾン・キングの幻影に未だ魅せられている人も、またテクノ・ポップからプログレッシヴ・ロックに興味を持った人も、ハミルやガブリエルのファンの人も、皆それぞれに85%くらいの満足感を味わえるようにつくられている。全ての作業はフリップの意図的な計算であることが明瞭であるだけに、このアルバムの存在感はとてつもなく大きいのである。

スティーヴ・ハケット／虹色の朝
フォノグラムＲＪ7601

スティーヴ・ハケットの経歴についてとやかくいうのはよそう。ピーター・ガブリエルと共にジェネシスの音楽的な最盛期を創り上げたこのギタリストにとって、ソロ・アルバムがジェネシスの音楽の延長上にあることを云々されるのはあまり好ましいことではないだろうから。彼は過去に２度に渡るソロ・アルバムの発表で、正統的な英国人としての詩的コンセプトの所有者であることを自ら明らかにしている。みずみずしいまでの清楚なヴィジョンとファンタジーへの信奉を核に、優美な音と深みのあるメロディーに並々ならぬ執着心を寄せ、ウィリアム・ブレイクの伝統を引き継ごうかという意気込みだ。この美しい作品は無論、悲しくなるほどに現代の本質とはかけ離れたものだが、このレコードに共感できないとしたら、人類の将来に救いはない。

アンソニー・フィリップス／サイド
フォノグラムＲＪ7602

アンソニー・フィリップスもスティーヴ・ハケットと同様に元ジェネシスのギタリストという肩書きを持ち、同じく３枚のアルバムを発表している。限りない夢想者としてのアンソニー・フィリップスの個性もまた、ハケット同様に詩的な世界、透明な内面を映し出すことにたけているのだが、音楽に対する多少イージーな姿勢は彼の存在をハケットよりも数段低いものにしているような気がする。もちろん逆にいうならそんな彼のオープンな感覚が思いがけない成功をもたらすことになるのかも知れないのだが……。バック・ミュージシャンはびっくりするほど実力のある人達ばかりだ。元クリムゾンとかキャラバンとかレッドブッダとか……。

ブラフォード／ワン・オブ・ア・カインド
ポリドールＭＰＦ1233

UKは、エディ・ジョブソン、ジョン・ウェットンと、新たにＢＲＦＯＲＤなるグループを結成した、アラン・ホールズワースとビル・ブラフォードに完全に分離した。UKは、アランとビルの脱退の穴を、若いエディ・ジョブソンを前面に押し出すことで見事に解消し、ＢＲＦＯＲＤもビルのソロ・アルバムに見られた伸びのある演奏を展開している。確かにUKは、ブラフォードにとってみれば〝廻り道〟的存在のグループだったのかもしれないが、そこを離れ、新たに自己のグループを結成したという事実は、ブラフォードが元キング・クリムゾンとしての自己の肩書きを完全に振り切った、ひとつの証左ともとれる。

パティ・スミス／ウェイヴ
フォノグラム25ＲＳ－24

多くの人々はパティ・スミスのアルバムに、第２次ロック・ドリーム――即ちニュー・ウェイヴのエネルギーに基いた、肉体的緊張感と詩性を感じ取ろうとやっきになっている。しかしパティ・スミスのアルバムは、ファースト、セカンド、サードと経るにつれて増々対外的エネルギーが内面的な位相に換置されてゆくようだ。申し訳ていどに仕つらえたロックン・ロールは白ける。むしろエレガントで繊細な〝女〟の感覚の方により魅力がある。《ハードなロックン・ロール・スピリット》だと？ふざけるな、決まり文句で売ろうなんてパティに対して失礼だよ。

ジャン・ジャック・バーネル／ユーロマン・カメス　　キングＧＰ721

カセット・テープで聞いたジャン・ジャックのソロ・アルバムから、一時非常に興味を抱いたスロビング・グリッスルやオルタナティヴ・ＴＶ、レッド・バルーンなどアヴァンギャルド・パンクの音を感じ取った。ヨーロッパが共同体意識を高め、外側（特にアメリカ）へとエネルギー放射を行なう際の方法論を、ジャン・ジャックはテクノロジーとの結合の中に見出したのだ。そして詩は、ずっと後になって知った歌詞の中身はもっと多くの破壊的なエネルギーが詰まっていた。もしもヨーロッパ人全体の潜在意識の中に、彼のアジテイションのような暴力性が秘んでいるのなら、第３次世界大戦もそう遠いことではなかろう。その時には日本もいよいよ米中ソの分割統治が待っている。アジアのドブネズミの最期だ。

サテン・ホエール／ロスト・マンカインド
キングＧＸＦ－2047

サテン・ホエールが未だ生き残っていたとは……。キングのクリエイティヴな企画のおかげでメッセージやサテン・ホエールの健在ぶりを知り少なからず恩恵をこうむりました。

サテン・ホエールは確か僕の家にも73年頃ブレイン・レーベルから出たやつが１枚あるが、当時の彼らはドイツ的な内にこもったような陰性のハード・ロックをプレイしていた。彼らの他にもキン・ピン・メーとかイプシロンとかブレイン・ストームとか訳の分からないのがいっぱいいたっけ。前衛ジャズから電子音楽、そしてハード・ロック風超イモ・バンドまで、まるでドイツのロック・シーンは巨大なゴッタ煮のナベの中のようだった。そんなカオスの中でもみくちゃになってしまったかのような雑多でスリリングな音楽性が、現在のサテン・ホエールの持ち味である。

クラウス・シュルツ／イルリヒト
テイチクＳＵＸ－175－ＥＢ

７年前、ドラッグでやつれ果てたような弱々しい少年の瞳には何が映っていたのか。〝イルリヒト〟は通訳すると〝狂光〟という意味になる。クラウス・シュルツのソロ・デビュー作であるこのアルバムには僕もいろいろな思い出がある。時間の感覚はしだいに遠方へと遠ざかり、観念的なエネルギーが体中からどろどろと噴き上げてくるような異様な体験の中で一晩明かすと、朝の太陽と空気は眩しいくらい鮮かで美しかった。

レッド・ノイズ／触れないで！僕はエレクトリック

マガジン

夢譚／ノヴァリス

新月

〝死〟に対する恐怖と〝生〟に対する執着とは、ある意味で同率のベクトルを持っているような思いにかられ、形而上の異界をのぞき込んでしまったような強烈な価値認識を抱いた憶えがある。幻想が現実の壁を引き裂いてしまうような音楽のエネルギーは実在する。そしてこの作品にとって7年の時の流れなど無に等しい。嘘だと思ったら君の耳で確かめてくれたまえ。ただしライナーは読まない方がいい。

ビル・ネルソン＆レッド・ノイズ／
「触れないで！僕はエレクトリック」
東芝ＥＭＩ　ＥＭＳ－81216

東芝の厳しい国内発売基準を見事クリアーして登場したレッド・ノイズのデビュー・アルバム。知っている人はもうよーく知っているだろうけれど、ビル・ネルソンは元ビー・バップ・デラックス。僕などは同名のフランス・アヴァンギャルド・バンドのことをとっさに思い浮かべたが、これは異常以外の何物でもない。ロキシー・ミュージックとよりアグレッシヴなパンクの両極を激しくスパークさせたようなノイズのサウンドは、好きな人からは徹底的に支持されるであろう〝つぼ〟をこころえている。Ａ面の２曲目「ヤング・モダーンに捧ぐ」とは、どこかの雑誌の愛読者のために考えついたようなタイトルじゃないか。

マガジン／
ビクター　ＶＩＰ

ヒトはサルではない。だから常に前方にヴィジョンたるものを掲げ、それに向かって進化を試みる。ある日突然ニュー・ウェイヴの連中の中の大部分にその基本的意識の欠落を見た。特に日本の連中ときたら横の志向（つまり外国）ばかり気にして前がまるで見えないサルばかりだということに気がつき、そうした連中が何の必然性もないままにディーヴォやＵボックス、マガジンなどの音まで〝所有〟していることを知り頭にきた。かといって僕がどうこう騒いでどうなるものじゃない。理知的生命体を自負する人々よ、このアルバムを生んだ背景がいかに広大無辺のフィールドであるか、そしてそれとの関わりを意識することなしに〝音〟のみを楽しもうとすることがどれだけ怠惰で愚かなことか……リアリティーが海の向こうから歩いて来る時代は終った！

ノヴァリス／夢譚
テイチクＳＵＸ－15－ＥＢ

ドイツのトップ・グループであると同時に、日本で紹介されるジャーマン・ロックのアーティストの中でも比較的安定した知名度を持ったノヴァリス。最高傑作である「ゾマーラベンド」は、日本で最も売れたジャーマン・ロックのアルバムだ。唯ジャーマン・ロックといってもノヴァリスの音楽は、クラフトワークのコンセプトと表裏一体を成す〝もうひとつのドイツの顔〟を表わしている。つまりホフマンやリルケ、ノヴァリスのような作家を生み出した神秘主義に基くロマンの流れとでもいおうか、禁欲的で古典的な世界に精神の安息を求めようとするヨーロッパ人独自の空間を創造するロック・グループなのだ。このアルバムも時折無理矢理ポップを気どったようないやなムードが現れるが、全編はリリカルで美しい。ジャン・ジャック・バーネルばかりが〝ユーロ・マン〟じゃないのだ。

Ｍ／ポップ・ミューヂック
ビクター　ＶＩＭ－1364（シングル）

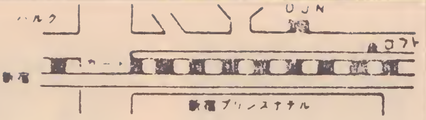
本誌の７号でドイツの音楽界がディスコの成功によって大きく変ったありさまをレポートしたけれども、それを読んだ大阪某誌の編集長が自分の本におもしろいことを書いていた。即ちディスコが未来の音楽にとって欠かせない要素を含んでいる――みたいな内容だったようだが（違っていたらごめんなさい）この意見をイギリスで実行して見事に大成功した男がいる。〝Ｍ〟という実はロビン・スコットなる本名の英国人が自費出版で発表したシングル盤「ポップ・ミューヂック」は、英国のチャートで第１位、また全ヨーロッパでの大ヒットの兆しもあるというから大変だ。ボウイばりの屈折したヴォーカルはニュー・ウェイヴ風、バックの音はもろにテクノ・ディスコ。このような無名の天才が次々と現れ、ポップスの革命が着々と進行しているのが今の英国でありヨーロッパなのだ。

新月／新月　ビクター　ＺＥＮ1009

７月25日に発売される新月のレコード・デビューにいろいろと関わって、改めて日本での〝ロック音楽を媒介にした芸術活動〟がいかに大変なものか実感した次第。しかし相次ぐ苦労の末に生み落されたこのレコードは、いままでの日本のポピュラー・レコード産業がつくり上げたどの作品よりも傑出していることもまた事実だ。新月の音楽があなたのお気に召すかどうか、一刻も早くレコードを聴いて欲しいと同時に、25日と26日の２日間にわたるデビュー・コンサートのライヴ・パフォーマンスにも是非接して欲しいと思う。そして日本にも夜明けが来たことを感じてくれたなら幸いだ。

輸入レコード・ショップ

新宿店　(365)5267



開店2周年 スーパー・バーゲン

7月25日(水)よりスタート 8月19日(日)マデ

★五百円市、千円市、など ビックリ・コーナー
★期間中の新フは全てサービス・プライス
★英盤、レギュラー・新フを1,000円 1,800円で放出

super Bargain

〈バースディー・プレゼント〉今月は7月生まれの方1000円以上の品全て300円引きてす(身分証をお持ち下さい)定休日7月10日　7月22日

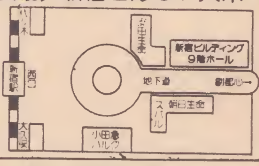
オム

オランダ, ドイツ, イギリス, イタリー, フランス盤　続々入荷中!!

'79"破格値大売出し"

日時：7月21日(土)
22日(日)　2日間　時間：10:00〜7:00

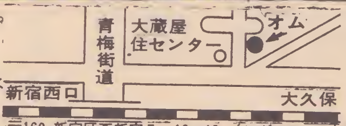
〔会場〕新宿ビル9F大ホール



値上りムード、ムンムン中での¥300より最高値段¥1,580までのビッグバーゲン

1—Guet Apens	¥2,880
2—Au-Dela Du Delire	¥2,880
3—Emile Jacotey	¥2,880
4—ANGE Le Cimetie re	¥2,880
5—ARRA Maledetti E	¥2,880
6—AREA Arbeit Macht Frei	¥2,880
7—AREA Crac	¥2,880
8—MONA LISA Grimaces	¥2,880
9—MONA LISA Le Petit Violon	¥2,880
10—MEMORIANCE Et Apres…	¥2,880
11—JEAN MICHEL JARRE Oxygene	¥2,880
12—LA MONTE YOUNG Marian A Zazeela	¥2,880
13—POPOL VUH Osferatu	¥2,880
14—RUPHUS Mammade n	¥2,880
15—WAPASSOU Salammbo	¥2,880
16—CARPE DIEM En Regardant	¥2,880
17—GROBSCH ITT Rockpommel N	¥2,880
18—GROBSCHNITT Live	¥2,880
19—TERRY RILEY 2LP	¥4,880
20—ANGE 1970—1971 2LP	¥4,880
21—EPOPEE DE EPIC OF GILGAMESH 2LP	¥4,880
22—STEVE REICH Drumming Music For 3LP	¥4,880
23—EPITAPH Return To Reality	¥2,880
24—R.WUNDERBAR Wunder Bar	¥2,880
KLOY Floating	¥2,880
ELOY Dawn	¥2,880
ELOY Power And The Passion	¥2,880
ELOY Ocean	¥2,880
ELOY Live 2LP LP	¥4,880
VERTO Krig／Volubilis	¥2,880
POLE Inside The Dream	¥2,880
[illegible]GO Four Seasons	¥2,880
ATOLL (全種)	¥2,880
OCTOPUS An Ocean・	¥2,880
EUGENIO FINARDI Diesel	¥2,880
EUGENIO FINARDI Sugo	¥2,880
MICHAEL ROTHER Sternaler	¥2,880
MICHAEL ROTHER Flammende Herzen	¥2,880
HARLIS	¥2,880
RAMSES Laleyla	¥2,880
AREA Caution	¥2,880
AREA Zione	¥2,880
CHARLEMAGNE PALESTINE	¥2,880
CARPE DIEM Gueille Le Jour	¥2,880
ALQUIN Nobody Can Wait	¥2,880
PAUL BRETT Arcane	¥2,880
AMON DUUL Almost Alive	¥2,880
AMON DUUL Lemmingmania	¥2,880

通販致します!!ご希望の方は下記の要領でお申し込み下さい。
(1)2枚以上に限ります。
(2)必ず第2希望をお書きの上、現金書留で。(切手代用不可)
(3)送料は3枚まで550円(北海道・山口・九州は700円)4枚以上は1枚につき50円加算。
◎お問い合わせ(在庫の有無など)は往復ハガキで!



年中無休

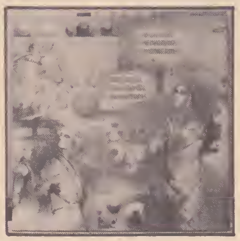
オム

〒160 新宿区西新宿7-16-15 (シダビル1F) ☎(03)371-1999 11am〜8pm

新宿レコード・輸入盤紹介

★ここに紹介するアルバムはヨーロッパ盤のごく一部です。

ワパス　(新譜)



マキャベル (新譜)

マグマ (1)

デリリウム (1)

Philippe. Besombes

スロッピング・グリッスル／1	(英)
／2	(英)
マイケル・ブント／Neon	(独)
デリリュウム／Dolce Acqua	(伊)
ニュートロルス／U T	(伊)
オサンナ／Palepoli	(伊)
グルグル／Hey du Guru Guru Sunband	(独)
センセーションズ・フィックス／Flying Tapes	(伊)
Philippe Besombes／Libra	(仏)
ペル・メル／Only A Star	(独)
ニュートロルス／Concerto Grosso NO. 2	(伊)
アトール／L'Araiqnee-Mal	(仏)
ワパス／Ludwiq	(仏)
マグマ／ATTAHK	(仏)
マグマ／First Album (2枚組)	(仏)
ギルガメシュ／2	(英)
Roedelius／Jardin au Fou	(仏)
Carpe Diem／I	(仏)
Carpe Diem／II	(仏)
センセーションズ・フィックス／Boxes Paradise	(伊)
センセーションズ・フィックス／Portable Madness	(伊)
Ange／Guet Apens	(仏)
Ange／1970－1971 En Concert	(仏)
Ange／Tome VI	(仏)
Ange／Par les fils de Mandrin	(仏)
Ange／Emile Jacotey	(仏)
Ange／Au-dela du delire	(仏)
Ange／le cimetiere des ar lequins	(仏)
アシュ・ラ・テンプル／VI & Seven Up	(仏)
アシュ・ラ・テンプル／Rosie	(仏)

〒160・東京都新宿区西新宿7-9-6・寿ビル1階・TEL(363)3669
営業時間(平日)11～19時(休日)11～17時・定休日・毎週月曜日

新宿レコード

★ニュー・ウェイヴもいよいよ多様化してロックすらあらぬ方向へ進み出してゆくみたい。あとはあなた方の静かで確かな耳であなたのロックを築いて下さいネ。

脳溢血・動脈硬化症・中風・めまい・不眠・肩こり・耳鳴・頭痛・神経痛・利尿に……

仏盤:エッグレーベル
各種あります——
英盤:スロッピング・グリッスル/T.G
——ニューウェイブ/シングル各種
あります——。

「チャンス」ディーヴォとピストルズのLPお買い上げの方にライブ・スチール(キャビネ版)プレゼント!!!
——数に限りがありますのでお早めにどうぞ——

募集

下北沢音楽館参加ミュージシャンを募る!!!
——プロ志向の方に限ります——
デモ・テープ持参の上御来店下さい。
……〆切.毎月20日……

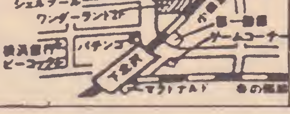
輸入盤もあるレコード・ショップ

五番街

池袋 東武エア・キャッスル10F
豊島区西池袋1-1-25(985)6824
AM10:00～PM9:00 年中無休

NEWS
レコード針が1割引きになる会員証発行中!!!

下北沢 ワンダーランド 2F
世田谷区北沢2-32-6(469)2624
AM11:00～PM8:00



cross road vol.5

J.J.BURNEL, TALKING HEADS, THE CLASH, U.K., JAPAN etc.

¥300（送料共）

スタッフ大募集！

〒156 世田谷区上北沢4-4-11
東陽荘103号 今野スミオ TEL 329-6232

ANOTHER SIDE

26-4 UDAGAWA-CHO SHIBUYA-KU TOKYO

FEELING SPOT
FUTABA

COMME des GARCONS
renoma HALF

鎌倉銀座通り

鎌倉市御成町5-35 Tel. 0467-22-2829

レコード テープ

フジ

葛飾区西新小岩 1—10—1
TEL (692) 8665

中古レコードの専門店です。高田馬場からワセダへ向う大通り300m。
太陽神戸銀行から6軒目
☆レコード高価買入

TAKADANOBABA
レコードショップ
タイム

レコードの専門店

トーホー堂

国電新小岩アーケード街

TEL (653) 0121

こころ

COFFEE HOUSE

営業時間
a.m.9:00～p.m.11:00
木曜定休

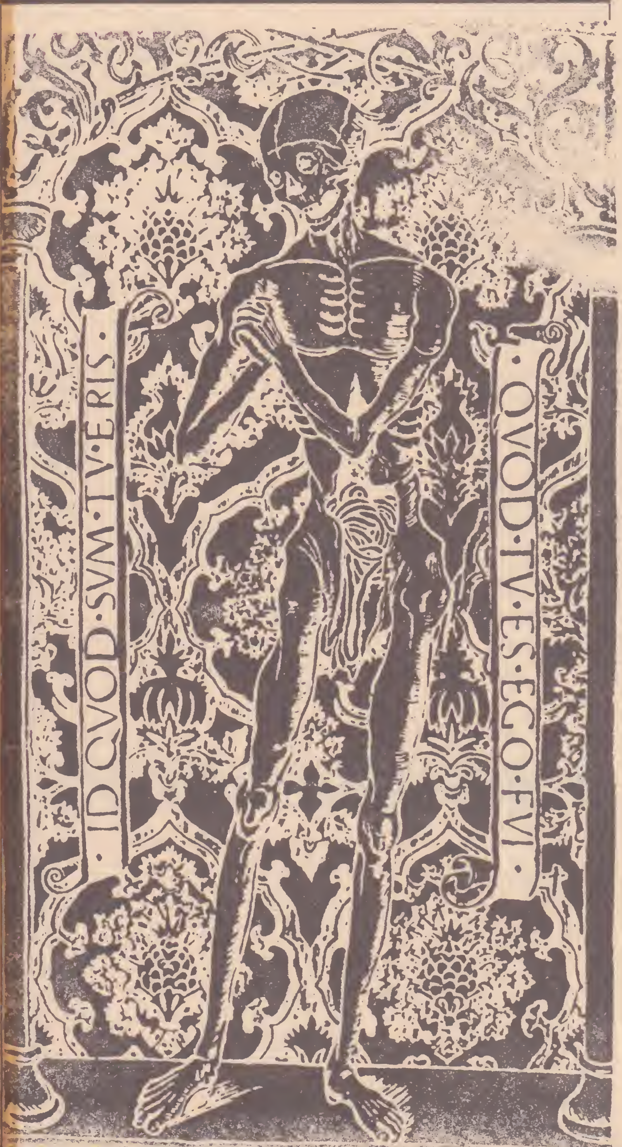
行徳街道京成車庫前
TEL (26) 8818

大きな駐車場があります

Information

8月のディスク・コンサート（於マイナー）は第３水曜日と第４水曜日に変更いたします。内容はマイナーまでチラシを請求して下さい。(要50円切手)

９月８日(土)ＰＭ4:00より、池袋西武内CITYにおいてフールズ・メイトによるパフォーマンスと討論会が催されます。出演はフールズ・メイトのスタッフ他、竹田賢一氏、田中泯氏、フリー・ミュージック・グループ、ガラパゴスが登場します。料金はドリンク付で700円です。



OMNIPROUCTION委託廃盤オークションについて

リスト・アップされたレコードは御希望の方にお譲りします。ただし値段は完全なオークション形式のものと、委託者の強い要望で予め決定しているものと２種類あります。希望者はレコード名と希望価格を往復ハガキに書いて編集室気付でお送り下さい。(電話による問合せは御遠慮願います。)また委託希望者も歓迎いたします。

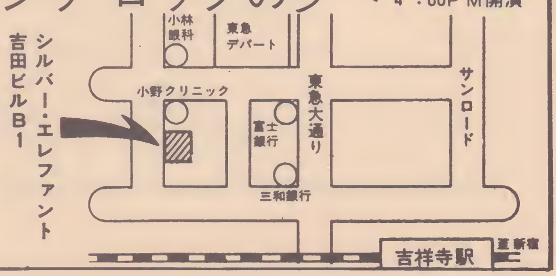
Alran Rod 1	Sonet
Alran Rod 2	Sonet
Oldman & the Sea	Sonet
Pan	Sonet
Day of Phoenix Wide Open N-way	Sonet
Day of Phoenix The Neighbour's son	Sonet
Midnight Sun 1st	Sonet
Midnight Sun Waiking Circus	Sonet
Opus 3 & Friends (Janne Schefler)	Sonet
Second Life	Sonet
Neon Rose	Virtigo
PFM Per Un Amico	Numero Uno
Formula 3 La Grande Casu	Numero Uno
Ossanna Palepoli	Fonit
Banco 1st	Ricordi
Napoli Centrale 1st	Ricordi
Napoli Centrale Mattaza	Ricordi
Napoli Centrale Qualcosa	Ricordi
Storm	CBS
Granada Habro De Una Tierra	Gong
Triana 1st	Gong
Fusion Minorisa	Ariola
Third Ear Band Alchemy	Harvest
Rarebird	Charithma
Zygort	polydor
Riff Raff	RCA
Nucleus We 'll Talk About it Later	Virtigo
Nucleus Elastic Rock	Virtigo
Nucleus Solar Plexus	Virtigo
Nucleus Labylinth	Virtigo
Nucleus Roots	Virtigo
Nucleus Belladonna	Virtigo
Still Life	Virtigo
Keith Tippet Dedicated to You	Virtigo
Jade Warrior Autumn's Dream	Virtigo
Jade Warrior Released	Virtigo
Jade Warrior We Put Our Magic On You	Virtigo
Fairfield Parlour	Virtigo
Lucy Lucy Lie Back & Enjoy	Virtigo
Nirvana Local Anaesthting	Virtigo
Or.Z Three Parts...	Virtigo
The John Dammers Band Blue	Virtigo
Big Sleep	Pegasus
Fashia	Pegasus
Atomic Rooster	Pegasus
Shape of the Rain	Neon
Becket	Raft
Alain Can	D. Moters
Lard Free	Vamp
Heldon 2nd	Vrus
Ash Ra Temple 1-4th	
Gru Gru UFO	Ohr
Gru Gru Hinter	Ohr
Annexus Quam Beziehungen	Ohr
Garactic Super Market	Cosmic
Sifi Party	Cosmic
Achim Reichel AR 3	Zebra
Achim Reichel Eoho long	Brain
Lady Pig Creative Rock	Brain
Gunter Schickelt	Brain
Hardcoke Special	Brain
Lava	Brain
Curly Curve	Brain
Heavy Chrismas	Pilz
Karthago	Basf
Embryo We Keep On	Basf
Sweet Smoke Just A Poke	EMI
I Drive	Metronome

Silver Elephant ――プログレッシヴ・ロックの夕べ　4：00ＰＭ開演

LIVE HOUSE & RESTAURANT

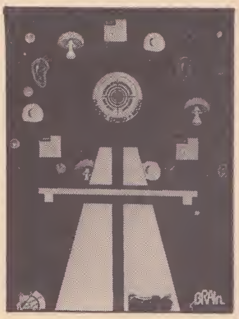
8/1（水）	ゴールドファンキーコーン	￥500
8/6（月）	川崎のりひろ＆スキャンダル	￥800
8/8（水）	オクトパス	￥500
8/13(月)	夢織人	￥500
8/15(水)	ＳＨＡＲＡ	￥500
8/20(月)	ＴＨＡＮＡＴＯＳ	￥500
8/22(水)	美狂乱	￥800
8/27(月)	ムーンライダース	￥1,500
8/29(水)	新月	￥800

吉祥寺本町２－10－８
ＴＥＬ0422－21－8081
平日営業　11：00AM～



Letters

German Rock ージャケット・コピー集
コピー製　22頁、￥500　〒料120
Brain, Ohr, Cosmick, Pilz, BASF　のレーベル・カタログ
ジャケ写約180枚掲載
〒112　文京区大塚2－17－8　滝沢まで



Fools Mate のレコード評にはいつも感激します。北村さんのおかげでいろいろすてきなグループを知れたのです。おくれてる、と言われるかもしれませんが、今一番気に入ってるのはAtoll なのです。高校のころはフランスというと、Gong関係しか知らなかったし、あのころはもうGong以外は総ダメという感じだった。大学に入って１年くらいは何故か音楽から離れていたし……。それでフールズメイトをエロスの特集くらいの時に読んで再度音楽が生活の中にもどってきた、という感じ。だからいつも感謝しないと、と思ってます。Henry Cow やV. D. G. なんかが、ずっと好きだったのですけど、周辺に話せる人がいなくなってしまって、おまけにほとんどの音楽誌もろくにとりあげてくれないから、情報不足で忘れてしまいそうになってしまっていたんです。高校まではロックが好き、なんて言ってた人も大学へ入ったり、社会へ出ると、コロッと態度が変わってしまって淋しかった。

Moerleinが狂って（としか考えられない）Gongが終ってしまって、今はAtollが一番と思ってはいるのですけど。次回もまた、Fools Mateですばらしいレコードなりグループを紹介して下さいね。

練馬区　武田博子

フールズ・メイト（Vol. 8 ）の北村氏のLast Wordsを読みました。「…… 今は感覚的な優越感に浸るよりも、現実的な自己の無力を嘆く方が先です。２千いくら払ってレコードを買うことなど誰でも出来ることなのですから。」という言葉に心打たれ、又、とても勇気づけられました。僕も今まで何万というレコードを買いあさっていた１人です。（とは言っても、めずらしいものへの優越感ではなく、何万出しても価値のある内容のレコードだと思っているからですが……）

だから、もちろん、今度のキングレコードの企画のものと、多く重なるものがあります。しかし、このような素晴しい企画を続けるためにも、一部のマニアのもので終わらないためにも（めずらしいものへの優越感の競争が本当に聞きたくても入らない一部のマニアのものだけにしてしまった）。

本当に２千いくら払うことは自分達の出来る唯一の、そして最大限のことなのだから。（それに、すばらしいアルバムは２枚でも３枚でも欲しいと思うし、そう思わせるのが本当にすばらしいアルバムでしょう）とにかく、あのイタリアン・ロックが、キング・クリムゾンやピンク・フロイドなどと、何の変わりもなくレコード店に並べられるのを楽しみに待とうと思います。

P.S. この前の廃盤コンサートで聞いた「エマニエル・ブーツ」と「アーサー・ブラウンズ・キング・ダム・カム」は、本当にすばらしいＬＰでした。何とか、このＬＰを売ってくれる人、いないでしょうか？値段は少々高くてもいいです。ジャケット、オリジナル盤など一斉問いませんから、もし、売ってくれる人がいたら、お願いします。葉書で連絡下さい。

練馬区北町３－15－10
上野新吾

最近、Fools Mate　の読者になりました。V.D.G.G.はどうも神がかっててあわないんですが、SoftsやGong、なんとNational Health などが出て来てナミダにくれています。Dave StewartなきあとのHealth　はどうなるのでしょうか？Cow 系に乗っ取られてしまうのでしょうか？Brufordはもうひとつ。Camelよ、Peter Bardensよもう一度。Pink Floydの今度のアルバムは？もうブタなんか飛ばさないで。イエスのライブ手ぬきじゃないかしら？Rick Lindenまた買ってしまった。カヤックだけじゃあきたらず、またヤマハの裏工作で、ＧＸ－１なんて、たいそうなもんを。ギルガメッシュ２枚目いつ出したん？

なんて線で次号期待してます。

大阪市城東区　松山行一

ロバート・フリップ・ファン・クラブ（ポリドール公認）結成。会員募集中！
入会希望の方は、下記まで50円切手同封の上、ご連絡下さい。
〒165 中野区野方１－29－５
中野ハイネスコーポ502 森川方
ロバート・フリップ・ファン・クラブ

目黒駅前　百万弗ビル

8F
一流の料理と素晴しい展望！
宴会貸ホール　グランビア
●PHONE／446－8845

3F
気ままに過ごす、もうひとつの夜
パブレストラン　オレンジローブ
●営業時間／5:00PM～4:00AM
●PHONE／446－8845(代)

2F
100名様の団体予約OK！
純喫茶　プリンス
●営業時間／8:00AM～11:00PM
●PHONE／442－3301～2

B1
海賊般のムードが漂う本格派のコンパ！
パブ・バー　目黒オーシャン
●営業時間／5:00PM～11:30PM
●PHONE／446－6887

Fool's Mabo

83長島茂夫	〒183　東京都府中市四谷５－41－１
84菅野公一	〒192　東京都八王子市中野上町１－18－２ コーポ宮川
85藤崎　登	〒185　東京都国分寺市戸倉１－23－25
86勝又　泰彦	練馬区下石神井１－338 第２戸倉荘１－Ｂ
87　角田幸一	〒336　浦和市領家475－12

入会方法

登録料200円分の切手を同封の上、編集室まで送って下さい。会員になった人には、プレゼントなど優先的に送ります。

FOOL'S MATE BNの紹介

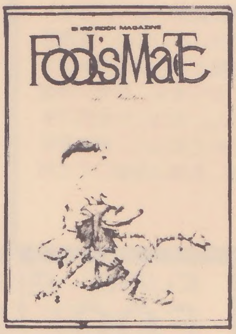
Euro Rock Magazine
vol.1 vol.2 Eros　売りきれ

Vol.3 在庫少々　定価480円
特集 極私的ブリティッシュ・ロック再認識エッセイ集
V.D.G. History Vol.3
北欧ロック デンマーク、ノルウェー編
レーベル・ピック・アップ
フランス・クリプト
10CC直撃インタビュー
特集 エレクトロニック・ミュージック
ピーター・ガブリエル・インタビュー Vol.1
イタリアン・ロック・カタログ
ジャン・ミッシェル・ジャール

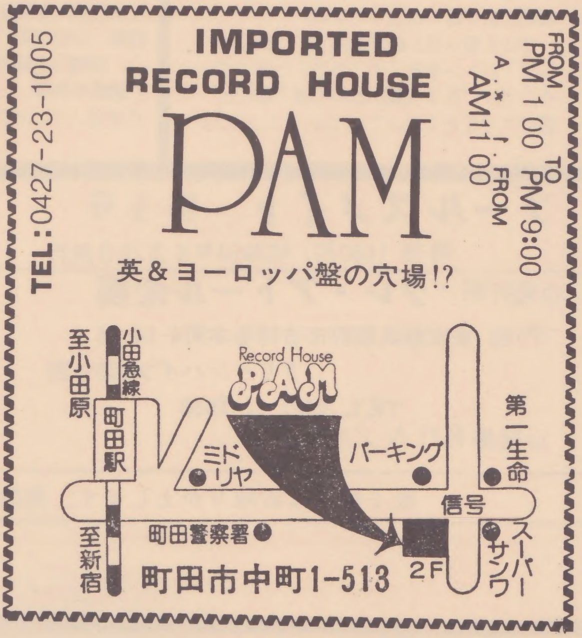
Electronic Music 在庫少々 定価580円
特集 Euro Electronic Music の旗手達
インタビュー&完全ディスコグラフィ
イーノ、クラウス・シュルツ、ティム・ブレイク
特集 イタリアン・ロック 1979
ブリティッシュ・ロック秘匿の名盤集

御希望の方は定価＋送料(160円)の郵便為替同封の上、編集室まで送って下さい。
送料2冊200円 3冊以上250円

Fantasy 売りきれ 定価880円
特集 ファンタジィ
——ユーロピアン・ロックの狭間にて
来日特集 デレク・ベイリー
ピーター・ガブリエル
——インタビューvol.2
レーベル研究
イタリア ヌメロ・ウノ
全訳 "アイランド" キング・クリムゾン
"In Camera" ピーター・ハミル
"新ノア記" アンジュ



Avant-Garde 在庫少々
定価 580円
特集 アヴァン・ギャルド
変革のための果てしなき増殖
英国ジャズ・ロック・シーン全貌
人名、アルバム解説
レーベル・リスト
ヘンリー・カウと反対派ロック
竹田 賢一他
インタビュー特集
ロバート・フリップ
ピーター・ガブリエル
トニー・バンクス
スティッフ・レーベル



FOOL'S MATE 次号予告

世界に急迫する日本のロック・シーン
マイク・オールドフィールド
フランス・ロック　Part IIetc.

フールズ・メイトの配本拡充に協力して頂ける地方の方（東京都以外）連絡下さい。詳しい要領はこちらから説明いたします。

☆Translation Project 会員募集中!!
Fool' s Mate では翻訳を専門としたグループを結成しています。英仏独伊その他の言語に自信のある方は、どしどし応募して下さい。　（問い合わせ：編集室）

Last Words

ロック・ミュージックに於ける詩性とその深遠を根気よく堀り下げようと考えて「ファンタジィ」「エロス」そして今回の「オカルティズム」の特集を企画しました。今という時代に最も深く関わった芸術活動は、〝ロック〟という領域を通過してのみ可能であるという僕の確信は深まるばかりで、それに同調してくれる人達もとても多くなってきました。文学のための文学、絵画のための絵画、知識のための知識が一般社会の芸術概念を支配している現代にあって、ロックという名のフィルターは、個々の目的意識の確立にあたってより力強いエネルギーと明瞭な輪郭を与えてくれることでしょう。

また今回少々価格を上げなくてはならなかったことに関して少し言い訳がましいことを言わせてもらうなら、印刷代と売り上げがまるで見合わない状態を少しでも解消してゆくための苦肉の策として了承して頂ければ、と思っています。（Kitamura）

また夏が来た。

たぶんロンドンにはない強烈な日差しと茹だるような暑さと共に。でも、夏は好きだ。熱きつくすような太陽の光が去る夕方、空気の重さが伝わってくる瞬間、かげろうの作るゆがんだ空間と時間は心を反転させてくれる。水蒸気の流れる夜は、明日の熱気を秘めて澱んだ波を送る。

日常生活と、音とのギャップは精算済のはずなのだが、どうしてもつっぱった部分が残って、たまに起こる異次元を想わせる環境に身を置くとスッとする。

今年の夏は少し時間を作って、東京のパンク・バンドを見て歩こうかとも思っている。ライヴを2枚聞いたりでは、音の比重が大きすぎてついていけないバンドが多かった。もっと軽くタイトなカラカラカンカンした音が欲しい。

ところでピンク・レディがビルボードのチャートを上昇中だそうで、正に感慨無量の極みの今日此頃です。

（瀬沼　俊隆）

昼間は蒸し暑い熱風に砂塵が舞い上がり、夜になると白金色の大きな六月の月（ムーン・イン・ジューン）。なんて物凄い季節でしょう。毎日の生活はドミノ倒しのゲームみたいで、一つのことがきっかけで色々なことがバタバタとおこり、思いがけないヒトと出会ったり、仲良くなったりする。今回オカルティズムの原稿をお願いした渡辺仁氏、御存知の方もおられると思うけど、初期のロック・マガジンを作っていた人だ。今私がこういうところで働いているのは、もとはといえば2年前の夏に京都で氏に叱咤された事に関連している。今どうしておられるのかな、と思うととてもなつかしい。ところでこの雑誌は、編集長の謹厳なる人格を反映してか、スタッフの紹介などあまりしない。でもこの際だから、皆の年令と星座をかくと、こうなります★北村君・22・蟹座　増田君・22・射手座★瀬沼君・21・牡牛座★三津間君・22・牡羊座★高石君・22・乙女座★しかし、この頃の男の子って、何て綺麗な手をした人が多いんだろう。（T．I）

ユーロ・ロックに多少なりとも興味のある方なら、そのロック・シーンにイギリスのプログレッシヴ・ロック・グループ（特にキング・クリムゾンとジェネシス）が多大な影響を及ぼしているというのは御存知でしょう？今回特集したエルドンのギタリスト、リシャール・ピナスは、ロバート・フリップを彷彿とさせる、とてもアグレッシヴな、注目すべきギタリストです。（エルドンは、近い将来、日本盤として登場しそうです。）

ギタリストといえば、元ジェネシスのスティーヴ・ハケットが、プロモートの為来日するとか。このハケットや先頃来日したティム・ブレイク等は、日本における知名度となると今一歩で、まだまだ「来日イコール日本公演」、とはならないようです。彼らが本来的な〝ミュージシャン〟として、再び来日することを期待して……。(三)

スタッフ募集のおしらせ

フールズ・メイトは、今後より一層内容を充実させ、同時に組織的運営の拡大に力を入れてゆきたいと思います。そのため、営業面及び編集面に於ける有能でガッツのあるスタッフの加入を熱望しております。年令・学歴、職業、性別は問いません。本当にやる気があり、時間的金銭的に余裕のある人、編集室まで連絡をお願いします。詳細は面接にて北村が決定いたします。

STAFF…

高石　源太	増田　洋
瀬沼　俊隆	三津間　功
磯村　知子	広川　裕
小笠原　望	

Special Thanks to……

山口　尚武	小田　恵子
渡辺　勝美	今野スミオ
片山　紀之	斉藤　徳子

フールズメイト　第9号
特価（680円）昭和54年6月25日発行
☆発行所／クレ・アトール企画
〒180 東京都武蔵野市吉祥寺本町4-14-14
グリーンハイツ105号室
TEL 0422-21-8030
☆編集発行人／北村昌士

EURO ROCK MAGAZINE
FOOL'S MATE
Published by Cre－Atool Planning
Green heights 105, 4－14－14, Kichijoji－Honmachi, Musashino－City, Tokyo, Japan
phone :0422－21－8030
Chief Editor : Masashi Kitamura

乱丁落丁はお取りかえします。無断転載・複写・放送その他を禁じます。

―テクノ・ポップの先駆者―

XTC 来日!!

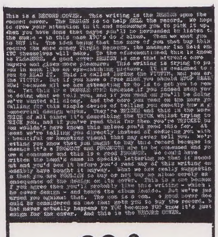
ズバリ!!快感

来日公演スケジュール

8/20 九段会館
8/21 九段会館
8/22 京都円山野外音楽堂
8/23 大阪御堂会館

お問い合わせ：
トムズ・キャビン
☎(402)9463

気楽にいこうぜ
VIP－6904



GO 2
VIP－6928

¥2,500

来日記念シングル
8/1 ライフ・アット・ザ・ホップ
VIP－2740 発売予定 ¥600

新編成による期待の3rdアルバム
9/25 サード・ストーリー
VIP－6940 発売 ¥2,500

今や完全にロンドンを二分するモダーン・ミュージック・ファクトリー、スティッフとヴァージンがまたもや都市に放つ驚異の新生命体！未来を志向し、現代を鋭く射るコンテンポラリー・ニュー・ウェイヴ遊星群!!

独自のカリスマ性をふりまくハワード・デボート率いるマガジンの燃えあがる最新第二作！

マガジン
夜明けのロンドン・ストリート
VIP－6936 ¥2,500

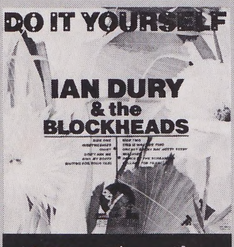
ハード+パンクの新しき衝撃。君達も早くこの未知のショックに打たれてみろ！

恐怖のダンス
スキッズ
VIP－6933 ¥2,500

ニュー・ウェイヴ戦国時代のロンドンから、ヴァージンの送る若き五人組！

メンバース
チェルシー・ナイトクラブ
VIP－6935 ¥2,500

厚いハートとクールな目で、ブリティッシュ・シーンをリードする熱血漢イアン・デューリー！



イアン・デューリー
ドゥ・イット・ユアセルフ
VIP－6673 ¥2,500

妖しい美貌でセクシーにシャウト。まぎれもないニュー・ロック・クィーンの誕生！

リーナ・ラヴィッチ
スティトレス
VIP－6628 ¥2,500

Virgin　STIFF RECORDS

Victor

発売元：ビクター音楽産業株式会社

かつてこれほど美しく哀しい愛の語り手を知らなかった。

水晶のようにきらめいているアルの感覚とセンスと信念!!

タイム・パッセージ

●RVP-6328 📼RCP-1581 各¥2,500 プロデュース：アラン・パーソンズ

アル、傑作中の傑作。

イヤー・オブ・ザ・キャット

●RVP-6166 📼RCP-1519 各¥2,500

初期のアルバム3枚からベスト選曲。

アーリー・イヤーズ

●RVP-6289 ¥2,500

AL STEWART

来日決定!!

来日公演スケジュール
- ●7/22［日］東京・渋谷公会堂
- ●7/23［月］東京・中野サンプラザ
- ●7/24［火］大阪・フェスティバル・ホール
- ●7/26［木］東京・中野サンプラザ
- ●7/27［金］名古屋・名古屋市公会堂
- ●7/29［日］札幌・北海道厚生年金会館

お問い合せ先
東京、大阪＝音楽舎☎03(404)7341, 06(313)7181
名古屋＝フライト・ミュージック☎052(203)1735
札幌＝ネモ・カンパニー☎011(271)3805

RCA Records and Tapes
発売元／RVC株式会社

フールズメイト オカルティズム
昭和五十四年六月二十五日発行 隔月二十五日発行 第三巻三号 通巻九号
特価680円